「世界の日本語学習者」と歩んだ「夫婦の35年」

「日本」をもっと知って、〝日本ファン〟になってほしい！
～自宅（五年間は老人ホーム）で〝草の根〟交流～

大森和夫・大森弘子 編著

1989年（平成元年）→2023年（令和５年）

- 世界の《日本語作文コンクール》を通算 26回主催
  応募総数=6 万 2,726 編（作文と俳句）の中から
  「72 編（49 カ国・地域）」掲載
- 独自の「日本語教材」を作成→80万部超寄贈→電子書籍で公開

教師・学習者の「感想」と「活用法」など

朝日新聞出版

「世界の日本語学習者」と歩んだ「夫婦の35年」

写真で見る夫婦の「日本語交流活動」35年間

（敬称略。肩書等は当時）

1989(平成元)年3月

日本語学習、情報誌　季刊誌『日本』(28頁)を創刊・寄贈

留学生と海外の日本語学習者に“日本語で日本と日本人を理解してもらうための学習・情報誌”（各号28～40頁）

題字＝中国の留学生　羅剣（書）
（東京大学医学部医用電子研究施設）
表紙＝「紙工芸品」（高さ2メートル11センチ）
タイの留学生　スワン・メーターピスイット
（東京藝術大学大学院博士課程油画教育研究科）

内容＝竹下首相のメッセージ
数字で見る日本
大相撲の楽しい見方
年中行事と季節の言葉
「日本で生活するには」
工場見学記
日本の昔話
奨学金情報
第1回《日本語作文コンクール》の応募要項

4万部を発行し、留学生のいる国立、公立、私立大学93カ所、日本語学校67カ所、海外の大学（日本語学部）や広報文化センターなど19カ所の計235カ所に寄贈。

国内の大学や海外へ季刊誌『日本』を郵送する梱包作業、東京都練馬区の自宅で

1989(平成元)年

第1回 留学生《日本語作文コンクール》

テーマ＝「日本（日本人）のここが好き、ここが嫌い」、
「日本（日本人）への期待と注文」

表彰式（1989年9月26日、文部省）
前列右から2人目、最優秀賞（文部大臣賞）・李春植（中国）
前列中央・石橋一弥文部大臣

第1回作文集
『私たちが見た裸のニッポン』
（1989年10月、朝日ソノラマ刊）
全応募作文525編を収録、298頁

1989(平成元)年～1990(平成2)年

留学生との交流

1989年7月

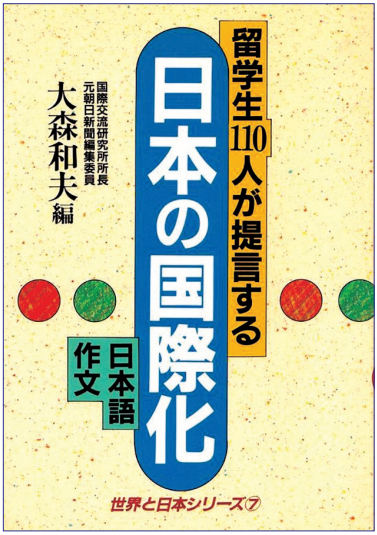
1990年12月

中国、韓国、バングラデシュ、タイ、香港、チベット、台湾の留学生と勉強会・懇談会
いずれも、東京都練馬区の自宅で

1991(平成3)年

第2回 留学生《日本語作文コンクール》

テーマ＝「日本の国際化のための提言」



応募総数＝816編
優秀賞＝中国　石平（神戸大学大学院、男）
タイ　マリン・タナンパイ
（早稲田大学文学部、女）
アメリカ　ケイ・グレゴリ
（関西外国語大学、男）
ら10人

第2回 入賞作文集『日本の国際化』
110編を収録。236頁。
日本教育新聞社刊

1992(平成4)年

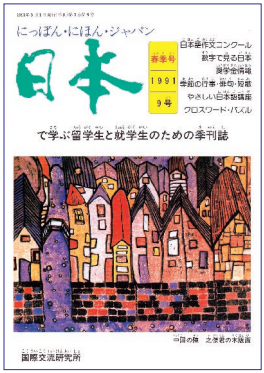
第3回 留学生《日本語作文コンクール》（中国の留学生のみ）
第1回 中国の大学生、院生《日本語作文コンクール》

テーマ＝「21世紀の日本と中国の役割」
応募総数＝中国の留学生・249編　　中国の大学生、院生・450編
一等賞＝中国の留学生　　王頎（お茶の水女子大学、女）
中国の大学生・院生　高媛（吉林大学、女）

表彰式・第1回 中国の大学生、院生《日本語作文コンクール》
前列右・一等賞の高媛（1993年4月、天津市の南開大学）

～1994(平成6)年

季刊誌『日本』(～24号)を寄贈

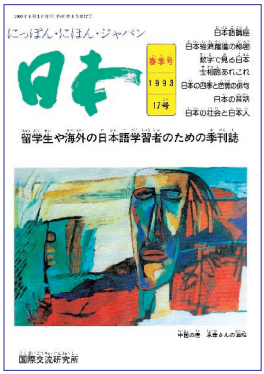


表紙の木版画
中国の留学生
陳之傑
(大阪芸術大学)

9号 (1991年3月)
40頁 3万部

表紙の中国画
中国の留学生
張導曦
(早稲田大学)

16号 (1992年12月)
40頁 3万部



表紙の油絵
中国の留学生
唐承華 (愛知県立芸術大学)

17号 (1993年3月)
40頁 2万部

表紙の中国画
中国の留学生
張爽
(多摩美術大学)

20号 (1993年12月)
40頁 2万部

表紙の中国画
中国の留学生
郭継英 (多摩美術大学大学院)

22号 (1994年6月)
40頁 1万5千部

表紙の水墨画
中国の留学生
陳允陸 (関西学院大学大学院)

23号 (1994年9月)
40頁 1万5千部

1992(平成4)年～1996(平成8)年

季刊誌『日本』が縁で、中国の天津、大連、北京を訪問!

1992年9月、南開大学（天津市）
右・王健宜先生

1993年10月、遼寧師範大学（大連市）

1996年4月、東北財経大学（大連市）　中央・方愛郷先生

1996年4月、北京大学（北京市）

1994(平成6)年

第4回 留学生《日本語作文コンクール》
第2回 中国の大学生、院生《日本語作文コンクール》

テーマ＝「私にとっての日本」
応募総数＝留学生・803編　　中国の大学生、院生・281編

第2回 中国の大学生、院生《日本語作文コンクール》

表彰式（1994年5月、天津市の南開大学）

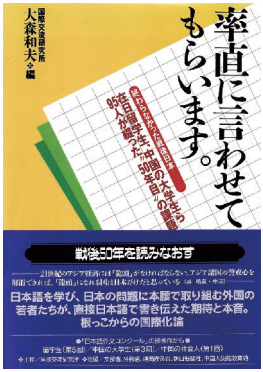
一等賞の二人が訪日（1994年7月）
左・路邈　　右・高媛
（東京都練馬区上石神井の自宅で）

1995(平成7)年

第5回 留学生《日本語作文コンクール》
第3回 中国の大学生、院生《日本語作文コンクール》

テーマ＝「戦後五十年・日本に望むこと」
応募総数＝留学生・728編　　中国の大学生、院生・514編

第三回 中国の大学生、院生《日本語作文コンクール》の表彰式
（1995年5月、大連市の遼寧師範大学）



入賞作文集（95編）
朝日ソノラマ刊

1995(平成7)年～1997(平成9)年3月

季刊誌『日本』(25号～33号(最終号))を発行、寄贈

表紙の写真
清水寺(京都市)

26号 (1995年6月)
40頁 1万5千部

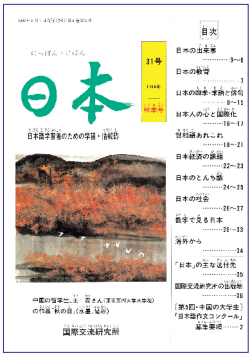
表紙の写真
国会議事堂
(東京都千代田区)

27号 (1995年9月)
40頁 1万5千部

28号 (1995年12月)
36頁 1万5千部

29号 (1996年3月)
36頁 1万5千部

30号 (1996年6月)
36頁 1万5千部



31号 (1996年9月)
36頁 1万5千部

32号 (1996年12月)
36頁 1万5千部

33号 (1997年3月)
36頁 1万5千部

29号、30号、31号の表紙の水墨・岩彩画は中国の留学生、王青(東京藝術大学大学院)
28号は東京都庁、32号は浅草寺の羽子板市、33号は32号までの季刊誌『日本』の写真

1997(平成9)年3月

季刊誌『日本』の発行・寄贈は1997(平成9)年3月で終了

季刊誌『日本』は8年間に、**留学生の多い国内の大学と日本語学校・約110校、中国、韓国、タイ、台湾、インドネシア、カンボジア、バングラデシュ、アメリカ、フランス、エジプト、イギリスなど41カ国・地域の大学や日本語学校、外務省の海外文化広報センターなどに寄贈。**（一部は、外務省、大学などが「買い上げ」）

季刊誌『日本』の内容

日本の出来事、年中行事と季節の言葉、季語と俳句、日本経済、日本伝統
スポーツ・文化、数字で見る日本、日本語講座、伝統の文化、古典文学、
政治の動き、日本経済躍進の秘密、日本人の行動様式、世相語あれこれ、
日本の昔話など。
～ルビ・イラスト付き～

（内容は号によって、一部異なる）

1997(平成9)年9月

南開大学日本語科（中国・天津市）の47人の学生・教師から《寄せ書き》
“苦節8年心より感謝します。”ヨコ1.1メートル×タテ78センチの布

『日本』は、私の学習生活にとって掛け替えのない友達でありました　金東海
『日本』の雑誌は大学の四年間の中で一番懐かしい記念品でありました　呂暁陽
多くの事を『日本』で教えて頂き、心から感謝しております　金明姫

1996(平成8)年

遼寧師範大学(大連市)に「日本学習研究中心」を寄贈

遼寧省大連市の遼寧師範大学に、「大森日本学習研究中心（センター）」を寄贈。
1996年3月にオープン式典。

遼寧師範大学外国語学院（曲維院長）の校舎4階の3つの教室を改造して作りました。事務室（管理室）、図書・資料室、映写室（会議室）、合わせた広さは118平方メートル。図書・資料室には、日本語学習と日本研究に必要な書籍（日本語辞典と文化、歴史、経済、政治、文学等の分野の本）を備え、新しい「日本と日本語」関係の図書を整備する。映写室は、主に日本のビデオ・ソフトを使った「ビデオ学習」により、日本理解と日本研究を深めてもらうのが目的で、さらに、会議室として各種のシンポジウムなどを開く。

左・朱誠如・遼寧師範大学学長

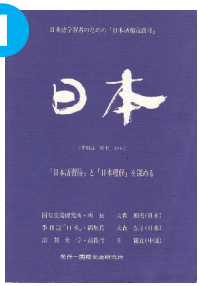
学生が利用する「大森弘子文庫」

1995(平成7)年～2016(平成28)年

独自の日本語教材、日本語精読教材『日本』～『新日本概況』

（季刊誌『日本』の後の日本語教材『日本』・各版）
中国を中心に各国の大学、留学生などに**約7万5千部**を寄贈

1

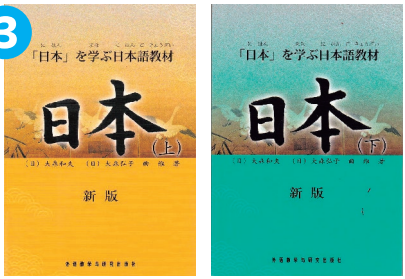


日本語精読教材『日本』
（206頁）
日本の印刷所

2

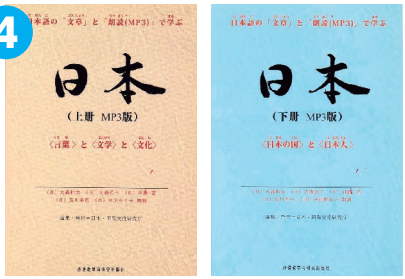
大学用・日本語教材『日本』
（上・387頁　下・460頁）
中国・大連の大連出版社

3



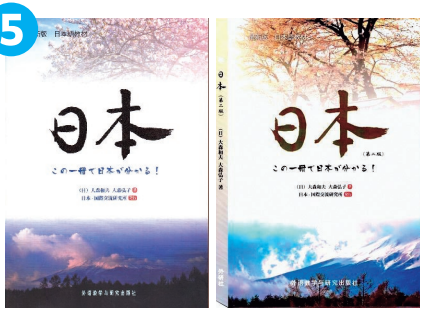
新版・日本語教材『日本』
（上・330頁　下・345頁）
中国・北京の外研社

4



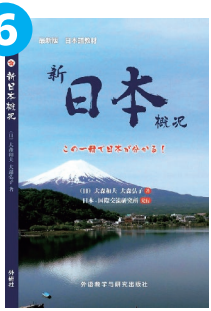
MP3付・日本語教材『日本』
（上・311頁　下・302頁）
中国・北京の外研社

5



最新版、改訂版・日本語教材『日本』
（いずれも252頁）
中国・北京の外研社

6



日本語教材『新日本概況』
（252頁）
中国・北京の外研社

各版の日本語教材『日本』の感想等は、第五章（p.229）

1995(平成7)年

❶日本語精読教材『日本』（206頁）を中国の約80大学などに、約3,000部寄贈。

1997(平成9)年～1998(平成10)年

❷大学用・日本語教材『日本』（上・387頁、下・460頁）を中国の約110大学などに、約2万6千部寄贈。

❶遼寧師範大学（遼寧省大連市）

❷浙江大学城市学院（浙江省杭州市）

2004(平成16)年～2005(平成17)年

❸新版・日本語教材『日本』（上・330頁、下・345頁）を中国の約110大学などに、約2万1千部寄贈。

2009(平成21)年～2011(平成23)年

❹MP3付・日本語教材『日本』（上・311頁、下・302頁）を中国の約80大学などに、約3千部寄贈。

❸寧波大学（浙江省寧波市）

❸吉林大学（吉林省長春市）

❹哈尔濱工業大学（黒龍江省哈尔濱市）

❹大理学院（雲南省大理市）

2012(平成24)年～2013(平成25)年

❺最新版＋改訂版・日本語教材『日本』（いずれも252頁）を中国の約120大学などに、約1万1千部寄贈。

山東師範大学（山東省済南市）

延辺大学（吉林省延吉市）

新疆師範大学（新疆ウイグル自治区烏魯木斉市）

2014(平成26)年～2016(平成28)年

❻日本語教材『新日本概況』（252頁）を中国の約130大学などに、約1万1千部寄贈。

西北大学（陝西省西安市）

1996(平成8)年～2014(平成26)年

第4回～第16回 中国の大学生、院生《日本語作文コンクール》

第4回 1996(平成8)年

テーマ＝「日本語と私」 応募総数＝861編（65大学）表彰式は北京市・北京大学

第4回の応募作文・861編（すべて郵送）

表彰式後の「万里の長城」観光

第5回 1997(平成9)年

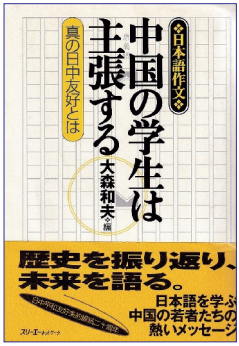
テーマ＝「日本の政府・企業に望むこと」 応募総数＝736編（58大学）

表彰式後の「万里の長城」観光
（表彰式は北京市・北京大学）

第6回 1998(平成10)年

テーマ＝「日中友好を深めるには、どうすれば良いか？」
応募総数＝933編（73大学）

表彰式（1998年10月、北京市・北京大学）



入賞作文集（238頁）
スリーエーネットワーク刊

第7回　1999（平成11）年

テーマ＝「近未来の日本と中国について」　応募総数＝1,203編（85大学）

表彰式　1999年9月
（河南省洛陽市の洛陽外国語学院）

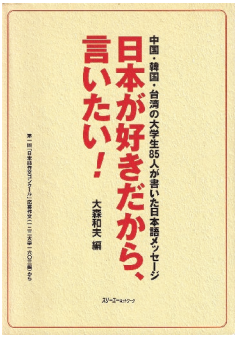
一等賞の郜楓さん（右・西安外国語学院）が訪日
（2000年1月、東京・練馬区の大森宅）

第8回　2000（平成12）年

第一回・中国、韓国、台湾の大学生《日本語作文コンクール》

テーマ＝「21世紀を迎える日本へのメッセージ」
応募総数＝1,603編（中国・1,439編、韓国・101編、台湾・63編）
・最優秀賞（全体の一等賞）劉愛君（遼寧師範大学大学院、女）
・優秀賞　（中国の一等賞）李莉（北京第二外国語学院大学院、女）

表彰式（遼寧省大連市・遼寧師範大学）



入賞作文集（85編を収録）
『日本が好きだから言いたい！』
スリーエーネットワーク刊（188頁）

第9回　2001（平成13）年

テーマ＝「私と日本」　　応募総数＝1,626編（94大学）

表彰式
（2001年11月、江蘇省南京市の南京農業大学）

第9回の応募作文
1,626編（すべて郵送）

第10回　2002（平成14）年

テーマ＝「日本と中国の将来」　　応募総数＝2,017編（86大学）

表彰式（2002年9月、北京市の北京大学）

応募作文（2,017編）

一等賞の陶金さん（遼寧師範大学、中央）が訪日
河合隼雄・文化庁長官（当時）を
表敬訪問（2003年3月）

第11回　2003（平成15）年

テーマ＝「日本語と私」　　応募総数＝2,118編（98大学）

応募作文・2,118編

一次審査（2003年6月、東京都練馬区の自宅で）

表彰式（2003年11月、洛陽外国語学院（河南省洛陽市））
表彰式後の懇親会で一等賞の二人と
中央右・趙嵐（北京第二外国語学院大学院）
中央左・石金花（洛陽外国語学院）

表彰式翌日の「龍門石窟」観光

第12回　2004（平成16）年

テーマ＝「日本語学習と私」　　応募総数＝3,360編（98大学）

表彰式（2004年12月、上海市の華東師範大学）

応募作文・3,360編

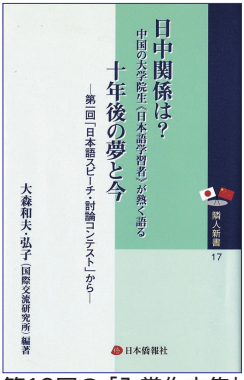
第13回　2006（平成18）年

第1回 中国の大学院生《日本語作文・スピーチ・討論コンテスト》

テーマ＝「日本、あるいは日本人に言いたいこと」　応募総数＝384編（48大学）

上位入賞者による「スピーチ・討論」風景（2006年10月、北京市の北京日本学研究中心）

表彰式後の懇親会（北京市）



第13回の「入賞作文集」一、二、三等賞20人の作文とスピーチ（日本僑報社刊、179頁）

第14回　2007（平成19）年

第2回 中国の大学院生《日本語作文・スピーチ・討論コンテスト》

テーマ＝「日本と中国の、これからの責任と課題」　応募総数＝424編（53大学）

表彰式（2007年、上海市の上海外国語学院）

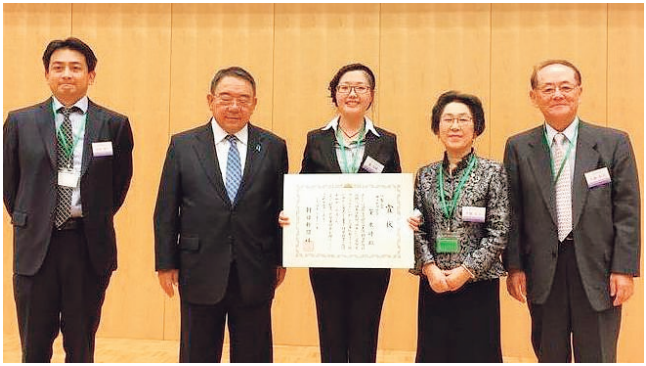
第15回　2012（平成24）年

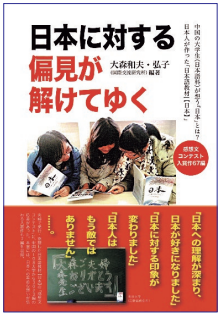
テーマ＝「日中の絆を深めるには？」　応募総数＝3,412編（128大学）
・一等賞＝韓福艶さん（河南省安陽市の安陽師範学院）
表彰式は北京市内のホテルで

第16回　2014（平成26）年

テーマ＝「日本語教材『日本』（国際交流研究所が作成・寄贈）の感想文」
応募総数＝3,023編（108大学）

表彰式（2014年10月、北京市の在中国日本国大使館）


中央・一等賞の董亜峰（北京第二外国語学院）



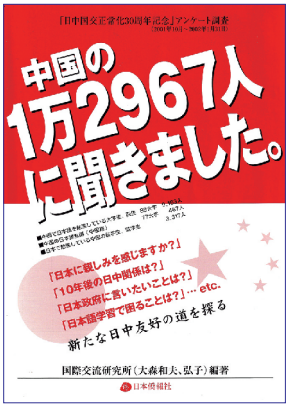
「入賞作文集」（67編収録）
『日本に対する偏見が解けてゆく』
（日本僑報社刊、203頁）

1999(平成11)年～2015(平成27)年

中国の学生対象に《中日友好に関するアンケート調査》を4回

計4回の**中国の学生**の総回答数＝3万9,225人
・第一回（1999年3月～6月）＝80大学の7,634人が回答
・第二回（2001年12月～2002年１月）＝88大学の9,183人が回答
第二回は、中国の大学の日本語教師〈中国籍〉＝467人
日本にいる中国の留学生・就学生 ＝3,317人
についてもアンケート調査を実施。回答者合計＝1万2,967人

合計1万2,967人の回答集→
（524頁、2002年7月、日本僑報社刊）



総回答のうち、郵送された回答約4,000枚

・第三回（2004年12月～2005年3月）＝107大学の1万0,370人が回答
・第四回（2014年12月～2015年3月）＝172大学の1万2,038人が回答

○4回のアンケート調査を行った16年間に、「中国の大学生（日本語科）」の「対日感情」が大幅に好転した。
①７割以上が「日本と日本人」に「親しみ」を感じ、
②17年前の二倍以上が、「日中は相互理解が出来ている」と考え、
③約半数の学生が「十年後の日中」が「今より、親しい関係」になる、と回答している。

「日本」に「親しみを感じる」理由では、「日本語を勉強したことで、対日観が変わった」という回答が多かった。そう答えた学生は、「日本語を勉強するまでは、『歴史問題』のために、日本を恨んだり、日本が嫌いだった」と書いていた。そして、「大学の日本語科に入学して、日本語を勉強し、日本人教師に接してから、日本と日本人に親しみを感じるようになった」という回答が目立った。

多くの学生が、「日中」の明るい未来を展望している一方で。依然、日本政府の「歴史認識」に強い批判と不満を抱いている学生が少なくなかった。

2012(平成24)年～2014(平成26)年

中国から届いた切手で作った日中友好の“貼り絵”

貼り絵に使った約1,500枚の切手

2012年までの活動で、中国の学生や先生方から送られてきた手紙や、作文の封書、包みの切手を保存。

その数は約4,500枚。「これまでの活動の記念に！」と、弘子が、そのうちの約1,500枚の切手を使って、「日中友好を象徴する貼り絵」（中国の国旗・万里の長城・牡丹と日本の国旗・富士山・桜）をA3（タテ29.7センチ×ヨコ42.0センチ）の画用紙に貼って作製した。

切手の色の部分を切り取って一枚一枚貼り付け、輪郭も切手を細く切って貼り、画面はすべて切手。

道具は、ハサミ、ピンセット、鉛筆、定規、化学糊と細い筆。
完成までの期間は約４カ月

木寺昌人・駐中国日本国大使に寄贈。
（2014年10月・大使館で）

2016(平成28)年～2023(令和5)年

世界の日本語学習者《日本語作文コンクール》を5回開催

第1回　2016(平成28)年

テーマ＝「〈日本〉は、どんな国だと思いますか？」
応募総数＝5,141編（54カ国・地域）

海外から郵送の作文・705編

一次審査（東京都江東区）

一等賞・3人

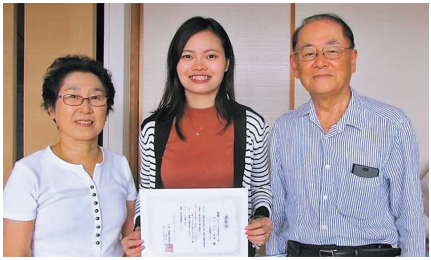
・海外の大学生＝シュレヤ・デイウェ（インド、プネ大学、20歳）

東京都
新宿区で

・留学生＝王志博（宇都宮大学大学院、25歳）

栃木県で

・社会人など＝ドン・フン・タオ（ベトナム、在日企業勤務、27歳）

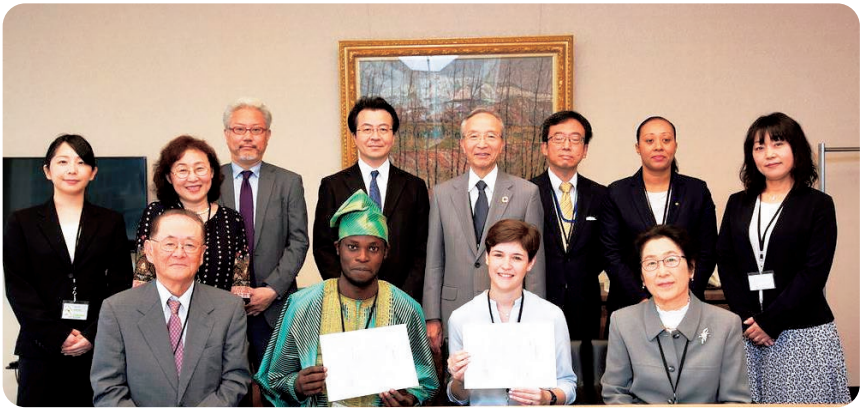


東京都江東区の
自宅で

第2回　2018（平成30）年～2019（令和元）年

テーマ＝「〈日本〉、あるいは〈日本人〉に言いたいことは？」
応募総数＝6,793編（62カ国・地域）

一等賞・2人の表彰式（2019年4月、朝日新聞東京本社（東京都中央区））



日本在住＝中央左 アイエドゥン・エマヌエル（ベナン、大阪府立大学大学院・留学生）
海外＝中央右 ニコール・フェッラリオ（イタリア、カ・フォスカリ大学大学院）

一等賞の2人を招いて、老人ホームの入居者と懇談会（東京都立川市・サンシティ立川昭和記念公園）
中央左＝ニコール・フェッラリオ　　中央右＝アイエドゥン・エマヌエル

二等賞（10人）

ヘレン・リー（18歳）オーストラリア（ニューサウスウェルズ大学）
アンナ・ムロチェック（11歳）ポーランド（小学校6年、ワルシャワ日本語学校）
ヤラ・タンターウィ（23歳）エジプト（カイロ大学）
スー・シャオチェン（29歳）アメリカ（東京大学大学院・留学生）
マヘルプル・ルヒナ（21歳）イラン（日本大学文理学部・留学生）

ほか、5人

第3回　2019（令和元）年～2020（令和2）年

テーマ＝1「〈日本のこと〉で、〈あなたの国〉に伝えたいこと、は何ですか？」
2「〈あなたの国のこと〉で、〈日本人〉に知ってもらいたいこと、は何ですか？」
のいずれか

応募総数＝9,086編（66カ国・地域）　内訳：郵送・1490編＋メールの添付・7,596編

一等賞・2人

チャン・トゥー・チャン
ベトナム　名古屋大学
学生交流課留学生支援係

レイレイピュー
ミャンマー
丸紅ピネドー出張所

二等賞・5人

簡家玲
台湾
国立高雄科技大学
梅光学院大学留学

ヴォロビヨワ・ガリーナ
キルギス
ビシケク人文大学准教授

ツァバ・ユリア
ポーランド
小学校教授
ワルシャワ日本語学校

呉潮松
中国
瀋陽工業大学

サブリーン・アリ
エジプト
カイロ大学文学部
日本語学科大学院

『ユニークな「日本文化」論』

（2020年9月、朝日新聞出版刊、272頁）

・第１回～第３回　世界の日本語学習者《日本語作文コンクール》
・第１回～第16回　中国の大学生・院生《日本語作文コンクール》
・第１回～第５回　留学生《日本語作文コンクール》

通算24回の入賞作文から、112編（64カ国・地域）を収録。

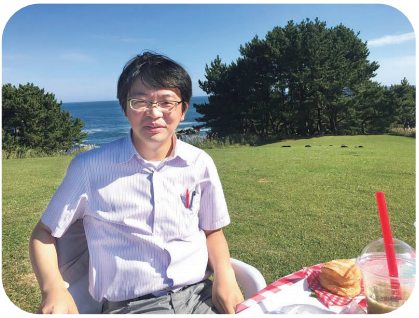
第4回　2020（令和2）年～2021（令和3）年

テーマ＝「《俳句》コンテスト」として実施
応募総数＝9,022句（4,013人。75カ国・地域）

一等賞・2人

李海　中国（貴州省貴陽市　貴州民族大学教師）

友来るや　庭に日本の　春の色



2001年10月～2003年3月
　広島県福山市の日本語学校
2003年　4月～2007年3月
　香川大学
2007年　4月～2014年3月
　名古屋大学大学院国際言語文化研究科に留学

チョチョキン　ミャンマー（丸紅ネピドー出張所）

内戦に　芽生える子らの　春憂う

日本語を勉強し始めたきっかけは、中学生の時見ていた日本のアニメ『るろうに剣心』と連続ドラマ『おしん』です。『おしん』の話し方がとても面白かったので、自分も素敵な言語を話せるようになりたいと思いました。

二等賞・5人

河昇彬　韓国　神戸女学院大学非常勤講師。韓国外大日本研究所
ギッティポーン・ナンムーア　タイ　タマラートスクサースクール（仏教系高校）2年
サブリーン・アリ　エジプト　カイロ大学日本語学科大学院生
　日本学術振興会カイロ研究連絡センター・秘書
呉凌燕　中国　大連海事大学院生
ジュリア・ヒカリ・サトウ・パドバン
　ブラジル（パラグアイ在住）　小学校5年

入賞俳句集『「俳句」と日本語の夢』
（2021年7月、朝日新聞出版刊、256頁）
47カ国・地域の102人の俳句を収録。

第5回　2022（令和4）年～2023（令和5）年

第26回（通算）世界の日本語学習者《日本語作文のコンクール》

テーマ＝1「〈日本語〉と私」
　　2「あなたの国にとって、〈日本〉は、どんな国ですか？」
主　催＝大森和夫・大森弘子
事務局＝広野未来スピーチ倶楽部（部長・笈川幸司　福島県）
後　援＝独立行政法人国際交流基金　朝日新聞社　文部科学省
　　独立行政法人国際協力機構
協　賛＝㈱スリーエーネットワーク

応募総数＝6,618編（62カ国・地域）

応募の国・地域は、約3分の1が中国、約3分の1がその他のアジア、約3分の1がそれ以外。また、作文全体の約5分の4がテーマ1「日本語と私」。

「応募数などを考慮しながら、「いろいろな国から、いろいろな〈作文〉を選ぶ」という方針で、「作文の整理・一次審査」を進めました。

二次審査　笈川幸司（広野未来スピーチ倶楽部部長、日本語教師）　大森和夫　大森弘子
羽原清雅（元・朝日新聞政治部長）　古谷浩一（朝日新聞論説委員）
5人の採点（100点満点）の合計点で順位を決定。

◇一等賞（2人）

ベトナム　＝**ラム・ティ・トゥ・ホアイ**（特定技能・介護職　29歳）
ウクライナ　＝**リンニク・マルガリタ**（東京育英日本語学院　20歳）

◇二等賞（5人）

中国　＝**羊善嬌**（日本語教師・広東省深圳市第三高級高校　32歳）
中国　＝**厳子皓**（創価大学文学部人間学科　23歳）
カザフスタン＝**ナゼルケ**（アルファラビカザフ国立大学二年生　19歳）
パラグアイ　＝**タカオカ・カレン〈高岡花恋〉**（ピラポ日本語学校　14歳）
ハンガリー　＝**パップ・アニコ**（物理学者・放射能研究者　59歳）

（敬称略）

- 入賞者92人のうち「52人の作文と顔写真」は、「二章」に掲載。
- 新たに、「応募作文数の数と、全体の作文の質の高さ」を基準に「大学賞」を設けました。
「最優秀大学賞に大連工業大学（中国。応募数154編）」など8校。

◇入賞者全員の氏名・所属、大学賞は、HP：http://www.nihonwosiru.jp/に掲載。

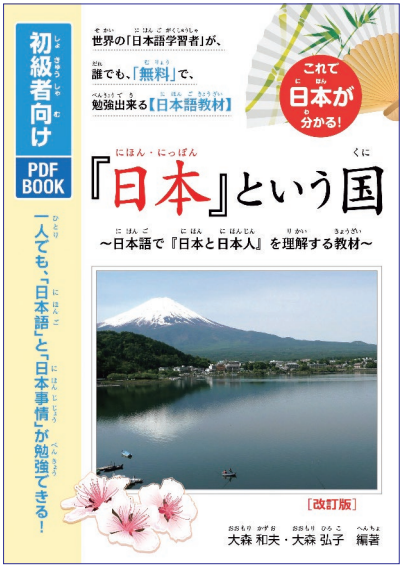
《日本語作文コンクール》は、1989年以来、計26回開催。

～留学生5回、中国の大学生・院生16回、世界の日本語学習者5回～
応募総数＝86カ国・地域から6万2,726編（俳句を含む）

2016(平成28)年9月～

電子書籍・日本語教材〈【日本】という国〉を無料公開

誰でも、どこでも、無料で学べる「日本語教材」を世界へ
HP：http://www.nihonwosiru.jp/　で発信！
2016（平成28年）9月公開→2018年改訂→2019年に更新



初心者向け

上級者向け

いずれも238頁。ルビ付き。内容は同じ。「初級者向け」はルビが多い。

〈【日本】という国〉内容

◇一章　日本の姿（政治、経済、少子高齢社会と社会保障、教育、東日本大震災と福島原発事故）
◇二章　〈国〉の形と仕組み（国土と人口、三権分立、日本国憲法、元号）
◇三章　歴史（原始と古代、中世、近世、近代と現代）
◇四章　自然（四季＝季語と年中行事、春・夏・秋・冬）
◇五章　伝統文化（華道、茶道、歌舞伎、能と狂言、相撲、柔道、空手、剣道）
◇六章　〈日本語〉とは？（文字の歴史、話し言葉と書き言葉、敬語、「広辞苑」の新語）
◇七章　〈日本語〉のいろいろ（四字熟語、慣用句、早口言葉、回文、擬音語と擬態語）
◇八章　文学（源氏物語、万葉集、百人一首、夏目漱石、村上春樹、松尾芭蕉、宮沢賢治、昔話など）
◇九章　日本人の行動様式（農耕生活と文化、集団志向、序列社会、和の精神、信仰心と宗教）
◇十章　和食（すし、天ぷら、すき焼き、鍋料理、納豆）

電子書籍・日本語教材〈【日本】という国〉

感想・活用法（各版の日本語教材『日本』の「感想」等は「第五章」）

タイ（チェンマイ）横山英輔先生　タマラートスクサースクール（仏教系高校）

デジタル版・日本語教材〈【日本】という国〉の初級者向けを、全部プリントしました。

日本語クラスの1週間の授業時間は、各学年とも9時間ずつ。その中で1時間だけこの〈電子書籍・日本語教材〉を使用させて頂いております。

その中でも、特に生徒に興味ありそうな**五章**と**十章**をまず選びました。

「初級者向け」と言っても、まだまだ彼らには内容が難しいので、綺麗なカラー写真やわかりやすいイラストを見ながらタイ人担当教師と日本人サポーターとで文章をタイ語に訳しながら生徒に説明し、並行して生徒からの質問を受けながら「理解」してもらう、という流れで授業しています。

彼らは全員、本当に「日本が好き」なようで、いつもの午後の授業は眠たそうで集中してないのですが、この授業だけはワイワイギャアギャアと「質問攻め」です。授業というより「休憩時間の雑談」という雰囲気ですね。50分一コマの時間があっという間です。

とてもわかりやすい『電子書籍・日本語教材』を提供していただき感謝しております。

イタリア　ニコール・フェッラリオさん（カ・フォスカリ大学大学院、22歳）

〈【日本】という国〉は興味深いと思います。全部印刷して、読みました。そろそろ大学を卒業する私は、この教材を通して「読解」の練習 と、これまで勉強したことの復習ができるだろうと思いました。実際に新しいことも学習できて、とても勉強になりました。「表紙」に「これで日本が分かる！」と書いてあるのですが、確かにそうです。240頁に日本の現状、歴史、伝統などがまとまって、素晴らしいです。

特に、この本のメリットは、今日本で起こっていることが詳しく説明されていることだと思います。この教材を作ってくださってありがとうございます！

2022(令和4)年5月～2023(令和5)年

日本語教材〈【日本】という国〉の最新版を出版

電子書籍・日本語教材〈【日本】という国〉を更新

日本語教材〈【日本】という国〉の電子書籍（HP：http://www.nihonwosiru.jp/）は、2016（平成28）年9月に無料公開し、その後3回更新しました。

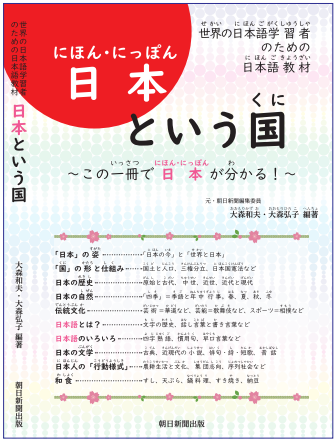
（「表紙」と「目次」は27頁）

電子書籍・日本語教材〈【日本】という国〉は、世界の日本語教師や日本語学習者に活用されています。（感想等は、前頁のほか、五章に）

その中に、「今の日本を多方面から理解するのに最適です。『百科事典』のように、日本の魅力を満載、日本を理解する入門書として活用できます。やっぱり、〈紙の教材〉があればいいですね」（中国・貴州省の貴州民族大学日本語学科長、李海先生）という要望がありました。

そこで、「一章」を中心に大幅に書き直して、2022（令和4）年5月、日本語教材〈【日本】という国〉の最新版（240頁、朝日新聞出版刊）を出版しました。

9月に日本語教材〈【日本】という国〉最新版をそのまま、〈電子書籍〉として公開しました。



←〈【日本】という国〉の表紙

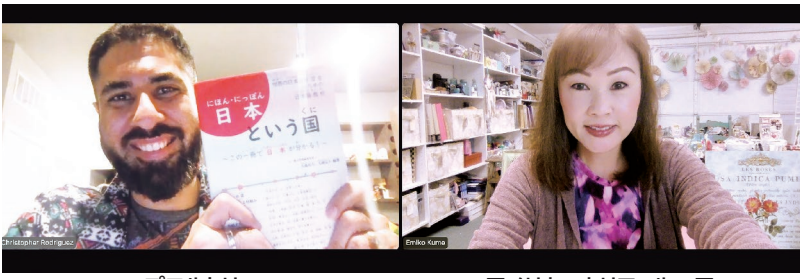
電子書籍の表紙→

○1989（平成元）年3月創刊の季刊誌『日本』から、2022（令和4）年5月発行の〈【日本】という国〉まで、中国を中心に、タイ、カンボジア、ベトナム、インドネシア、韓国、台湾、フランス、ドイツ、イタリア、アメリカ、パラグアイ、トルコ、ポーランド、ナイジェリアなど、30数カ国の大学等に約80万７千部寄贈しました。

☆中国の大学への寄贈に関しては、特に、李海先生（貴州省・貴州民族大学日本語学科長）のご協力を得ました。

タイ
チェンマイ
タマラートスクサースクール
（仏教系高校）横山英輔先生

日本
東京都墨田区、東京富士語学院、倉八順子学校長



プエルトリコ
ロドリゲス・クリストファーさん

アメリカ・カリフォルニア
久米英美子先生の日本語教室

中国
貴州省貴陽市、貴州民族大学、李海先生

〈【日本】という国〉の寄贈、電子書籍等の感想などは第一章、第五章

2020(令和2)年10月～2023(令和5)年

一　『ユニークな「日本文化」論』　二　『「俳句」と日本語の夢』
三　日本語教材〈【日本】という国〉

国内の「高校・大学・公立図書館」等、中国など海外の大学に寄贈

スマートレターなどの郵送作業

出版本の主な「寄贈先」と「寄贈部数」

一　『ユニークな「日本文化」論』　約2,500部

1＝47都道府県の高校、大学（約2,100校）。
2＝各都道府県の公立図書館（約80カ所）
3＝海外（タイ、ハンガリー、中国、韓国などの大学等・40カ所）

二　『「俳句」と日本語の夢』　約2,200部

1＝国内の大学、高校、日本語学校、日本語教室、公立図書館等・約350カ所
2＝海外（中国、韓国、タイ、台湾、アメリカなど・約40カ所）

三　〈【日本】という国〉　約1,600部

1＝国内の大学、日本語学校、日本語教室、公立図書館、高校など・約1,100カ所
2＝海外（中国の大学、日本大使館などに計約350部。ほかに、タイ、韓国、台湾、ポーランド、アメリカ、ナイジェリアなど28カ国・地域に計約40カ所）

○中国など海外の大学の日本語教師・学生、国内の高校長らの感想などは第一章、第五章

夫婦の「世界と日本語交流活動」35年間の歩み

1「日本語教材」の作成と寄贈　平成元年～令和4年

【一】1989年3月～1997年3月まで8年間、季刊誌『日本』（30頁前後）を33号まで、計約73万冊無料配布。国内の大学・日本語学校、中国を始め、タイ、インドネシア、韓国、台湾、フランス、イギリス、アメリカなど30数カ国・地域の大学に寄贈。

【二】1995年に季刊誌『日本』を基に、日本語精読教材『日本』（206頁）を作成、その後、2022年の〈【日本】という国〉まで、7回改訂、寄贈。

★2022年5月＝〈【日本】という国〉（ルビ付き・240頁）（朝日新聞出版）

海外、国内の大学、日本語学校、日本語教師、公立図書館などに、約2,100部寄贈。

◇季刊誌『日本』から〈【日本】という国〉まで、独自の日本語教材・約80万7千冊を寄贈。

【三】2016年以降～　電子書籍・日本語教材〈【日本】という国〉　を無料公開。

http://www.nihonwosiru.jp/（国際交流研究所のHP）

2《日本語作文コンクール》を主催・通算26回　平成元年～令和5年

【一】1989年から1995年まで、「留学生対象の《日本語作文コンクール》」を、計5回主催。応募総数＝3,121編。

【二】1992年から2014年まで、中国の大学生・院生を対象に《日本語作文コンクール》を、計16回主催。応募総数2万2,945編。

【三】2016年から、「世界の日本語学習者」を対象にした《日本語作文コンクール》を主催。

◇2016年～2017年「第一回」（応募者数＝54カ国・地域から5,141編）
◇2018年～2019年「第二回」（応募者数＝62カ国・地域から6,793編）
◇2019年～2020年「第三回」（応募者数＝66カ国・地域から9,086編）
◇2020年～2021年「第四回」（応募者数＝75カ国・地域から9,022句）
◇2022年～2023年「第五回」（応募者数＝62カ国・地域から6,618編）

★通算26回の《日本語作文コンクール》の応募総数＝86カ国・地域の6万2,726編（作文と句）

□・2022年9月=「中国の大学生〝日本への思い〟と〝心の叫び〟」（34年の記録）を出版。
○　2022年=大森賞「世界の日本語学習者《日本語作文コンクール》」（主催・笈川幸司先生）
○　2022年=大森杯「日本語教師・教育体験手記コンクール」（主催・日本僑報社）

（一）○2020年9月、『ユニークな「日本文化」論』を出版（朝日新聞出版）
留学生、中国の大学生・院生、世界の日本語学習者を対象に行った24回の《日本語作文コンクール》の入賞作文から選んだ「日本人に読んでもらいたい作文」112編

（二）○2021年7月、『「俳句」と日本語の夢』を出版（朝日新聞出版）
※2020年～2021年の「第四回」＝「25回目の《日本語作文コンクール》」として、〈俳句コンテスト〉を実施。入賞者102人の「俳句」と「日本語の夢」を収録

◇全国の高校、大学、図書館等へ
（一）を約2,500部、（二）を約2,200部、寄贈。

3《「日中友好」アンケート調査》→1999年～2015年まで4回

◇中国の大学生（日本語科）を対象に実施。各回、80～172大学の計3万9,225人から回答。

目次

（本書記載の氏名は敬称略。肩書・年齢等は原則として当時のもの）

巻頭カラー　写真で見る 夫婦の「日本語交流活動」35年間　41

第一章　35年間の軌跡　71

第二章　第26回の「世界の日本語学習者《日本語作文コンクール》」

「入賞作文」から52編（41カ国・地域）
（応募総数＝62カ国・地域から6、618編）
テーマ＝・日本語と私　・あなたの国にとって、『日本』はどんな国ですか？

ベトナム	ラム・ティ・トゥ・ホアイ	怖かった「日本語」が新しい世界を開いてくれた！	72
ウクライナ	リンニク・マルガリタ	「日本」はウクライナの模範・モデルです！	74
中国	羊善嬌	「日本語」は、「人の心を救う」潤滑油！	76
中国	厳子皓	「日中戦争」と「ソフト・パワー」の二面を持つ日本	78
カザフスタン	ナゼルケ	日本語ガイドの母に感謝	80

パラグアイ　タカオカ・カレン（高岡花恋）　パラグアイの人たちに日本語を伝えていきたい！　82
ハンガリー　パップ・アニコ　福島への「放射能研究旅行」が〝きっかけ〟　84
中国　周思琪　『羅生門』から、「献身・利他主義」を学んだ！　86
中国　趙歆怡　「言葉」は、心を癒す力がある！　88
中国　黄美慧　アニメ『犬夜叉』を見て、「日本語」に魅了！　90
中国　王雅琪　三年間の日本語との「美しい物語」　92
中国　張唯佳　日本の経験を参考に環境政策を！　94
中国　丁若璋　心のこもった「文化交流」は国境を超える！　96
台湾　林元浩　私を救ってくれた人生の教師は「日本語」　98
韓国　楊アラム　「書店」は日本を理解する「ゲート」　100
タイ　サランヤー・インティセーン　日本語の「言葉」は深く、数が多い！　102
モンゴル　バトバヤル・ガンゾル　モンゴル国民が常に感謝しなければならない「日本」　104
ミャンマー　テッテッウィンマウン　ミャンマーに「未来」を与えてくれる「日本」！　106
キルギス　ヴォロビヨワ・ガリーナ　「46歳で始めた日本語学習」が私の人生を変えた！　108

ロシア　ブリカ・マルガリータ　「四字熟語」や「ことわざ」は、多彩な宝石！　110
トルコ　ブラック・コルクマズ　日本の「お笑い」で、日本語に馴染んだ！　112
スロバキア　ヤナ・ボリシンツォヴァー　「豊かなオノマトペ」の翻訳を研究　114
ルーマニア　ハルデュレア・マリナ　「日本語」が「私の心」を救ってくれた！　116
オーストラリア　イージェン・ウェン　最も好きな日本語は「お疲れ様でした」　118
エジプト　アスマー・アハマド・ムハマド・アヤード　「日本語教師」を目指す「日本語を学ぶ旅」　120
マダガスカル　ラライアリマナナ・ニライナ・ファメヌス　「日本語」の日常は「昼は笑顔、夜は涙」　122
トーゴ　アドゥアヨム・アヘゴ・アクエテビ　留学で学んだ「日本の医療技術」をアフリカに！　124
中国　王子軒　「日本語」は〝新しい世界の扉を開ける鍵〟　126
ミャンマー　テッテッティンアウン　日系企業に就職して、日本語に興味が芽生えた！　128
カンボジア　リー・チアーチェーン　たくさんのカンボジア人に日本語を教えたい！　130
フィリピン　アンジェロ・モラレス　「日本語」は私の「相棒」です！　132
インドネシア　ダヤン・フェルナンド　「日本語」は、いい未来を与えてくれそうです！　134
シンガポール　ゾウ・チェンジン　日本語学習を、七年続けて、楽しさが多くなった！　136

スリランカ　イノーカ・ラサンティカ・ダサナヤカ　スリランカの大臣が「日本の分割」を救った！　138
インド　バビヤ・ラジェシュ　〝七転び八起き〟で頑張った！　140
ニュージーランド　トリップ・ラズ　人生を豊かにしてくれた「日本語」に感謝！　142
トルコ　ウメル・カルカン　「地震の国」として運命を共有、援助に感謝　144
イスラエル　ウェベル・ナターリヤ　好きな「ことわざ」は「十人十色」　146
ブラジル　フィジオ・サラ・ロンガット　私の人生を変えてくれた「日本語」　148
コスタリカ　アレハンドロ・セースペデス・グティエーレス　「日本語」は「生き甲斐」で、人生の大事な部分　150
ウルグアイ　ジュリアナ・ノゲエス　「日本語」は、「美しさ」を感じる言語　152
グアテマラ　ノーマンス・サガストゥメ・ハビエル・アレクサンダー　漫画家を夢見て学んだ「日本語」で人生勉強！　154
ジャマイカ　アマーニ・クック　「継続は力なり」で、楽しく、日本語を勉強しています！　156
キューバ　ビアンカ・アルボラエズ・ロペズ　「日本語」を使って、日本との関係を良くしたい！　158
ロシア　クセーニャ・ビリューコヴァ　「書道」で書いた「漢字」が、気に入った！　160
ポーランド　マルチン・カチャノフスキ　一生かかっても勉強し尽くせない「日本語」　162
イタリア　フェデリコ・タリアフェッリ　初めに書いた字は、「書道」で「人、水、春」　164

セルビア　ミリツァ・ヴカソヴィッチ　日本の「アニメの主題歌」に涙が出ました！　166
ブルガリア　アレクサンドロヴァ・ネリー　「勤勉で、責任感と義務感が強い」日本人！　168
ケニア　ウェリケ・イヴォン　「優秀な日本語教師」を夢見ている！　170
ナイジェリア　アカンビ・エスター・オルワフェランミ　私は日本が好きになれて幸せです。　172
南アフリカ　クザニ・マベナ　約7年、独学で日本語を勉強し続けた　174

第二章　第1回〜第25回（1989年〜2020年）までの「入賞作文」から20編（17カ国）　177

1989年　フランス　ノエスモエン・イザベル　「外国との共通性」に目を向けて　178
1989年　アルゼンチン　ガブリエル・フェラーリス　「違いを認め合う」ことが国際交流の第一歩　180
1989年　インドネシア　ハニイ・ウイジャヤ　「ニンニク風のおつき合い」を　182
1989年　バングラデシュ　サイド・サムスディン・アハメド　交流は「一方通行」ではいけません！　184
1992年　中国　高媛　中日は、「友好のシンボル」が要らない仲に！　186
1998年　中国　李錦成　もし、「日本語」を勉強しなかったら……　188
2016年　ルーマニア　マリア・カメリア・ニッツァ　「金継ぎ」は日本人の魂　190

2016年 ベトナム ドン・フン・タオ 「世界一正直」な国 192
2016年 アメリカ ジェンセン・ロー 「四国・八十八ケ所巡り」の思い出 194
2016年 アゼルバイジャン イルヤソワ・ヒマハニム 日本の「優しさ」を象徴する「優先席」 196
2016年 韓国 イ・ジュヒョン 見習いたい「日本の平和憲法」 198
2018年 ベナン アイエドゥン・エマヌエル 「自己主張力」を備えた〝勇者〟を 200
2018年 スーダン バヤン・アリ 「チームワーク」を教えてくれた「日本文化」 202
2018年 イラン マヘルブル・ルヒナ 日本人は、ほんとうに無宗教なのですか？ 204
2018年 中国 王若瑄 数秒にかける相撲から学んだ「生き方」 206
2019年 ベトナム チャン・トゥー・チャン 「広島の夕焼け」に「平和」を想う 208
2019年 ミャンマー レイレイピュー 伝えたい！「日本人の働き方」 210
2019年 ポーランド ツァバ・ユリア 小学校で「日本語」を教える「誇りと責任」 212
2019年 カンボジア チャエム・ソンレン 広めたい、日本の「ありがとう文化」 214
2019年 ウクライナ ドローシナ・アナスタシーヤ 「心の癒し」を与えてくれる茶道 216

第四章　『日本語作文コンクール』
「考え方」、「応募者の反応」、「歩み」、「応募者の国・地域」　219
第五章　独自に作成・出版した『日本語教材』
約80万部寄贈→電子書籍化（巻頭カラー頁、第一章参照）　227
・出版、寄贈した各版の『日本語教材』
・『日本語教材』の「感想」と「活用法」
おわりに　249
編著者の略歴　254

《世界の日本語学習者・日本語作文コンクール》

1989(平成元)年～2023(令和5)年　主催＝大森和夫・弘子

26回(通算)の《日本語作文コンクール》の内訳

1 1989(平成元)年から「留学生」対象＝計5回

(応募数 3,121編)

第1回	1989(平成元)年	応募数＝	525編	
第2回	1991(平成3)年	応募数＝	816編	
第3回	1992(平成4)年	応募数＝	249編	
第4回	1993(平成5)年	応募数＝	803編	
第5回	1995(平成7)年	応募数＝	728編	

2 1992(平成4)年から「中国の大学生、院生」対象＝計16回

(応募数 2万2,945編)

第1回	1992(平成4)年	応募数＝	450編	(一部の大学で予備審査)
第2回	1994(平成6)年	応募数＝	281編	
第3回	1995(平成7)年	応募数＝	514編	(中国の日本語教師等対象も)
第4回	1996(平成8)年	応募数＝	861編	
第5回	1997(平成9)年	応募数＝	736編	
第6回	1998(平成10)年	応募数＝	933編	
第7回	1999(平成11)年	応募数＝	1,203編	
第8回	2000(平成12)年	応募数＝	1,603編	(韓国、台湾を含む)
第9回	2001(平成13)年	応募数＝	1,626編	
第10回	2002(平成14)年	応募数＝	2,017編	
第11回	2003(平成15)年	応募数＝	2,118編	
第12回	2004(平成16)年	応募数＝	3,360編	
第13回	2006(平成18)年	応募数＝	384編	(大学院生対象)
第14回	2007(平成19)年	応募数＝	424編	(大学院生対象)
第15回	2012(平成24)年	応募数＝	3,412編	
第16回	2014(平成26)年	応募数＝	3,023編	

3 2016(平成28)年から「世界の日本語学習者」対象＝計5回

(応募数 3万6,660編)

第1回	2016(平成28)年	応募数＝	5,141編	(54カ国・地域)
第2回	2018(平成30)年	応募数＝	6,793編	(62カ国・地域)
第3回	2019(令和元)年	応募数＝	9,086編	(66カ国・地域)
第4回	2020(令和2)年	応募数＝	9,022句	(4,013人、75カ国・地域) 俳句コンテストとして実施
第5回	2023(令和5)年	応募数＝	6,618編	(62カ国・地域)

通算26回の応募総数＝92カ国・地域、6万2,726編(作文と俳句)

第一章

35年間の軌跡

喜びと感動＝〝様変わりの35年〟
手書き→パソコン→生成ＡＩ（人工知能）活用

～「活字の力」で〝日本ファン〟を増やしたい！～

〝喜びと感動〟の35年＝「日本語交流活動」の総決算
～「手書き」からスタートした活動は〝様変わり〟～

1989（平成元）年にスタートした夫婦の《日本語交流活動》は、日々、喜びと感動を味わうことができた35年間だった。独自に作成・寄贈した「日本語教材」を活用し、《日本語作文コンクール》に応募した世界の多くの若者が、その後、日本語と日本との関わりをさらに深め、様々な分野で活躍している。その様子を見聞きする度に、〝喜びと感動〟を味わってきた。

その一人――1992（平成4）年と1994（平成6）年に行った第一回、第二回の中国の大学生《日本語作文コンクール》で二年続けて一等賞に選ばれた高媛さん（当時、中国・吉林省長春市の吉林大学生）は、卒業後、東京大学に留学、現在、駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部の教授として活躍、日本人学生に、「情報社会論」や「異文化間コミュニケーション」などの指導を続けている。

35年間の活動は〝様変わり〟した。季刊誌『日本』の創刊号から三年間は、すべて、夫婦による鉛筆と原稿用紙の〝手書き〟。漢字には〈ふりがな〉を付け、「昔話」や「四季の言葉」に、数枚の手描きの〝挿し絵〟を付けた。その4年後に〝ワープロ〟、さらに、〝パソコン〟使用は、それから5年後。

35年間の〝様変わり〟は、通算26回主催した世界の日本語学習者《日本語作

季刊誌『日本』3号（1989年9月）

文コンクール》も同じ。

すべての作文が〝郵送による応募〟の期間が長く続き、〝Eメール（添付）〟による応募が増え始めたのは約10年前から。最後の通算26回目（2023年）は、62カ国・地域から6、618編のすべてが〝Eメール（添付）〟（左の写真）だった。審査のため「メールの整理・仕分け・一次審査のためのプリント」に、〝手書き〟作文の数倍の手間が掛かった。（審査の手順などは後述）。

また、近年の作文には、〈チャットGPT〉など生成AI（人工知能）を利用したと見られる「表現や説明」が目立ち、応募者に「メール」で、どの程度理解して書いたか？　を確かめる新たな〝苦労〟が加わった。

（通算26回目の「日本語作文コンクール」・締切日、2023年4月30日に〈応募のメール〉が殺到）

◎「日本」を好きになって、帰国してほしい！
～「留学生」との出会いが、「活動」の〝きっかけ〟～

大森和夫が、新聞記者をしていた1988（昭和63）年8月、当時、東京都目黒区にあった「日本国際教育協会・駒場留学生会館」を訪問したのが、《世界の日本語学習者と歩んだ『夫婦の35年』》の原点だった。

文部省（現・文部科学省）を担当していたので、世界から日本に来ている留学生の「心の内」を聞いてみたい、と取材を申し込んだところ、当時の加藤行立館長が快く引き受けてくださり、留学生たちに声を掛けてもらった。

フランス、アメリカ、中国、タイ、韓国、エジプト、インドネシアなどからの留学生約10人と会った。

留学生たちが茶道のお点前を楽しんでいるのを拝見した後、話を聞くことが出来た。

留学生たちは、口々に訴えた。

「日本人との交流の機会が少ない」

「日本のことを知らないまま帰国するのは悲しい」

それから1カ月後の1988年9月、駒場留学生会館のアメリカ人留学生の紹介で、東京大学大学院農学系で稲の栽培を研究していた中

お茶やお花など、日本文化を楽しむ各国の留学生
1988（昭和63）年8月
東京・駒場留学生会館（当時）で

国人留学生・胡東旭君に、東大の研究室で会った。

「奨学金をもらえないので、40以上のアルバイトを経験しながら留学生活を送っています。経済的に苦しいのは我慢出来ますが、日本のことをたくさん知って、理解したいのに、それが出来ないのが残念です。日本が嫌いになって帰国する留学生も少なくありません」と話した。

大きなショックを受けた。「折角、日本語を学んで、日本に留学して、母国と日本との〝架け橋〟として頑張ろうとしている留学生が、日本を嫌いになったり、日本に批判的な気持ちになったりして、帰国してしまうのは〈日本にとって大きな損失〉だ」と痛感した。

妻と相談し、「一人ひとりが〝民間大使〟である留学生が、日本を理解して、日本を好きになって、母国へ帰ってほしい。政府や財団がやらないなら、個人でやってみよう！　世界の日本語学習者のために、新聞記者の経験を活かして、〈活字〉の力で、何か役に立つことはできないだろうか」と、あれこれ考えた。

「日本で学ぶ各国の留学生の一人でも多くが、日本を好きになって母国へ帰ってほしい」

「日本のことをたくさん知ってもらって、日本のファンになってほしい」

そうした思いが、〈世界の日本語学習者との交流活動〉を始める動機となった。

当時の総務庁（現・総務省）は、「わが国における留学生の受け入れ規模は、先進諸国の中では低い水準にとどまっている」として、当時の文部省などに、「日本語教育の充実」のほか、「奨学金の充実、住居の改善、留学生入学選抜方法の改善」などを勧告していた。また、総務庁が行ったアンケート調査によると、〝日本に来て最も困ったこと〟では「言葉の問題」が一番多かった。

◎1989(平成元)年3月、季刊誌『日本』を創刊、同年5月、留学生対象の《日本語作文コンクール》をスタート

1989(平成元)年に、日本で学ぶ「留学生・就学生」は、それぞれ約2万5千人・約5万人の計7万5千人だった。その後、留学生の数は増え続け、2022(令和4)年5月には、23万人を超えた。(2010年に、学生の在留資格が「留学」に一本化された)。

国際交流の大切さが叫ばれ始め、モノの交流、人の交流が盛んになった。しかし、心の交流を進めるには、相互理解が不可欠になる。そのためには、〈それぞれの国とその言語、生活様式を始めとする文化の違い〉を認め合わなければならない。日本人が、様々な国とその人たちのことを知り、同時に、外国の人たちに、《日本と日本人》のことを知ってもらうことが重要になる。

日本語を学ぶ世界の若者は、留学生だけでなく、各国で増えていることも知った。そこで、日本語を学ぶ留学生たちに出会ってから約半年後、留学生だけでなく、世界の日本語学習者に、「日本語で、日本を知って、日本を好きになってもらいたい」と考え、「夫婦で取り組んでみよう」と決意し、具体的な〝活動〟として、二つを決めた。

一、日本語で、日本と日本人をもっと知ってもらうため、「日本語の学習、情報誌」を作って、日本語学習者に無料配布する。

二、日本語の書く力を付けてもらい、合わせて、日本への関心を深めてもらうため、《日本語作文コンクー

ル》を開催する。

〝読んで〟日本を知ってもらうための季刊誌『日本』（ほとんどの漢字にルビ付き。26頁）を、1989年3月に創刊し、留学生の多い大学や中国など海外の大学等に寄贈し、同年5月に、〝書いて〟日本をより理解してもらうための留学生対象の《日本語作文コンクール》をスタートさせることを決めた。

（それぞれの内容は、巻頭カラー頁、第四章、第五章に）

◎「活動」を始める前に決めた四つのこと

夫婦だけの〈日本語交流活動〉は、「費用や仕事量などを考えると、長くは続けられないだろう」と思っていた。そこで、活動を始める前に、四つのことを、夫婦で決めた。

一、世界の日本語学習者と〝楽しく、共に学ぶ〟気持ちを忘れないようにする。

〈一緒に楽しむこころ〉を持ち続け、共に学ぶ気持ちを忘れないように、〈ゆとりのある活動〉を心掛けた。

二、退職金で、少なくとも〝石の上にも三年〟は頑張る。

私財を使うので、経費節約のため、活動はすべて〝手作り〟で行う。

三、活動は、「夫婦で出来る範囲」にとどめ、〝マイペース〟を守る。

手を広げ過ぎて、人に迷惑をかけないようにする。そのために、無理はしない。

四、ボランティア（無償の社会活動）という言葉は使わない。

責任や義務を伴わない気楽な〈活動〉で、「自分たちの人生を豊かにする」ことを心掛ける。

◎本の名前、活動の〈名称〉と〈考え方〉

元号が昭和から平成に代わった1989年1月に、大森和夫は25年勤めた新聞社を退社した。

まず、夫婦の名前で活動するのは不便なので、季刊誌『日本』を読んで、日本を好きになってくれる留学生や海外の日本語学習者が一人でも増えれば、夫婦の小さな力がささやかながら日本の国際交流に貢献できる、と考えて「国際交流研究所」という名称を決めた。

活動の具体的な内容を決めたのは退職してからだった。「日本を好きになってもらう本を無料で配布する」こととし、本の名前を季刊誌『日本』と決めた。

そして、活動の基本的な考え方を、次のように決めた。

世界中の国と国との間に平和な状態を築くことが地球人みんなの願いです。そのためには、異なる国の人と人との間の相互理解が不可欠です。

人の交流、モノの交流、「こころの交流」が進んで初めてお互いの理解が深まります。「こころの交流」を進めていく上で大事なことは、それぞれの国と言語、生活様式を始め文化の違いを認め合うことです。日本人が、様々な国とその人たちのことを知り、外国の人たちに「日本と日本人」をもっと知ってもらうことが重要です。（中略）。

様々な触れ合いを通して「こころ」の国際化を進める活動が出来ないだろうか、と考えたのが、「国際交流研究所」を作った動機です。

（「国際交流研究所」の「案内」から）

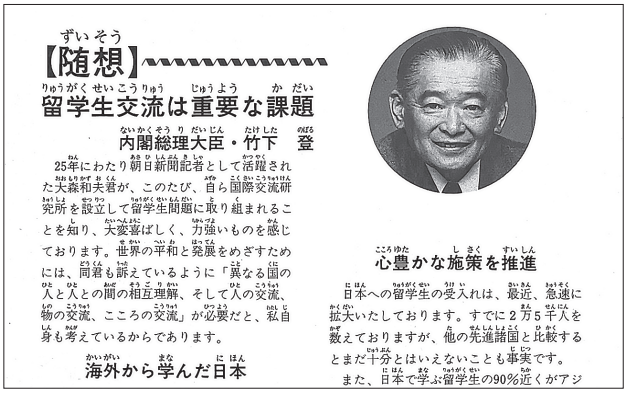
◎「創刊号」に、竹下首相(当時)から『随想』
～「大変喜ばしく、力強い」～

季刊誌『日本』の創刊に当たって、当時の竹下首相に、「留学生交流は重要な課題」と題する随想を書いてもらった。

「二十五年にわたり朝日新聞記者として活躍された大森和夫君が、このたび、自ら国際交流研究所を設立して留学生問題に取り組まれることを知り、大変喜ばしく、力強いものを感じております。世界の平和と発展をめざすためには、同君も訴えているように『異なる国の人と人との間の相互理解、そして人の交流、物の交流、こころの交流』が必要だと、私自身も考えているからであります」

「政権担当以来、私は『世界に貢献する日本』という姿勢を貫いてきましたが、とりわけ留学生交流の推進については重要な政策課題と位置づけ、できる限りの努力を続けてまいりました」

(原文のまま。抜粋)



【随想】

留学生交流は重要な課題

内閣総理大臣・竹下 登

25年にわたり朝日新聞記者として活躍された大森和夫君が、このたび、自ら国際交流研究所を設立して留学生問題に取り組まれることを知り、大変喜ばしく、力強いものを感じております。世界の平和と発展をめざすためには、同君も訴えているように「異なる国の人と人との間の相互理解、そして人の交流、物の交流、こころの交流」が必要だと、私自身も考えているからであります。

海外から学んだ日本

心豊かな施策を推進

日本への留学生の受入れは、最近、急速に拡大いたしております。すでに2万5千人を数えておりますが、他の先進諸国と比較するとまだ十分とはいえないことも事実です。

また、日本で学ぶ留学生の90%近くがアジ

◎活動の場は自宅の四畳半
～東京都練馬区（マンション）→江東区（マンション）→立川市（老人ホーム）

35年間の活動の拠点は、東京都練馬区のマンション→江東区のマンション→立川市の老人ホームと住まいは変わったが、その四畳半が「国際交流研究所」だ。すべての仕事の拠点は、ずっと、自宅の四畳半だった。（巻頭カラー頁など参照）

留学生や、研修や短期留学で日本にやって来た中国を中心に各国の学生や教師らがわが家にやって来た。リビングでお茶を飲み、時には、〈和食〉を囲みながら、しばし談笑が続く。そのうちに、ほとんどの訪問者が「国際交流研究所はどこですか?」と尋ねる。「では、どうぞこちらへ!」と、リビングの隣の一室へ案内する。「えっ、ここが国際交流研究所ですか?」と、一様に、驚きの表情を見せる。

1996（平成8）年10月に来日して、交際交流研究所を訪問してくれた中国の胡振平先生（中国日語教学研究会会長。洛陽外国語学院教授＝当時）は帰国後、次のような手紙をくれた。

「日本語教材『日本』の編集・校正から寄贈まで、《日本語作文コンクール》の企画・審査員の選定・中国の各大学への告知・1次審査・入賞者への通知・中国での最終審査と表彰式の準備とそれへの出席など、ずっと個人の力で続けてこられた。このような日本語交流活動を、政府機関や財団や、法人でもない大森さんご夫妻が四畳半の一室で長い間続けてこられたことに感動させられる。経済的負担も大変だろう。ご夫妻のこれまでの活動は、中国の日本語教育に大きな貢献をしてきた。お疲れさま!そして、ありがとう!」

◎季刊誌『日本』など日本語教材の執筆、編集、出版、郵送
～手書き→ワープロ→パソコン。郵送なども、夫婦の手作業～

季刊誌『日本』以降、各版の日本語教材は、夫婦で項目をほぼ半分ずつに分けて原稿を書き、ルビを付けて、時には挿絵を描き、編集・校正・出版まで、基本は〝夫婦の手作り〟。いくつかのテーマは、知人・友人に執筆を依頼し、夫婦で手直ししたりした。

創刊号から三年間（12号まで）は、すべて原稿用紙に手書き。ゲラ刷りが印刷所から戻って来ると、二～三回の校正。夫婦が原稿をワープロで書けるようになったのは四年目（1992年）から。ルビを付けるのは手書き。パソコンを使えるようになったのは季刊誌『日本』の発行が終了してから。その後、日本語教材『日本』を作成するようになってから、ルビ付けもパソコン上で処理できるようになり、出版社への送稿を含めて、メールのやり取りによる作業に替わった。

季刊誌『日本』を国内外の大学などへ郵送する作業に苦労した。各号とも、30～50冊の包みが１００個～４００個を、国内の大学や日本語学校、そして、中国など海外に郵送（海外は船便）するため、印刷所から自宅に届く１００冊の包み・50～２００個を、30冊～２００冊に梱包し直し、郵送伝票を貼り付け国内の大学、中国、韓国、タイ、インドネシアなど15カ国の大学など２００カ所以上に郵送。２００個以上の荷物を台車に乗せて、近くの郵便局へ数十回に分けて運んだ。

三カ月ごとに、こうした郵送作業が続いた。しかし、「毎回思うのは、ご送付いただく季刊誌『日本』の梱包の素晴らしさです。二重にしっかりと紐がかけてあり、全く損傷がなく届きます。学生に配るのにも、完全な新本で渡すことができます」（中国・湖南大学日本人教師・梅田星也先生）などの礼状を手にすると、苦労も吹き飛んだ。

（巻頭カラー頁参照）

◎世界中に、日本の『良き理解者』を増やすことができれば……
～季刊誌『日本』・創刊五周年に、細川首相(当時)のメッセージ～

季刊誌『日本』が20号を迎えた１９９３（平成5）年冬季号（12月）に、朝日新聞社で同期だった当時の細川護熙首相が、「『日本』創刊五周年を祝う」というメッセージを書いてくれた。

「創刊五周年を迎えられた季刊誌『日本』が皆さんの勉強や研究に大いに役立っていることを知って、大変喜んでいます。『日本』を発行している国際交流研究所の所長・大森和夫君と私は、１９６３（昭和38）年に同時に朝日新聞社の記者になり、大森君は大分支局へ、私は鹿児島支局へ赴任しました。私は社会部記者から途中で政治の世界に入り、大森君は政治部記者から国際交流のボランティア活動を始めるため、五年前に朝日新聞社を退職し、別の道を歩んでいます」

「私は、日本の国として最も重要なことは世界の国々から信頼される国家になることであり、そのために、国際社会の中で日本の責任をできる限り果たしていきたいと考えています。特に、日本で学んでいる各国の留学生や海外で日本語を勉強したり、日本語や日本について教えている多くの方々、さらに、さまざまな分野の日本研究者の皆さんに満足して頂けるような環境や条件を整備することは、日本政府の大きな責務です。いろいろな政策を通して、世界中に日本の『良き理解者』をもっと増やすことができれば、日本にとってすばらしいことです」（原文のまま。抜粋）

メッセージ

「日本」創刊５周年を祝う

内閣総理大臣　細川　護熙

私は、日本の国として最も重要なことは世界の国々から信頼される国家になることであり、そのために、国際社会の中で日本の責任をできる限り果たしていきたいと考えています。政府としても各方面で「日本の国際化」を推進する努力を続けています。特に、日本で学んでいる各国の留学生や海外で日本語を勉強したり、日本語や日本について教えている多くの方々、さらに、さまざまな分野の日本研究者の皆さんに満足して頂けるような環境や条件を整備することは、日本政府の大きな責務です。いろいろな政策を通して、世界中に日本の「良き理解者」をもっと増やすことができれば、日本にとってすばらしいことです。

ボランティア活動を始めるために５年前に朝日新聞社を退職し、別の道を歩んでいます。

ところで、世界中の人々の最大の願いは世界平和です。世界の国々が、民族、言語、文化、政治体制等の違いを超えて、仲良く共存していくことです。国と国の考えが食い違ったり、対立が起こっても、それを武力では

細川首相（当時）の巻頭メッセージ

季刊誌『日本』20号
（1993年12月）

◎1993(平成5)年から10数年間、「中国」との交流に重点
～「日中友好」を深めるために、「日本」を知ってほしい！～

留学生から始まった「日本語交流活動」は4年後に、「中国との交流」に重点を置いた。中国の多くの大学が日本語授業で、寄贈した季刊誌『日本』を、副教材として活用している状況を知って、寄贈部数を増やしたり、「中国の大学生」を対象に『日本語作文コンクール』を開催したりした。「歴史問題」を抱えている中国の日本語学習者に、「日本と日本人のことをもっと知ってもらいたい」という思いからだ。

折に触れて、多くの先生から手紙やメールを頂いた。

・「大森先生ご夫妻からいろいろなことを学びました。利益を求めず、中日友好のために努力されたご夫妻の精神は、中国の日本語学習者の心に記憶されることでしょう」（王健宜・南開大学教授）

・「ご夫妻の個人のお力で、中国の日本教育に大変寄与されました。中国の日本語教育史に忘れられない一ページを残しました」（陳月吾・中南大学日本語専攻長）

・「教材の寄贈、日本語作文コンクールなど、中国の日本語教育に対するご夫妻の献身的なご努力は、両国の『日本語交流』の歴史にいつまでも記憶されるでしょう」（曲維・遼寧師範大学副学長）

・「季刊誌『日本』を読んだ学生諸君の輝いた目、その笑顔は、今も忘れられない。大森先生ご夫妻の長い間の活動で、日本を理解する中国の若者がたくさん育ちました」（張正軍・寧波大学教授）

・「ご夫妻の活動に参加し、励ましを受けた多くの若者が、各分野で中日友好のために頑張っています。ご夫妻の大きな貢献に感謝の気持ちがわいてきました」（劉愛君・大連工業大学外国語学院長）

（肩書は、手紙やメールを頂いた当時）

◎《日本語作文コンクール》は一年掛かりの活動

～応募要項作成、作文受付、審査、表彰状・学習奨励金の送付など～

□第24回（通算）の「世界の日本語作文コンクール」（2019年）の場合

・2019（令和元）年3月～7月

テーマ一、「日本のこと」で、「あなたの国」に伝えたいこと、は何ですか？

二、「あなたの国のこと」で、「日本人」に知ってもらいたいこと、は何ですか？　を決定。

10人の二次審査員を決め、朝日新聞社の後援（名義のみ）を取り付ける。

・7月

応募要項を作成して、国際交流研究所ＨＰ（http://www.nihonwosiru.jp/）で発表。

並行して、これまで協力して頂いている各国の日本語教師（ほとんどが日本人）や、日本語学習者に、メールで連絡。

さらに、世界の日本語教師と交流のある旧知の笈川幸司先生に、応募要項の告知を依頼。

・～11月15日の締め切りまで

メールで応募作文が届く。一日に約20通のメールが届き、多い日は40通前後。大学からのメールには、数十編の作文が添付されている。応募総数は66カ国・地域から9、０８６千編（メールが約7千編。郵送が約千五百編）。

夫婦で二台のパソコンを使って、すべての作文を読んで、一次審査の準備を進める。内容・日本語文章で優れている作文について、応募者とメールでやり取りをする。同時に、郵送による応募作文も事前審査をし、パソコンに入力する。

・11月～2020（令和2）年1月

一次審査の事前審査として、まず、約一割の作文（約1千編）を選び、パソコン上で読み直して、約5百編に絞り込んで、プリントする。

一次審査では、同じテーマが重複しないように選ぶ、などを基準に入賞候補作文を選んだ。

さらに、メールで、応募者・指導教官に意見を聞きながら作文の内容に沿ってデータを補充したり、「てにをは」などを変えたりして、入賞候補作文90編を決定。

・～3月

入賞候補作文90編をコピーして、10人の二次審査員に郵送。100点満点で採点してもらい、「採点票」を返送してもらう。二次審査員の合計点を基本に、出来るだけ多くの国・地域から入賞者を出すことも配慮して、入賞者57人を決定。

入賞者に、メールで顔写真（JPG）を送付してもらう。

・～4月下旬

入賞者57人の氏名（国籍、所属など）は、2020年4月、HP（http://www.nihonwosiru.jp/）で発表。

・5月～6月

新型コロナの影響で、表彰式を行うことができなかったため、入賞者57人に、メールの添付で、賞状（PDF）を送付し、連絡してもらった各人（日本の友人・知人を含む）の口座に学習奨励金を振り込む。中国の入賞者への送金では、段躍中氏（日本僑報社）の協力を得た。

以上の手順は、通算26回の《日本語作文コンクール》でもほぼ同じ。《日本語作文コンクール》の作業は、二次審査を除いて、すべて、夫婦で行った。（入賞作文は第二章、第三章）

◎煩雑で、苦労した学習奨励金の国際送金

二人だけの活動は、苦労の連続だった。なかでも、２０１６（平成28）年に第1回・世界の日本語学習者《日本語作文コンクール》各国の入賞者に、学習奨励金を送る作業は、思わぬ苦闘の連続だった。

入賞者１０１人（39カ国・地域）のうち、約30人の留学生など日本在住者には国内口座に振り込んだ。

中国在住の入賞者23人には、日本僑報社の段躍中さんの協力を得て、〈微信〉から送金した（これが何と、手数料無料）。ポーランドなどの数人の入賞者には、日本人教師の日本の口座に振り込んで、本人に渡してもらった。

それ以外の約40人の入賞者には、ＪＰゆうちょ銀行からの国際送金（手数料・金額に関係なく一件・２５００円）。手続きが煩雑で、４枚綴りの振り込み用紙、国際送金請求書兼告知書（口座あて送金用）に記載しなければならないが、書き損じも多く、窓口では、何度も書き直し、訂正、データの間違えを指摘された。夫婦で交代で、東京中央郵便局へ行ったが、入賞者1人を処理するのに、20分以上掛かり、1日に送金出来るのは、せいぜい４～５人。

海外送金のため、東京中央郵便局へ行った。ウクライナの社会人の口座番号は16桁だったが、「26から始まる14桁のＵＳドル建て口座でなければダメ」、と突き返された。

別の日、手続きが済んだ送金について、数日後に、東京中央郵便局から電話が入り、「カザフスタンの銀行はドル建てでは送金できない」とのこと。持ち帰って、本人に再度問い合わせて、1週間後に東京中央郵便局へ行ってやっと送金を終えたこともあった。

近年の入賞者への「送金作業」は、海外の入賞者の中に、友人・知人が日本国内に在住しているケースが増えたため、「ゆうちょ銀行のＡＴＭ機」からの「振り込み」が多くなり、負担が軽くなった。

◎ＮＨＫ『ラジオ深夜便・明日へのことば』のインタビューを二回

２０１２（平成24）年10月１日・２日の２日間と、２０１７（平成29）年１月13日の二回、ＮＨＫの『ラジオ深夜便・明日へのことば』のインタビューを受けた。テーマは、それぞれ、〈日中民間交流の24年〉と〈日本語普及は私の人生〉。最初の放送当日、仙台市の68歳の女性、宮崎市の83歳の男性などから、74通の電話とメールがあった。「ご夫婦で長い間、ご苦労様でした」、「お二人の間で『ボランティアという言葉を使わない』というお話は特に印象的でした」、「日中友好に個人で貢献した活動に感動した」、「中国の反日デモなどを知るにつけ、お二人の活動がますます意義深く重要だと感じます」など。

二回の『明日へのことば』をきっかけに、個人の支援の輪が広がった。

・大阪府豊中市の芦田悦雄氏（72歳）のメールの一部（10月２日）。

「二日間、ラジオからのお話を聴いて、感動いたしました。よくぞ長い間私財を投じて日中の草の根の交流に尽くされました。その熱意には言葉もないくらいに敬服いたします。心の通じている中国人は、どんなに政治の摩擦が起きようとも、日本人への信頼は揺るがないと思います。そのような人が一人でも多く中国に増えてほしいとの願い、同感しました。また、奉仕じゃない、とのお考えにも深く感銘を受けました。私は、退職後３年間内モンゴルの砂漠の小さな町で日本語を教えました。当時小泉首相が靖国を参拝する度に、身を縮めて外出したことを思い出しました。これからも日中の草の根の交流に何か役立ちたいとの思いを、強く持たせていただきました」　（２０１２年のインタビューの要旨は、翌年５年１月号の月刊誌『ラジオ深夜便』に14頁にわたって掲載された）

◎夫婦だけの活動で人件費はゼロ
～〈仕事〉は早朝の2～3時間――超朝型人間～

独自の〈日本語教材〉作りと寄贈、計26回の《日本語作文コンクール》の募集や審査も、《日本語作文コンクール》の二次審査・最終審査を除いて、すべて夫婦だけで行った。（巻頭カラー頁、第四章、第五章参照）

〈日本語交流活動〉に費やす時間は、主に、早朝の2～3時間。各国の学生や教師とのメールのやりとりも、ほとんど早朝。

大森和夫は、政治部記者時代の〝夜討ち朝駆け〟で、元々の早起きに拍車が掛かった。

30歳代に、当時、自民党幹事長と通商産業大臣だった田中角栄氏（元首相）を担当する〝田中番〟記者だった。毎朝早く、東京都足立区花畑の自宅から、東京都文京区目白にある田中角栄氏の邸宅に行き、陳情に来る政官財の関係者に「どのような話をしたのか」を聞いた後、新聞・テレビ各社の〝田中番〟記者とともに、田中氏から「政局や政府・自民党の政策」などについて懇談するのが日課だった。

朝早いから、自宅に来てくれる会社の車で田中邸へ向かう。渋滞の時には二時間近く掛かるので、朝5時過ぎには家を出る。夜は、ほかの政治家の自宅へ行って、帰りを待って、その日の政治の出来事について話を聞き出す。新聞の朝刊の締め切りは午前1時頃。自宅に帰るのは午前2時過ぎだから、平日の睡眠時間は3時間前後という生活が三年以上続き、妻と共に、短い睡眠時間が習慣になった。

活動を始めてからも、早朝から、ラジオを聞きながらの仕事という生活パターンが定着した。

◎健康上の〝マイペース〟

活動では、〝マイペース〟を守ることを心掛けたのは、健康上の理由もあった。

大森弘子は、１９８６（昭和61）年頃、腰痛がひどくなり、東京都練馬区の病院で椎間板ヘルニアと診断され、医者からは手術を勧められた。しかし、術後の不安からリハビリと薬の治療を選択。その後しばらく、腰、股関節、膝から足の裏の痛みが常態化した。大森和夫が自転車の後ろに乗せて病院通いの日も続いた。記者としての仕事に支障をきたしたことも、新聞社を辞める決断を促した。プールでのリハビリと電気治療、服薬などで、何とか元気を保ち、活動を続けている。

●●●

◎『ユニークな「日本文化」論』を、全国の高校約2千校に寄贈
～高校長から礼状～

２０２０年９月に、『世界の日本語学習者（64カ国・地域の１１２人）が書いた　ユニークな「日本文化」論』（朝日新聞出版刊）を、全国の高校（約2千校）に寄贈した。（巻頭カラー頁参照）

１９８９年から２０１９年まで24回行った留学生、中国の大学生・院生、世界の日本語学習者を対象にした《日本語作文コンクール》（応募総数は72カ国・地域から4万6、９２２編）の入賞作文から選んだ。日本の高校生に、「世界の日本語学習者が『日本と日本人』をどう見ているか?を知って、日本と日本人をあらゆる角度から見直してほしい」と考えた。

ほかに、夜間中学校（8校）、公立図書館（30都道府県の76か所）に寄贈。

２０２０年11月10日付けの朝日新聞・教育面で紹介され、多くの方々からご寄付等を頂戴した。それらは、本書の購入費と高校への郵送代に使わせて頂いた。

校長からの礼状の一部（敬称略）

・十文字中学・高等学校　校長・橋本ヒロ子

「本書を拝読すると、日本の良いところを未だ知っていなかったことに気づきます。

本書に掲載されている外国人の皆さんが在日中、差別的なことに会われなかったはずはないと思うのです

が、大森様お二方のご尽力で、ここまで書いてくださって、有難いです」

・福岡県立春日高等学校　校長・花田亮二

「高校生に自信と勇気を与える珠玉の一冊を全国の高等学校に送って頂くというすばらしい趣旨に深く感銘いたしました。私自身、海外から見た（現在の）日本文化の素晴らしさ、その誇るべき文化について改めて気づく良い機会を頂きました。早速、図書館の書架に並べ多くの生徒達に読ませ平和に貢献する志をもった真のグローバル人材の育成に生かさせて頂きたいと存じます」

・滋賀県立彦根東高等学校　校長・青山吉伸

「31年ものあいだ、日本語交流をされ、日本文化を世界に発信され、世界各国の人たちの意見をご紹介されておられることに、とても感銘を受けています。生徒たちにこれから益々グローバル化がすすむ社会で活躍できる人材を育成したいと考えています。その素地を作りたく、世界の国々の同年代（高校生）と交流し、互いの文化や習慣を伝えあって自国の良さを再認識し、また他国の価値観や考え方を知ることが必要だと考えています」

・仙台育英学園高等学校　校長・加藤雄彦

「ご恵贈いただきました本は、新時代を担うべく日々勉学に励む本校の生徒にとって、たいへん有益な内容であり、すみやかに、生徒・職員に周知の上、有効に活用してまいります」

・福井県立高志高等学校　校長・吉田　繁

「日本や日本人を世界の学生がどう見ているかが、それぞれの国の文化を通した視点で書かれており、生徒が、自国の文化を知り・考える機会を得ることができそうです。私自身、一つずつ作文を驚きと感動を持って、楽しく拝読しました」

◎世界の日本語学習者や日本語教師（日本人）のメールが支え！

毎日のように届く「メール」を読むのが、日課だった。その一つ一つが、35年間の活動を支えてくれた。

《日本語作文コンクール》についての「感想」など

・ハンガリー＝マロキティ・ルツァ（カーロリ・ガーシュパール大学、女、20歳）

「《日本語作文コンクール》への参加を一生忘れません。とても良い経験でした。いろんな人たちが私の作文を読んでもらえると思うと本当に嬉しいです。次回の《作文コンクール》をきっかけに、またお話しできましたら幸いです」

・ドミニカ共和国＝アブレウ・アレクサンドラ（銀行員、女、29歳）

「日本語作文を書く機会をありがとうございました。たくさんの人が参加していたので、入賞になるとは思いませんでした。日本語の勉強を続ける動機を与えてくださいました。とてもうれしいです」

・中国＝何景庭（福州大学、男、21歳）

「《コンクール》への参加をきっかけに、日常生活での発見を文章に整理し、日本への理解も一層深くなった気がします」

・インド＝オムカル・アコルカル（ティラク・マハラシュトラ大学、男、24歳）

「私のような日本に対する関心を持っている外国人のために、素晴らしい機会を作って頂き、本当にありがとうございます」

・チェコ＝ヤクブ・ヴェンツル（パラッキー大学、男、25歳）

「素晴らしいコンクールに参加させて頂き、とても励みになりました」

・ウルグアイ＝クリスティアン・グティエレス（ウルグアイ共和国大学、男、21歳）

「毎年、《日本語作文コンクール》が楽しみです」

・タイ＝（ウボンラチャタニー大学・日本語教師）運寿純平

「学生の作文に対する効果的な動機付けになりました。夢のような《日本語作文コンクール》に応募したことで、学生の人生がさらに大きく広がりました」

・ハンガリー＝（カーロリ・ガーシュパール大学・日本語教師）若井誠二

「《作文コンクール》という素晴らしいチャンスを学生に与えていただき感謝申し上げます」

・中国＝（福州大学・日本語教師）黒岡佳祉

「学生の潜在能力を発揮させる、外へ向かって開かれた人になる、という点が、《日本語作文コンクール》の大きな魅力です」

◎日本語教材〈【日本】という国〉の活用法など

2022年に、日本語教材〈【日本】という国〉（240頁）を出版・寄贈し、それを、電子書籍として公開した。各国の日本語教師（日本人）が感想や活用法を知らせてくれた（巻頭カラー頁参照）。

ほかの日本語教材についての感想や活用法は、第五章に。

・ナイジェリア＝森田誠亮（アブジャ大学日本語日本文化研究所・所長代理）

「非漢字圏で日本語を専攻とする高等教育機関の目的の一つは、日本の政治・経済・社会問題、現代社会、日本語、文学、歴史、伝統文化などを一通り学ぶことです。〈【日本】という国〉は、それらすべてを網羅しています」

・中国＝黒岡佳柾（福建省、福州大学・日本語教師）

「〈【日本】という国〉は、政治、歴史、自然、文学、料理など多岐にわたり、魅力的で、新たな発見と驚きに満ちた内容がいっぱいです。学生と教員が、様々な角度から〈日本と日本語〉を共に学び、共に語り合うことが出来る教材です」

・パラグアイ（アスンシオン）＝田村能子（セントロホッカイドウ日本語教室）

「楽しいのは、自分の国と比べ、みんなで話し合う授業です。〈様々な視点〉から書かれた〈【日本】という国〉はとてもいい教材です。ルビ付きもありがたいです」

・タイ＝運寿純平（ウボンラチャタニー大学・日本語教師）

「政治経済から地理、伝統文化、文学、料理、日本人、日本語など、幅広く網羅されており、学生が興味を持ちそうな話題を選んで教えることができます」

・ドイツ＝菊地奈緒美（ドイツＶＨＳ日本語教師の会）

「〈日本〉を様々な角度から知ることが出来る良い教材だと感じました。オンラインで、ドイツやポーランド、ルーマニアの生徒にも紹介したいと思います」

・アメリカ（カリフォルニア）＝久米英美子（日本語教室主宰）

「私が〈日本〉について知りたい事がある時に、真っ先にチェックする本です。自分自身の勉強にもなり、生徒さんに説明する時にも、とても役に立っています」

・トルコ＝浅野涼子（アンカラ社会科学大学外国語学部日本語翻訳通訳学科）

「〈【日本】という国〉は、〈日本〉について深く考えるきっかけになる要素がぎっしり詰まっています。日本語の〝重箱のような一冊〟です」

・日本（愛知県犬山市）＝土田敏子（名古屋教育学院）

「日本語を教えることは、日本文化や日本人の考え方、習慣などを教えること、と実感しています。日本語教師にとって、〝教え方の手引き〟のようです」

◎多くの「支援と助成」と「私財」

活動当初は、朝日新聞社を辞めた〈退職金〉の範囲で「石の上にも三年」のつもりでスタートした。

数年後、経費の面と個人の活動ゆえの超多忙と煩雑さから、しばしば、「活動をやめようか……」と思う状況に直面した。しかし、「日本語教育と日本理解に役立つ」、「日本語の文章を練習する絶好の機会」などの反応が届き、季刊誌『日本』、日本語教材『日本』や《日本語作文コンクール》が、留学生や各国の大学（日本語科）の教師や学生に、広く活用されていることを知って、活動継続を決意した。

そして、「一つでも、人の役に立つことをやる人間が偉い！」という両親の口癖を思い出し、退社の数年前に亡くなった両親の〈遺産〉を基に活動経費を捻出していこう、と決めた。

活動を支えてくれたのは、世界の日本語教育に関心のある人たちや日中友好を願う人たち、財団の支援や助成だった。35年間に、全国から五百人を超える個人や「かめのり財団」などいくつかの団体のご協力のおかげで、活動を続けることが出来た。毎年のように支援して頂いた方が数十人、２０１７（平成29）年には、東京都の女性（匿名希望）が、「ご夫妻の草の根の日本語交流活動には、本当に頭が下がります。感動を頂いたお礼です」という書状と共に、「５００万円」を直接届けてくださった。

35年間の個人や財団、企業などの支援と助成は総額で約1千万円に上った（支援者の氏名、財団名などは「おわりに」）。

活動の収支は年により異なるが、年平均で約５００万円。２０１９（令和元）年の収支決算書は次頁の通り。35年間の活動に投じた私財は総額で1億円を超えた。

2019（令和元）年の活動費の収支決算書

支出

世界の日本語学習者対象の第3回《日本語作文コンクール》		
開催関連費用合計		7,031,432円
内訳	一等賞（海外の大学）の日本招待・総経費	515,000円
	その他、入賞者100人への賞金総額	2,410,000円
	海外への入賞者への賞状・送金手数料など	350,000円
	〈入賞作文集〉出版経費など	2,841,432円
	諸雑費、作文集郵送費（内外）、審査員謝礼など	915,000円
電子書籍・日本語教材〈【日本】という国〉のネット上での公開の更新関連費用		45,232円
海外への郵送・連絡・通信費など（中国などの大学への書籍・資料を寄贈するEMS・郵送費など）		217,000円
国内郵送費（国内の大学、協力者への郵送費など）		81,000円
国内の連絡・通信費、パソコン経費、コピー費など雑費		738,000円
	計	**8,112,664円**

収入

個人の支援（43人、うち1人200万円）	2,725,000円
自己負担（大森）	5,387,664円
計	**8,112,664円**

～35年間に世界の日本語学習者に寄贈、公開した各版の日本語教材『日本』約80万7千冊と電子書籍～

日本語学習・情報　季刊誌『日本』

1989（平成元）年3月～1997（平成9）年3月

創刊号～第33号（26頁～38頁）　毎号4万冊～2万冊・計約73万冊寄贈

創刊号

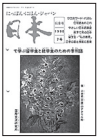
2号

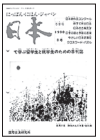
3号

4号

5号

6号


7号


8号

9号

10号

11号

12号

13号

14号

15号

16号

17号

18号

19号

20号

21号

22号

23号

24号

25号

26号

27号

28号

29号

30号

31号

32号

33号

日本語教材『日本』・各版と電子書籍

1995（平成7）年～2023（令和5）年まで、中国など海外の大学、国内の大学、日本語学校などに計7万冊超寄贈

（206頁）

（上・387頁

下・460頁）

（上・330頁

下・345頁）

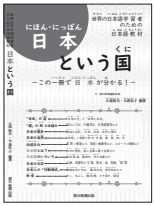
（上・311頁

下・302頁）

（最新版、改訂版＝252頁）

（「新日本概況」252頁）

2016年9月
電子書籍〈【日本】という国〉を公開
以降、3回更新
2022年5月大幅に書き直した
〈【日本】という国〉を出版
（240頁、朝日新聞出版）



電子書籍http://www.nihonwosiru.jp/で公開

独自に作成した「日本語教材」を約80万部、寄贈

1989年～2023年（中国、タイ、ポーランド、アメリカ、パラグアイなど40数カ国・地域）

季刊誌『日本』の各号（28～40頁）発行部数

1989（平成元）年～1997（平成9）年の8年間

号・年	発行冊数	号・年	発行冊数
1　1989（平成元）年	4万冊	18	2万冊
2	〃	19	〃
3	〃	20	〃
4	〃	21　1994（平成6）年	〃
5　1990（平成2）年	〃	22	約1万5千冊
6	〃	23	〃
7	3万冊	24	〃
8	〃	25　1995（平成7）年	〃
9　1991（平成3）年	〃	26	〃
10	〃	27	〃
11	〃	28	〃
12	〃	29　1996（平成8）年	〃
13　1992（平成4）年	〃	30	〃
14	〃	31	〃
15	〃	32	〃
16	〃	33　1997（平成9）年	〃
17　1993（平成5）年	2万冊	合　計	約82万冊

発行総冊数のうち約9万部は国内の大学、外務省などが買い上げ。

寄贈計＝**約73万部**

各版・日本語教材『日本』の寄贈冊数

1995（平成7）年～2023（令和5）年の28年間

中国の大学（約8割）を中心に、国内の「留学生」や、インドネシア、タイ、韓国、台湾、フランス、イギリス、アメリカなど30数カ国・地域の大学に寄贈

1995（平成7）年～	日本語精読教材『日本』	約3千部
1997（平成9）年～	大学用・日本語教材『日本』（上・下）	約2万6千部
2004（平成16）年～	新版・日本語教材『日本』（上・下）	約2万1千部
2009（平成21）年～	朗読MP3付『日本』（上・下）	約3千部
2012（平成24）年～	最新版＋改訂版 日本語教材『日本』（上・下）	約1万1千部
2014（平成26）年～	日本語教材『新日本概況』	約1万1千部
2022（令和4）年～	〈【日本】という国〉	2千部

寄贈計＝**約7万7千冊**

寄贈総数＝約80万7,000部

第二章

第26回（2023年）の「入賞作文」から52編（41カ国・地域）

（応募総数＝62カ国・地域から6、618編）

テーマ＝「日本語と私」
「あなたの国にとって、〈日本〉はどんな国ですか？」

❖怖かった「日本語」が新しい世界を開いてくれた！

～秋田県の特養老人ホームで頑張ってます～

ベトナム❇ラム・ティ・トゥ・ホアイ（特定技能・介護職、秋田県在住　29歳）

私は家族から離れられないタイプでした。高校を出て一番近くの隣の県の大学に入学しました。大学を卒業して地元で就職しました。近くて、いつでも実家に帰れて安定した人生を送るのが良いと思いました。けれども二年間、社会人になってから、ストレスが溜まって、我慢できず仕事を辞めて帰省しました。まだ25歳なのに自分の人生はもう終わってしまった、と消極的に考えました。数か月その状態で仕事もせず、ずっと家に引きこもりになっていました。

そんな時、友達から「外国に行ってみない？」と言われて、インターネットで調べて、「日本に行こう」と思いました。日本を選んだと言っても、どうやって行くのか、何も分かりませんでした。留学は、学費が高いのでやめました。日本で働くこと、について、「日本語能力試験」の「Ｎ３」に合格して「日本の老人ホームで介護職をする」か、「Ｎ４」に合格して「工場で働く」か、を考えました。日本語能力試験は、毎年二回試験があり、「Ｎ５」は一番易しく「Ｎ１」は一番難しいです。

介護職の方が好きでしたが、その時はまだ「あいうえお」しか覚えていなくて、日本語は世界で一番複雑な言語だと言われているので、「Ｎ３」なんて、合格できるはずはない、と、迷っていました。占いをしてもらったこともあります。すると、占い師に「あなたは介護職には向いていないよ」と言われました。そこで、半年、べ

トナムで日本語を勉強し、「Ｎ４」を取得した後、２０１９年から三年間技能実習生として宮崎県のパン工場で働きました。

私は自分に自信が持てませんでした。「自分はＮ３を取れない。介護職は出来ない」と思って一度、諦めましたが、やっぱり「介護の仕事がしたい！」と思い、本や動画やアニメなどを使って「独学」で勉強しました。そして、Ｎ３に合格出来ました。

今、秋田県大館市の特養老人ホームで仕事をしています。食事、入浴、排泄、移乗介助など、高齢者のお世話です。仕事に慣れるまでは大変でした。今10カ月たって、だんだん慣れて、楽しんで頑張っています。

日本で４年目、やっと好きな事、やりたい事が出来ました。仕事をしながら日本語をずっと勉強してきました。三年間の間に「Ｎ４」、「Ｎ３」、「Ｎ２」、一歩ずつ取得できました。勉強した日本語を通して日本人の働き方と日本の文化を体験して学び、日本での生活を経験して、日本人の友達、日本に住んでいる外国人の友達ができました。貴重な知識・関係・経験の全てが私の人生を変えました。

言語は、人間だけの素晴らしい発明だと思います。

最初、とても怖かった日本語が新しい世界を開いてくれました。日本語の勉強に伴って私も成長しました。３年間は、私の「栄光の牛歩」でしたが、自信を持つことができました。今、「Ｎ１」の資格と介護福祉士国家資格の取得を目指し、勉強を続けています。日本に来たことは、私の人生の一番有意義なことです。好きな仕事が出来て、新しい友達が出来て、私の人生を豊かにしてくれました。

日本、日本人、そして、日本語に心から感謝し、これからも頑張ります。

❖「日本」はウクライナの模範・モデルです！

～〝戦後〟の母国再建のために「日本留学」～

ウクライナ❋リンニク・マルガリタ（東京育英日本語学院　20歳）

ウクライナ人にとって美しくメロディアスでありながら、非常に難しい日本語を習得するのが私の夢でした。日本の教育は世界で一番優れていると聞き、夢をふくらませていました。私は将来、戦後の母国を再建するために、必要になるだろうと考えて、日本に留学しました。

私の国は国境を閉鎖しています。自宅は、ロシア軍が占領している地域から約30キロメートルにあります。ロシア軍に侵入、攻撃されるかもしれない緊張が続いていた2022年3月2日、ロケット弾や爆弾の恐怖の中、私は電車で国を出ました。車内はハリコフ州からの難民で溢れ、私はその車内で16時間立ち続け、ポーランドに到着し、ビザを取得しました。

日本留学ビザの手続きは難航し、私は何度も涙を流し絶望しましたが、あきらめずに何度もやり直し、3月18日に日本に到着しました。あきらめなくてよかった！と実感しています。日本で勉強している限り確実に安全の保証があると感じています。私は来日して、改めて日本人が高度で文化的な関係性を築いていると感銘を受けました。

日本は私の国の模範です。日本で仕事経験のある人や留学経験者、旅行したことがある人、すべてに共通していることがあります。日本について話を聞くと、皆が「日本人に対して、心に残る印象を持った」といいます。

それは、日本人が「特別な愛情を持って接してくれたから」だそうです。

子供の頃テレビで「日本ほど国民を大切にする国はない」と言っていたのを覚えています。安全性のある食品や高度な医療技術、健康的なライフスタイル、そして、優れた教育システムなどが「日本という国」を美しくしているのでしょう。日本の国民は、隣国との歴史や摩擦から困難な道を歩みながら、高度な文化を生み出し、科学技術の発展によって育てられ、今の日本があるのだと思います。世界中すべての国が日本のような国だったら、病気も犯罪も地球温暖化のような現象ももっと少ないに違いない、と思います。

また、日本は科学技術やエレクトロニクスの分野で常に最先端技術を開発してきました。

日本は地震や台風、津波など自然災害が多い国です。大災害の後、被災した人々の喪失感は途方もなく耐えがたいものだったでしょうが、日本の人々は復興のためにあらゆる労力を費やし、都市を再建しました。日本人の勇気、国に対する愛情がその力だったのではないでしょうか。私は今、そんな素晴らしい国で、このように教育を受けることができることに誇りを持っています。

広島や長崎の原爆を経験した日本が、今このように、平和で安全な生活を送れる社会システムを構築できたのは、国民の努力と日本の技術があったからだと感じます。ウクライナの復興で、どんな分野においても、日本語が使われるのであれば、私が役立つ時がくると信じ、日々の日本語勉強に熱が入ります。

私の国は基本的にヨーロッパを見本に、国の発展に努めてきました。しかし、戦争が終わった後は……日本の価値観が重視され、国の規律、高齢者や子供に対するマナー、環境や動物に対する思いやりなど、日本は、ウクライナのモデルになり続けるでしょう。

❖「日本語」は、「人の心を救う」潤滑油！

～日本で看護師を体験して、母国で高校の日本語教師に～

中国 ❊ 羊善嬌（日本語教師・広東省深圳市第三高級高校　32歳）

「日本語」に出合って10年の歳月が経ちました。日本語を学ぶきっかけは、２０１２年の大学三年生の時、交換留学生として埼玉県立大学へ留学することになったからです。

留学していた一年間に、「将来は日本の看護師になりたい」という考えが生まれ、日本語や看護師の勉強を始めました。看護師国家試験の前日、寒くて大雨の夜でした。大家さんが「明日は試験本番ですね。豚カツを食べて、合格できますように」と言いました。私は初めて「豚カツは試験前日の勝負メシ」だと知りました。また、正月に日本人の友達と神社に行った時、お賽銭には「ご縁」があるように「5円」を入れるとか、祝い事には尾頭付きの鯛が「めでたい」という意味の縁起物として使われるとか。面白い語呂合わせの言葉も学んで、日本の文化も少しずつ理解ができるようになりました。そして、周りの日本人から「自分は一人ボッチじゃない」という勇気をもらい、看護師国試に受かりました。

しかし、東京都東村山市で看護師になって、使える日本語の勉強はそこからでした。病院で、お医者さんや看護師さんたちは専門用語を使って、命令形の短い指示が多いため、聞き取ることが大変でした。「何をどうするか理解して、すぐ行動に移す」ことはさらに難しかったです。また、患者さんに検温時に「ひゃっこい、ひゃっ

こい」と何回も言われ、同僚に聞いたら「冷たい」の方言だと分かりました。相手の話し方が方言であったり、病気、加齢などさまざまな理由で不明瞭な発音のため、理解しにくかったのです。「私たちでも、方言のアクセントが聞き取れないことあるのよ。羊さんが聞き取りにくいのは当たり前です」と皆が慰めてくれました。

また、薬の名前はカタカナで長いものや一部分似ているものがあり、覚えにくいものでした。看護記録にも時間がかかりました。一番辛かったのは、伝えたいことが日本語で伝わらなかったことです。しかし、少しずつ言葉の壁を乗り越えました。「羊さんは何星座ですか?」と聞かれたら、「ギョーザです!」と冗談を言えるようになり、また、申し送りで、「これとこれをお願いしますね」と言われた時も、冗談で、「日本語わかりません!」と言えるようになり、皆が大笑いしたこともありました。

結婚のため2019年3月に帰国しました。7年間の日々は桜が散るのと同じように思いました。花びらが散るのは残念ですが、大切なのは開花してから散るまでの短く美しい期間です。日本語のつながりで看護師になれて日本人の人間味が深く感じられ、心が分かるようになりました。

帰国後に、私は高校の日本語教師になりました。看護師の使命が「人の命を救う」ことなら、教師は「人の心を救う」ことだと思います。「教育」は単に知識を教えるものではありません。いくら教えても「右の耳から左の耳へ」抜けていく生徒もいます。白紙のような少年たちを、「どうすれば、素質や能力を成長させることができるか」――教師の最も重要な課題です。「人の心を救うこと」は複雑です。そのための潤滑剤になる「日本語」に、もっと磨きをかけたいと思います。

私は自分の信じている道が良かったーこれこそが「日本語」と出合ってから芽生えた気持ちです。

❖「日中戦争」と「ソフト・パワー」の二面を持つ日本
～友好には、両国人民の努力が不可欠～

中国 ❊ **厳子皓**（創価大学文学部人間学科　23歳）

真の「日中友好」を求めるために、日中はより多くの交流を展開していくのがいいと考える。「日本」について、中国人は二つの評価をしている。ある面では、「抗日戦争の歴史的要因で日本を好まない」。もう一つの面は、「日本のソフト・パワー（アニメ、漫画、ゲームなどの文化）に惹かれて日本が好き」という二つの面だ。

私は後者で日本へ留学に来たが、私の家族や周りの多くの親戚は前者だ。少し矛盾した感じがしていたが、世の中は、そんなもんだとも思った。太極拳においては、「陰陽」があって、それらが調和することで、不思議な力と意義が生まれる。だから、私もそのことをあまり深く探求するよりは、今を楽しく過ごす方が大事だと思う。

中国も、これからだんだん「調和」する方向へ向かっていくと考えている。なぜなら、未来は若者の手にあるものだからだ。日本の「ソフト・パワー」の影響は短期間で弱まることはないと思う。日本に好意を抱く若者は徐々に増えていくと予測される。しかし、こういう状況が行き過ぎないように、中国政府もいろいろ働きかけている。

中国は、近年、中国建国記念日や中国建軍記念日などの期間に、愛国心を宣伝したり、国家主旋律、つまり、

国家中心主義の映画が多く公開されてきた。過去の戦争についてのものだけではなく、現在の中国の大国としての風格を表すものもある。こうして、未来の若者は、「日本という国」に対して、相反する二つの面の曖昧な感情を抱いていくのかもしれない。

現在の日本は、G7（先進国首脳会議）の連携で、欧米諸国に傾いている。中国も、「一帯一路」の政策で、西側世界へ向けて奮起している。そこに、「日中の共通の認識」が生じると思う。それをきっかけに、両国は真摯な交流を広げることが出来れば、と考える。

私は中国の高校を卒業し、２０１７年に日本に留学、日本語学校で勉強し、3年前に創価大学に入学した。日本と中国は隣国であることに変わりがないから、長い目で見ると、両国の友好は両国の人民にとって幸いなことだ。日中が、そういう場面に向うためには、両国人民の努力が必要不可欠になってくる。日本人には、日中戦争の歴史をもっと知ってほしい。そして、中国人には、もっと開放的な視点で日本と日本人を見るべきだ。

そのために、自分の力で貢献していきたい。文字、ショートビデオなどを通して、日中双方の人たちに、日中の文化的違いを伝え、互いの理解を深めて行くことができれば、と思っている。

❖日本語ガイドの母に感謝
～父や兄弟に「秘密の話」は、母と日本語で！～

カザフスタン ❋ ナゼルケ（アルファラビカザフ国立大学二年生　19歳）

私は、どうして日本語を勉強しているのでしょうか。一番の理由は「アニメ」の影響です。カザフスタンでは、「ナルト」という日本のアニメが流行っていて、小さい頃から、アニメに興味を持つようになりました。アニメで聞いた「日本語」をそのまま家で真似して、繰り返して言っていました。とても面白かったです。

二番目の理由は母が副業で、日本語のガイドの仕事をしていたからです。子供の頃から、家で日本語を聞いていました。母が話している言葉がカザフ語と全然違っていて、私も話したいなあと思っていました。中学校に入ってから「ママ、パパ」ではなく、「お母さん、お父さん」と呼び始め、生活の言葉をなるべく日本語にしました。母に携帯でメッセージを送るときは、「Ｇｏｏｇｌｅ翻訳」を使い、日本語で書いていました。

それから、高校生の頃から母の仕事を手伝うようになり、カザフスタンに来る日本人学生とも出会うようになりました。彼らは、カザフ人と服装も違い、行動も違います。私はそのことに興味を持ち、日本のことを知りたいと思いました。日本は美しい自然や伝統文化、先進技術など多様な面を持っており、それらに触れたいとも考え、大学で日本語を学ぶことを決めました。

13歳になった頃から、私はよく母とけんかをするようになりました。母に学校の成績を始め、私の生活スタイルや食生活のことまで注意され、一緒に住みたくないと思うぐらい、いやだった時期があります。しかし、そんな私も大学生になり、少し大人の気持ちがわかるようになりました。そして、何より母の偉大さがわかってきました。

高校まで、家の中で、文法などを気にせず、適当に日本語を話していました。しかし、大学に入学して本格的に日本語を勉強しはじめてから、漢字や文法の複雑さを感じています。カザフ語に漢字はないし、文法、特に「敬語」は難しいです。相手の立場に応じて、丁寧に言うのは大変です。いつも母はどうやって日本語を勉強していたのだろうかと思います。日本語を勉強しはじめて、母が流ちょうに日本語で話しているのを見て、私は母のことを本当にすごいと思うようになりました。

私は大学で日本語を勉強し始めて、ある程度のことは日本語で言えるようになりました。面白いのは、母と「秘密のこと」を日本語で話すことです。兄弟やお父さんに言えないようなことを、母と日本語で話すのは少し不思議ですが、面白い経験です。

日本語を真剣に勉強しはじめてから、私の母に対する考え方が変わっていきました。日本語のお陰で、一番大事な存在である母と仲良くなりました。日本語のお陰で、私は成長したと思います。

将来、私は日本語を使って、母の仕事に役立てたいと考えています。母は時々、日本からの観光客を相手に、日本語でガイドをしています。私は、将来、日本人向けの旅行会社を作り、たくさんの日本人にカザフスタンのことを紹介したいです。ありがとう、日本語。そして、お母さん。

❖パラグアイの人たちに日本語を伝えていきたい！

～五百種類以上の助数詞にびっくり～

パラグアイ❄高岡花恋（タカオカカレン）（ピラポ日本語学校　14歳）

私は日系三世で、「スペイン語学校」と「日本語学校」に通っています。日本語学校は中学三年までで、今年卒業します。私にとって日本語とは、日常会話をする言語です。私の住むピラポには、日本から移住してきた人や日系人がたくさんいて家族も日系人なので、小さい頃から日本語を耳にしていました。なので、私は三歳から日本語幼稚園に入り、六歳の時に日本語学校の一年生になり、今年中学三年生になりました。

私は、家族や日系人の友達との会話は主に日本語です。でも、日本語を学ぶのはとても難しいことだと思う出来事がありました。それは、スペイン語学校の友達が「日本語を覚えたいから教えて」と言われて軽い気持ちで「いいよー」と引き受けました。しかし、それはとても難しいことでした。

挨拶や、物の名前などを覚えたりするのはまだ簡単です。日本語はここからが大変です。

例えば、物の数え方。スペイン語では、「ウンアウト（一車）」、「ウンラピス（一鉛筆）」と、「数プラス名詞」で数えます。でも、日本語では、「車は一台、鉛筆は一本」です。

小さい動物は一匹、大きい動物は一頭、など、助数詞がたくさんあります。調べてみると、なんと日本語には５００種類以上の助数詞があるそうです。これには、私もびっくりしました。日常生活ではこんなにたくさ

んの助数詞を覚える必要はないとはいえ、覚えるのはやっぱり大変です。

しかも、ややこしいのは助数詞の種類だけではありません。「一匹」なら「いっぴき」、「二匹」なら「にひき」、でもそれが三になると「さんびき」と読み方が違います。四匹、五匹とこれ以降は「ひき」で統一かと思わせておいて、六匹「ろっぴき」もあるし、八匹「はっぴき」もあります。しかも、助数詞によって微妙に異なります。人を数えるときなんて、「ひとり、ふたり、さんにん」、なぜ「いちにん、ににん、さんにん」にしなかったのだろうか、と疑問に思ったりします。

他にも、難しいと思うことがあります。それは、日本語は「ひらがな、カタカナ、漢字」の三種類の文字を使い分けなければならないことです。日本語学校で「漢字」を勉強するとき、なんでわざわざ難しい「漢字」を覚えないといけないのだろうか。全部「ひらがな」で書けばいいじゃないかと思っていました。

けれど、漢字は、文章を理解しやすくしてくれることに気づきました。例えば、「にわにはにわにわとりがいる」というこの文は、一文字ずつ読まないと、すぐに意味は分かりません。ですが、「漢字とひらがなとカタカナ」で「庭には二羽ニワトリがいる」と書くと、すぐに理解することができます。

このように、日本語を一から覚えるということはとても難しいことだと改めてわかりました。こんなに難しい言葉を日常、理解できる私は天才なのかもしれない、なんて思ったりもします。

そんな「日本語」を話せることを誇りに思い、これからも、パラグアイの人たちに、「日本語」を大切に伝えていきたいと思います。

❖福島への「放射能研究旅行」が〝きっかけ〟

～俳句の「季語」は、日本人の豊かな想像力～

ハンガリー❋パップ・アニコ（物理学者・放射能研究者　59歳）

私は物理学者として、国民保護放射線監視のため、放射能研究室で仕事をしています。チェルノブイリへの放射能研究旅行にも何回も参加しました。２０１１年３月11日に起きた東日本大震災の時、福島の原子力発電所で爆発が起こって、放射能が問題になりました。そして、福島への放射能研究旅行をきっかけに「日本語」を勉強し始めました。

その頃、私が住んでいるジェール市の大学で日本人の先生たちの無料の「日本語教室」が開かれ、私も参加させて頂きました。ある授業で、日本の向比登志先生は、「インターネットの世界は、どこにいても、日本の大学で勉強出来て、それに修了証を頂く事も出来る」と言い、「www.gacco.org」というページを見せてくれました。このページを通じて、どこでも色々な日本の大学で行われている様々な無料講座に参加できます。私は今まで沢山の講座に参加させて頂き、修了証を頂きましたが、私の一番気に入った講座は、大手前大学（大阪）の『俳句・十七文字の世界』という講座でした。

この講座で、川本皓嗣先生は芭蕉の色々な名句を丁寧に説明してくれました。この頃、私はＮ４の日本語能力試験に合格したばかりで、難しかったけど、面白かったので頑張り、大変勉強になりました。それから私も俳句を詠み始めて、俳句を詠む事は私の一番大切にした趣味になりました。

２０１４年４月からフェイスブックの「俳句大学投句欄」のメンバーとして毎日、仕事から帰るとすぐ、「日本語」で俳句を3句詠みます。メンバーの俳句の中から毎日、俳句大学の先生たちが一句を選んで、鑑賞しています。私の俳句も何回も選ばれました。その一つが「天井に風船多し誕生日」です。

インターネットの世界では、私も「俳句大学ネット句会」に参加しています。「俳句大学長」の永田満徳先生のおかげで、毎年2回、『俳句大学』という句集が出版され、先生たちの俳句、会員たちの俳句が紹介されています。永田満徳先生は、「インターネットの世界では、俳句の国際化も出来るでしょう」と言い、フェイスブックの「Haiku Column」というグループを作成し、海外の俳人たちも母語で毎日俳句を詠んでいます。『俳句界』という雑誌や『Haiku Anthology』という国際句集などが出版されています。

ある時、永田満徳先生と向瀬美音先生と一緒に、「国際歳時記」の作成に参加し、季語の本意を書かせて頂きました。「季語」と「歳時記」の研究を通じて、日本語も日本文化も、もっと詳しく理解出来ます。

「俳句大学」の「俳句大学評論賞」があり、俳句に関する論文を書く事が出来ます。昨年、『風の名前に季節感』という私の論文が「俳句大学長」の永田満徳先生に「特別賞」に選ばれました。「季語」には、日本人の自然に対する愛や、日本人の豊かな想像力を感じます。例えば、春は「風光る」、夏は「風薫る」、秋は「色無き風」が吹き、冬は「北風（ならひ）」が吹きます。また、梅雨入りの時は「黒南風（くろはえ）」、梅雨明けの時は「白南風（しらはえ）」が吹きます。

「伝統俳句」を詠みながら、旧仮名の使い方と俳句文法も勉強出来ます。さらに、「俳句」を通して、「日本の文化」について、いろいろ勉強出来るのがとても楽しいです。

❖『羅生門』から、「献身・利他主義」を学んだ！
～日本と中国は、「共感し合える社会」へ共に歩もう～

中国 ❋ **周思琪**（福建省・福州大学　20歳）

高校三年生の時、勉強のストレスを和らげるため、クラスメートから小説を借りた。日本の作家・芥川龍之介の『羅生門』（中国語訳）だ。

それは、私が読んだ最初の日本文学作品となったが、同時に深い影響を受けて、大学で日本語を学ぶきっかけになった。

小説の最初の印象は、まさに「怖い」の一言だった。高校三年生の時は、なぜこのような物語があるのか分からず、ただ人間の身勝手な態度に嫌悪感しか湧かなかった。生きるために死体の髪を抜く老婆の姿を想像して、宿題が手に付かなかった。そして、「己もそうしなければ、餓死をする体なのだ」と言って、下人が老婆の着物を奪う最後の場面は、今でも悪夢のようだ。

しかし、大学生になって、日本文学の授業で、日本語版『羅生門』を読み、日本語や日本文化を学ぶなかで、考えが変わった。本当に「老婆と下人」は悪人だったのだろうか。そもそも人間は自分が生き残るために、他人を犠牲にしているのではないか。老婆であれ、下人であれ、その行為は、自分が生きるためだ。そう思うと、高校生の時に感じた恐怖とは別の恐怖が襲ってきた。「私たちの世界は、『羅生門』の世界とは本質的に変わっていないのではないか」。

食事に出される鶏肉を食べることは、人間の命を維持するために、鶏の命を奪う事だ。薬一つにしても、動

物で実験をしてから人間が服用する。また、自分のことしか考えない人が増えた気もする。日本では、回転寿司店で、他の客が頼んだ寿司を勝手に食べて笑い飛ばす動画が問題となった。中国でも、四川大地震の時、先生が被災した学生を残して一人で逃げたことがネットを賑わせた。日本でも、中国でも、「私だけがよければ……」と行動する人が少なくない。『羅生門』の世界は、現在のこの世界でも生き続けているのだ。時代は変われど、変わらない「人間の利己主義」に、私はゾッとした。

しかし、私は希望を捨てていない。２０２０年、コロナ禍で昼夜を問わずに患者の治療にあたった日中の医師たち。２０２１年に、江蘇省南京市で市民を刃物で無差別に殺そうとした人に、３度刺されても、その凶行を止めようとした１人の中国の一般市民。

『羅生門』とは異なる「献身・利他主義」に満ちた世界もこの世にある。「ささやかな共感」だと思う。電車の中で、体が不自由な人を見かけたら、席を譲ってあげること。エアコンが効いた部屋で、鼻水や咳をしている人がいたら、適度に温度を上げてあげること。一人ひとりが「相手の苦労を自分の苦労だと感じる共感力」を持つことができれば、どの国でも、安心して暮らせる社会になるだろう。

「上善は水の如し。水は万物を善く利して、而も争わず」という老子の言葉には、「水のように、いかなる名声も求めないで、他人を助けよう」という意味が込められている。また、日本も、「おもてなし」の精神に基づいて相手への細かな気遣いができる国である。「何も求めないで、相手を思いやり、尽くすこと」。そんな他人への配慮を、日本人も中国人も改めて思い出し、語り合い、学び合ってほしい。そうすれば、『羅生門』の世界を超え、互いのことを考え、共感し合える世界がきっと実現するだろう。そんな世界を期待しながら、私はこれからも、楽しく、日本語を学びます。

❖「言葉」は、心を癒す力がある！
～有島武郎の『小さき者へ』に共感と慰め～

中国 ❋ 趙歆怡（江蘇省・南京工業大学　20歳）

幼い頃から、言葉にはそれぞれ独特な魅力があると思い、興味を持ち始めた。初めて「日本語」に触れたのは、中学生の時で、いろいろな日本のアニメを見始めた時だ。当時はストーリーに想像力が溢れ、魅力的だと思っていただけだったが、たくさん見ていると、日本語でないアニメがどこか変だと感じることさえあった。大学で日本語を勉強し始めてから、ますます多くの日本の作品に触れてきた。日本語と接しているうちに、言葉の力が助けてくれることを何度もしみじみ感じた。

子供の頃は母に言われた通りに、ピアノやダンスを習っていたが、本当は好きではなく、苦痛しか感じなかった。自分が本当に好きなことを、周りの人の意見に合わせて諦めてしまったこともあった。だからこそ、「モブサイコ１００」というアニメで、「なぜお前がそいつらに合わせる必要がある？　お前の人生の主役はお前だろう」「嫌な時はな、逃げたっていいんだよ」などのセリフを聞いた時は、深く感銘を受けた。

それ以外に、「怪我して学べ」や「疑うことを知れ」などの言葉も、私の人生に大きな影響を与えた。失敗を重ねてこそ成長できる、世の中に当たり前にされていることが必ずしも正しいとは限らない。だから、いつも自分なりの考え方を持たなければいけない、と私は考えるようになった。

言葉は、人生の哲学を教えてくれるだけでなく、心を癒す力がある。また、日本語を通じて、時空を超えて知らない人に共感できる。これは私にとって最も魅力的なことだ。私は迷っている状態になったことがある。他の優れた人に比べて、自分の日本語レベルがまだ足りなくて、厳しい競争社会でどう生きていけるのか、と心配でたまらない。未来に対してもまだはっきりした計画がなく、時々、儚い前途に対して焦りを感じる。

しかし、大学三年生の時、「日本近代文学」の授業で読んだ有島武郎の『小さき者へ』で、「私はその頃心の中に色々な問題をあり余るほど持っていた。そして始終齷齪（あくせく）しながら何一つ自分を『満足』に近づけるような仕事をしていなかった。何事も独りで噛みしめて見る私の性質として、表面には十人並みな生活をしていながら、私の心はややともすると突き上げて来る不安にいらいらさせられた」を読んだ私は、「大丈夫、一人じゃないんだ」という慰めになり、この共鳴によって悩みや焦りが一気に軽くなった。

さらに、共感することで人を励ましたりすることができるのが、言葉の力だ。中島美嘉の「僕が死のうと思ったのは」（秋田ひろむ・作詞）という歌で、「明日を変えるなら今日を変えなきゃ」を聞いて、誰でも見えない敵と戦っているから、焦るよりも「今の自分を変えること」が大事だと気づいた。

日本語がだんだん好きになったのは、触れた言葉からいろいろ学び、その力に心を打たれ、共感して慰めや励ましを得たからだ。その原因をもっと深く追求すれば、これらの言葉を生み出した日本人の思想や精神などに感服されたのかもしれない。日本語を通して、多くの日本人と魂の交流ができるのは、言葉の強い力だと思う。

❖アニメ『犬夜叉』を見て、「日本語」に魅了！

～声優になって、日中両国の「魅力」を伝えたい～

中国　黄美慧（大連工業大学　21歳）

昔の私は、いつも茫然として、人生の意義とは何か、などは全然分からなかった。このような状態は「その日」まで長く続いていた。今でも、「その日」のことをはっきり覚えている。高校入試が終わった日でした。試験が終わって、いつものように家に戻り、テレビをつけた。ちょうど日本のアニメが放送されていた。それ以来、私は、ほとんど毎日、ロマンチックなアニメの内容と優しい日本語のセリフに没頭し、魅了された。そのアニメを見ているうちに、「人生の意義を探求したい」という気持ちが心の中に芽生えた。

そのアニメは『犬夜叉』とはっきり覚えている。私は「桔梗」という巫女が大好きになった。彼女は一生、人間になった犬夜叉と一緒にいるはずだったのに、彼女が救った妖怪に迫害され、非情にも彼らを解体した。犬夜叉は復活した後、彼女の生まれ変わりを再び好きになった。桔梗はそれを見た後、彼女にとって憎しみがあり、悲しみがあり、助けがなく、その表現しにくい愛は人に訴えることができず、恨みだけが残った。「人形」でも生き続け、犬夜叉と再会できるようにしなければならなかった。最後に彼女がほっとして立ち去って、私はやっと、桔梗の愛がいかに無私であるか、いかに深くて高潔であるかが分かった。

犬夜叉が桔梗を見送った瞬間を見ると、私は桔梗の悲惨な運命を実感し、涙が流れた。しかし、作者が桔梗

をこんなに惨めに書いていなければ、桔梗のような忘れられないキャラクターを作ることはできなかった。アニメを見た人たちも、心の高潔な巫女を見ることはできなかっただろう。

見終わった後、私は長い間アニメに夢中になってきており、彼女の一顰一笑（いっぴんいっしょう）、一字一句は私を感動させ、忘れられない重要なものとなる。

あの夜、私の体にあるスイッチが入った。こんなに私を引きつけるものはなかった。アニメの中では、好きな人に出会ったように、胸がキュンとする。水のように流れるような「優しい日本の言葉」も好きになった。そして、「アニメの声優になりたい」という夢を抱くようになった。私の心の中で日本のアニメを愛している気持ちを、もっと多くの人に伝えたい、と思ったからだ。

大学入試でも迷わず「日本語科」を選んだ。日本のアニメが大好きだからこそだ。声優という仕事は、簡単ではない。日本語の「言語の発音、アクセント、イントネーション、使い方」以外、「話す場面に応じた言語の裏の意味・感情」を理解しないといけない。しかし、三年間の日本語の勉強でも、時々ミスをしたり、コミュニケーションができない時もある。しかし、いくら挫折しても挫けず、ぎこちなく自分なりの日本語で全力を尽くして自分の気持ちを伝えたいと、私は、いつも思っている。

時は巡り、季節は移ったが、日本語に対する愛は変わらない。将来、日本語を流暢に話し……桜の散る秋葉原を散歩して、自分の身で本当の日本を体験したい。私は、中国の若者の力で、私の好きな日本のアニメのキャラクターのような、「日本の魅力」を中国人に伝え、「中国の魅力」を日本の若者に伝えたい。そのために、日本語の勉強を頑張りたい。

❖三年間の日本語との「美しい物語」
～〝磁器の人形〟のような〝高嶺の花〟～

中国 ❋ 王雅琪（南京郵電大学　21歳）

いつのまにか日本語を勉強して3年になった。三年間に学んだすべてが、私と「日本語」との美しい物語になっている。初めて日本語に接した時、日本語は私にとって「磁器の人形」のようで、「美しくて、壊れやすい」ものだった。そこで、私は絶えず学習を通じて、彼女を保護して、彼女を飾った。この過程は「長くて、時には無味乾燥」のものであり、知らないことが多過ぎて、自分の無知を責めとがめた。それでも継続して努力して、1ページまた1ページと、単語を暗記して、文法を理解して、文章を暗記した。

この過程の中で「自分が進歩している」ことに喜びを感じた。彼女は私を魅了し続けた。私の人生のテーマになっている彼女と私の距離は少しずつ近くなったようだ。私は彼女に新しい服を着せて、長い髪をとかしたが、あの美しい〝磁器の人形〟は、やはり私にとって〝高嶺の花〟のように感じられた。

私は彼女を理解して、彼女の過去を知りたい。彼女は長い年月を歩んできて、下駄が石畳の上で軽く音を立てていた。多くの文人墨客が彼女のために足を止め、多くの思いを残した。「寂しさや　一尺消えて　ゆくほたる」――彼女の眉間の哀愁を見た者がいる。「露の世は　露の世ながら　さりながら」――彼女の苦しんでいる本音を聞いた者がいる。「物思へば　澤の蛍もわが身より　あくがれいづる　魂かとぞ見る」彼女が誰を思って

いるのかとわからない者がいる。「願はくは　花の下にて　春死なむ　その如月の　望月の頃」――彼女の決然した後ろ姿を見た者がいる。『金閣寺』のような美しさがある彼女について、心は夏目漱石が書いたように復雑で、人々の評価は『藪の中』のようにまちまちである。私にとって彼女は目に見えるが、はっきりと見えていないとも言える。

だからこそ、一層彼女の生活に入り込みたいと思っている。毎回、その「ただいま」という言葉を聞くと、本当に遠い過去から返事をもらえて、彼女は私に付き添ってくれているような気がする。毎回、「いただきます」という言葉を聞くと、和食を体験して、懐石料理と「鯛めし」から「もんじゃ焼き」と「たこ焼き」まで、彼女は近所のお姉さんのようにみんなに気を配っていることに気づく。毎回、着物あるいは浴衣を着て、小さなお守をつけて、緑あふれる街をゆっくり歩いていると、彼女の美しさには伝染力があって、私を美しくしてくれるような発見がある。タコ焼きのカリッとした衣の下には柔らかくて繊細な餡があって、彼女に対して「高嶺の花」の見た目の下にも温かく柔らかい心がある。そして、彼女は私に対しても、誰に対しても、最初からいつも平等に扱ってくれていたことが分かった。

視線が等しくなる時だけ生命の間で交流が可能になる。高い位置にいるのではなく、薄氷を踏む必要もない。最も快適な状態で、最も堅固な友情を結ぶことが目標になる。日本語を勉強している私はまだ苦労している。日本語を少しも知らない人は、私に対してどんな誤解をしているのだろうか。私は日中友好の橋になりたい。そして、コミュニケーションをとり、誤解を解き、日本語との「美しい物語」をみんなに伝えたい。

❖日本の経験を参考に環境政策を！
～人間中心主義から自然自体のための環境保護～

中国　張唯佳（南京工業大学　20歳）

中学で一度だけ、山でゴミ回収するボランティア活動に参加したことがあった。山麓から山頂まで散らかしていたペットボトルと食品のポリ袋、プラスチック袋のせいで、自然の美しさが壊されていた。ボランティアで半日をかけてゴミを集めた。緑を少し取り戻した山の景色を眺めて達成感が湧いてきた。イベントが終わり、友達と「今日はいいことをしたわね」と言い合った。

しかし、その時、気づいたことがあった。後ろの子が疲れて水を一気に飲んでポットボトルをゴミ箱に向かって投げた。ゴミ箱には入らなかった。でもゴミ拾いで疲れきっていたのかもしれない。その子は結局目を逸らした。

何とも言えない気持ちだった。特にその子を責めるつもりもない。似たようなことを一度もしたことがない、そう言い切れる人はほとんどいないと言えるのではないか。今、中国では環境意識と環境教育の欠如が大きな社会問題となっている。自己中心意識が強く、環境への関心が足りないままでは、何回ゴミ拾いに参加しても、ゴミは、またどんどん生まれてくるはずだ。

環境問題は今や長い歴史を有する問題となった。多くの人がそれを認識しつつある今も、山や海などは旅行のシーズンになるたびに、旅行者が去った後のゴミ問題の記事が一向に減らない。

テクノロジーの発展や文化教育の普及などで、人々の知識水準が上がっている。それでも周囲の環境がよくなるどころが、悪化している。プラスチックゴミだけでも、毎年少なくとも８００万トンが海に流れ込んでいる。２０５０年には、海に漂うゴミの重量が魚類の総重量と同じになる、と言われている。

日本は二十世紀・七十年代から、環境思想を「人間のための自然保護から環境主義へ」、大きく転換した。核心は、人間中心主義から自然自体のために行う環境保護だ。教育面においても、小学校から、自然との直接の触れ合いを増やすことで、子供の環境意識を養っている。一方、中国は、環境についての教育はかなり限りがあり、本の知識や形式的なものを強調し、実生活と大きく離れていることが問題だと思う。

もちろん、ゴミ拾いなどのボランティア活動の開催が、意味がない、とは思わない。しかし、それと同時に、公益心を植え付けることも大切だ。日本では、レジ袋の削減のため、２０２０年7月からレジ袋を有料化した。その代わりに、色々なデザインのエコバックが市場に出回り、わずか数カ月で著しい効果が表れたそうだ。国際的にも環境意識が高く評価されている日本ならでは、だ。中国も似たような政策を打ち出したが、期待通りにはいかなかった。やはり、環境意識の問題かもしれない。

環境保護は一時の社会貢献ではなく。社会の一員として当然担うべき責任だ。現代の環境破壊を引き起こしたのは、人間の自己中心主義と切り離すことはできない。それを打破するには、学校教育に活力をつける必要もあり、何より人々に内面的な変革が求められる。

時代の課題を前にして、中国も積極的に取り組んでいる。日本の経験を参考にし、人間中心主義から抜け出し、責任から実行に移していくべきだ。

❖心のこもった「文化交流」は国境を超える！
～忘れられない！　高校での日本のバレエ団との交流～

中国　丁若璋（青島大学　20歳）

私は小さい時から日本のアニメをよく見ていました。知っている「日本語」や「日本人」は全部アニメの中のものでした。初めて日本人に会ったのは、高校に入学したばかりの時でした。日本から有名な松山バレエ団のメンバーの人たちが訪れました。全校挙げて歓迎会を開くことになり、小さい時からずっと「箏」（中国の伝統楽器である古箏）を習っていた私は、迷わず応募し、幸い、参加できることになりました。

「中国の伝統芸能を披露し、中国の伝統文化をアピールしましょう」と校長先生が言いましたが、私は「アニメではなく、本当の日本人だから、どんな人たちだろうか。本当の日本語だから、どんな言葉かしら」と、ワクワクしていました。

歓迎会当日、高校の先生たちのほか、市の偉い人もスーツ姿で参加しました。会場は、和やかですが、厳かな雰囲気でした。ワクワク気分の私も緊張しましたが、ミスなく、先輩の一人と一緒に、「箏」の演奏（曲は「雪山春暁」）を終わらせることが出来ました。ほかの同級生もみんな緊張していましたが、日本の人たちは惜しみなく、私たちへ熱い拍手を送ってくれました。

最後に、バレエ部が登場しました。その時、日本の人たちが「ざわざわ」しだしました。「一緒に踊っていいですか?」と言い出したのです。「せっかくなので、中国の若いバレエダンサーと一緒に踊ってみたい」という

ことでした。素早くバレエ用のシューズに着替え、バレエ部のみんなの後ろにスタンバイしたのです。会場が一変しました。さっきまで、ほとんど無表情で私たちの出し物を見ていた偉い人も校長先生も、満面の笑顔になって、一緒に手拍子をとって、心から楽しんでいる様子でした。簡単な舞踊の後、基礎のステップのほか、練習のコツも丁寧にバレエ部の部員に教えてくれました。

言葉がわからなくても、心が通じるように、笑顔が溢れるその交流の場は、不思議なものでした。

「何か教えてくれたらいいなあ！」

私は羨ましくてたまりませんでした。でも、どうせ、私の存在はわからないだろう、と勝手に寂しくなっていました。いよいよ、お別れの時間です。私たちと団員たちと一人ずつ握手して、別れの挨拶をしました。私の番になった時、一人の女性の団員が声をかけてくれたのです。「箏の演奏は素晴らしかったよ。もう少し笑顔を見せてくれたら、あなたの演奏姿はもっと美しく見えると思うわ。頑張ってね」。私は感激しました。彼女の手振り身振りから、ほとんど意味が通じたのです。本当に心を込めて私たちと交流しに来てくださったのだ、と感動しました。

その交流が、私に本当に日本語を勉強しようという衝動を起こさせたのです。日本語の美しい口調だけでなく、日本語の背後にある穏やかで礼儀正しい行動のためです。

あれから4年間経ちましたが、私は今も、松山バレエ団との交流を忘れられません。彼らから、とても重要な教えを学んだからです。心のこもった「文化交流」は、国境を超えることができます。私は、もっと日本語を勉強し、日本に行って積極的に日本人と交流し、本当の日本文化を知りたいです。そして、心を込めて中国のことを日本人に紹介したいです。中日友好の「架け橋」となり、中日交流の本当の使者となりたいです。

❖私を救ってくれた人生の教師は「日本語」
～亡くなった父の「疑問」に、まだ、答えられないが～

台湾 ❋ 林元浩（致理科技大学応用日本語学科　20歳）

「日本語を勉強して、卒業後に仕事を見つけられるのか？」

高校で「応用日本語学科」を選んだ私に、父が疑問を投げかけました。当時の私が知っていた「日本語」は、「おはよう」と「ありがとう」ぐらいで、五十音すらわかりませんでした。「日本」に行ったこともなく、当然、日本人の知り合いもいませんでした。そのため、父の質問に答えられずに、自分でも日本語がうまく学べるとは思ってもおらず、不安しかありませんでした。

父は日本語を学ぶのにはお金もかかるし、将来、仕事も見つけられないと思っていた。母も、私が三日坊主だと思っていたので、反対されました。こんな状況でしたが、私は自分の考えを変えませんでした。家族の反対を押し切って、決めたことなので、当然、家族からのサポートはありませんでした。私は学費を払うために、中学卒業と同時に、アルバイトを始めました。「案ずるより産むが易し」という考え方で、すべてがうまくいくと思っていました。

そんなある日、父が突然亡くなりました。それが私の人生には大きな出来事でした。日本語を学び始めたばかりだったので、大変でした。本来、外国語の勉強が苦手な私が、よりによって、日本語の専攻を選びました。あきらめたいほど後悔して、授業をよくサボりました。

父の反対を押し切って始めた日本語、私は多くの困難にぶつかりながらも、日本語の勉強を続けることができるようになりました。自分自身にもう何も期待できなくなっていたある日、日本語の先生が多くの時間をかけて、私を励ましてくれ、個別指導をしてくれたのです。

その後、私の日本語が一気に伸びていきました。それだけではありません。ほかの科目の成績も徐々に上がってきたのです。日本語が少しずつ上達してくると、クラスメイトたちからは日本語の質問をされることもあり、それがきっかけに友達がたくさんできました。そのおかげで、私はさらに真面目に日本語の勉強に取り組むようになりました。

日本語は私にとって、言語だけではなく、人生の教師でもあり、友でもあります。私に自信とやる気を与えてくれ、日本人と交流できるようになりました。一方で、日本語は私の足らない部分も明らかにしてくれました。コミュニケーション能力や礼儀作法を、もう少し学ぶ必要があると感じました。

このように、日本語は私に人との付き合い方、勉強する習慣、日本の文化と歴史など、さまざまなことを教えてくれただけではありません。いろいろな問題を解決する能力も鍛えてくれました。そして、いつも「自信」と「勇気」を持つことが大事だということを、教えてくれました。

何よりもうれしかったことは、日本語を通じて「成長する」方法を学べたことです。日本語においても、人生においても、すべてが順風満帆ではありません。様々な困難を乗り越えなければならないこともあります。でも、障害があるからこそ、自分自身を成長させることができるのです。

「日本語を勉強して、卒業後に仕事を見つけられるのか?」という父の疑問に、まだ、明確には答えられませんでした。しかし、自信をもって答えられるのは、「日本語が私を救ってくれました」ということです。

❖「書店」は日本を理解する「ゲート」

～「本の位置」を覚えたら、日本語も、自分も成長できた証！～

韓国 ❊ 楊アラム（名古屋大学博士後期課程・日本文化学専攻　38歳）

日差しが暖かい午後だった。もうすぐ夏になりそうだが、鼻に触れる風だけは春だった5月。遠くに光化門が見え、人々はどこかに急いで行く。私は慣れ親しんだ所に吸い込まれるように、5号線の地下街を少し曲がると、私にはおなじみのギョボ書店がある。私はギョボ書店で図書を検索したりしなくてもいい。何度も来て、図書の位置をほとんど覚えたから。〝木が風で倒れたような長い机〟が置かれ、机の下の〝根のような〟椅子。人々は、それぞれいろんな姿で本を読む。白い煙が上っていくような紙コップの中のコーヒーも、「斜めにかけた眼鏡」を机に下ろすおじいさんも、本を読む子供たちの姿を見る母親たちの様子も、私の目には「一幅の風景画」のように見える。その瞬間、目を閉じて、自分だけの「映像」を撮ってみる。パシャリ。記憶に残った。

今日は、日本文学コーナーに新しい図書が出たかどうか、私に読めるかどうか心配になる。高校生の時、読めない日本語で書かれた図書を買って、じっと見つめていた記憶がある。読めなくて、分からないひらがなとカタカナが並んでいた。小さな紙の中に、ぎっしりとした感じで、それぞれの日本語の波が揺れ動いていた。異国のようだ。

私はあの時、行きたくても行けない日本のことを考えていた。「いつか、本当に行けるかな?」という希望さえなかった時代、私にとって、ここは「本屋さん」は、日本語があふれる「日本」そのものだった。私はここで村上春樹の『ノルウェイの森』と、東野圭吾『容疑者Xの献身』で「日本人」に会ったような気持だった。もっと知るために翻訳本も読んだ。私の日本語の足りなさのために、理解できないことを防ぐために。

私にとってこのギョボ書店は、「空港内のゲートのような場所」、アルゼンチンの作家・ボルヘスの短編小説集『バベルの図書館』みたいだ。「果てしない日本語」に吸い込まれる。そんな気持ちで、「日本語、日本人、日本文化」に向き合っている。私はその日も「一冊の本」を取ってきた。留学のため、日本入国を10日後に控えた日だった。日本に行ったら、書店にまず行きたい。そして、日本語の本に話しかけてみたい、と思い続けた。

時間が結構掛かったけど、私は2018年に、やっと日本に来ることが出来た。半年間、名古屋大学で勉強するためだ。そして、「日本文学と日本文化」をもっと研究したいと思い、2021年に名古屋大学大学院に留学した。日本の名古屋市にも「大好きな書店」がある。まだ本の位置は把握出来ていない。しかし、図書がいっぱいある「大好きな日本の書店」の本の位置を覚えた時は、日本語をちゃんと理解出来るようになった証であり、私自身も成長している証だと思う。その日が目の前だ。

❖日本語の「言葉」は深く、数が多い！
～好きな「日本の歌や小説」を翻訳したい～

タイ❋サランヤー・インティセーン（ウボンラチャタニー大学日本語学科3年　22歳）

私が日本語を勉強し始めた一つの理由は、好きな「日本の歌や小説」を翻訳したいからです。

そして、勉強し続けたら、一番難しいと思ったのは、日本語の「言葉の意味の深さ」と「言葉の数が多い」ということです。日本語の深い「言葉」を翻訳するのが、とても難しいと思います。

例えば、「切ない」は、苦しくて辛い気持ちになった時、自分ではその辛さをどうすることもできない、ということを意味しています。それをタイ語に翻訳すれば「シアジャイ」、「トゥック　トーラマーン」、「サオジャイ」などいろいろあります。ですから、歌や小説などを翻訳する時は、文脈から意味を考えて、一番意味が近い言葉を選ばなければなりません。

また、「木漏れ日」は小説などでよく使われている、木の葉の間から漏れてさす日の光のことを意味していて、詩的な言葉で、日本の独自表現なのです。タイ語に翻訳するのが難しく、タイ人はあまりイメージできないかもしれません。

そして、日本語は、同じ意味の「言葉」の数が多いと思ったことがたくさんあります。

例えば、「食べる」、は敬語にしたら「お食べになる」、「召し上がる」、「いただく」、「頂戴する」と4つの形が

あって、初めて知った時はとてもびっくりしました。

この4つの形の違いは、尊敬語と謙譲語であり、敬語は使うことで相手にいい印象を与える言葉であるにもかかわらず、使い方を間違えたら失礼になることもあるそうです。気を付けなければなりません。

日本語は、やはり難しいですね。

それから、私はもうすぐ日本の会社へインターンシップに行くので、インターンシップの時に使う言葉を覚えなければなりません。例えば、「会社」も、あなたの会社か、私の会社かで「貴社」、「御社」、「弊社」、「当社」など、たくさんあります。それに、会社の専門用語も覚えなければなりません。専門用語は、同じ業界でも会社によって言葉が違うこともあります。

これからも新しい言葉が生まれると思います。

例えば、ネット上で新しい言葉や流行語をよく見かけます。現代用語の基礎知識選の「新語・流行語大賞2022」からは、プロ野球の村上宗隆選手が56本のホームランを打つなどの素晴らしい活躍に対し、SNSで「村神様」と呼ばれるようになったことを知りました。

このような言葉を知っておいたら、SNSを使う時にもっと楽しくなるかもしれません。

言葉の難しさによって、時々、他の人と違う解釈になるかもしれませんが、それも「日本語の楽しみや面白さ」の一つ、と思います。

以上の理由で、日本語を理解するには、たくさんの「言葉」を覚える必要があると思っています。

とても大変ですが、将来は、できるだけ自分の言葉で「日本の歌や小説」を上手く翻訳できるように頑張りたいです。

❖モンゴル国民が常に感謝しなければならない「日本」

～「大人」の日本人、「子供」のモンゴル人～

モンゴル❋バトバヤル・ガンゾル（名古屋大学日本法教育研究センター（モンゴル国立大学法学部内）　21歳）

私は名古屋大学日本法教育研究センターで日本語を勉強し始めてから、モンゴルに、日本国民の協力で建てられた建物や工事された道路、空港、病院などたくさんあることを知った。古くは第二次世界大戦直後に日本人の抑留者が建てたオペラ劇場から、最近ではＪＩＣＡの日本モンゴル協同病院まで、モンゴル人の生活に必要なものだ。

しかし、モンゴル人はそれらについて、日本人が建てたことは知っているが、どのような目的で建てたかなどには、あまり関心がない。日本国民は世話好きで、モンゴル国民が常に感謝しなければならない人間だという理解が強く認識されていなかったのではないか、と私は思う。どうしてこうなるのだろうか。

日本法教育研究センターに入ってから、私は、日本人教師の日本語、日本史及び日本の法制度の教え方や説明から、日本人の性格や生活習慣を少しずつ理解し始めた。その時、私は、先生方の「優しさと思いやりの心」に満足していた。その一方で、このようにいつも他人を助けたり、世話をしたりしていたら、先生方はいつ自分自身の世話をするのだろうか、と心配したこともあった。

しかし、最近、理解したことがある。日本人にとって、優しさをはじめ、すべてのことに「範囲と締め切り」を決めていることだ。日本人は自分のしなければならないことを、心を込めてするが、もし、相手が自らの義

務を果たさない場合は、「じゃ、私はもうあなたのことを気にしないよ」と言う。

つまり、日本人は「他人にやるべきことを繰り返し思い出させ、やるように働きかける。しかし、やらないなら追いかけずにやめる、私はこれで打ち切るよ」というような反応をする。一方、モンゴル人が同じ状況にあった場合、「がんばって仕事をしてください、忘れないで約束を守ってください、もっと時間をあげるから必ず終わらせてね」という反応を示す。たとえば、私の家でタンスを作ってもらったところ、タンスを作る会社の人は取っ手のないタンスを作って持ってきた。そして、「取っ手はあとで持ってきてつける」と言ったのに、1週間たってもまだ持って来ない。毎日電話しても、「今日は忙しい。明日」というだけで何もしない。

こう考えると、モンゴル人は「時間を守らない。義務を果たさない。常に別のチャンスを求めて、子供のようだね」と言えるかもしれない。これに対して、日本人は「親切にしてもらっても、設定した制限内で努力してくれるが、その制限を理解できなければ、次の決定をする大人のような人物」だ。

日本がモンゴルに、「割引ローンや助成金」のような様々な支援を与えても、モンゴルの人々はそれらの目的がわからないで、自らの義務を果たさないため、締め切りに間に合わない、ということもある。そうすると、日本と共同で行う素晴らしいプロジェクトが止まったり、結果として、日本人が支援をしなくなるような状態に達してしまうこともある。

当初開始した仕事の目的が失われ、日本人によるせっかくのサポートも評価されなくなってしまう。モンゴルの人たちは、日本の力を過小評価していると思う。

モンゴル人は、「日本」と「日本人」の考え方を理解して、もっと評価したほうがいい。

❖ミャンマーに「未来」を与えてくれる「日本」！
～素晴らしい歴史のため、「日本」の人たちと歩みたい！～

ミャンマー❋テッテッウィンマウン（日本語学校教師　29歳）

１９４４年の冬。肌寒い夕焼けを眺めて絶望する祖母。反撃部隊配属の祖父が日本軍に捕まってから何一つ情報がない。苦痛に耐え続けて、娘・息子達の前で笑顔を演じる祖母。祖母にとって、「日本」という異国はどんなものなのか、知る余地もなかった。敵地で残酷な拷問の繰り返しが終わりを告げ、祖父が帰ってきた時も祖母は異国人を罵るどころか、因果応報だと口ずさむだけだった。戦に正義も何もない、と。祖父は戦争で無理した体で、50歳でこの世を去った。私が生まれる前だ。

１００年以上のイギリス支配からの独立運動に参戦してくれた日本は、ミャンマー（当時はビルマ）にとって救いの神様同然だった。それでも国会議員の一人は注意した。「日本は甘くない」と。予言が当たったことを喜ぶ国民は一人もいなかった。１９４２年3月に撤退できたはずの「日本」が何故またこの国を痛め付けるのか。日本もまたミャンマーの少しばかり豊かすぎる自然資源を目の前にして喉から手が出てしまったのか。命の奪い合いに命を貸してくれた日本に恩返ししたいという気持ちがあったにしても、日本兵達の婦女暴行行為・虐殺など国民は望んでいなかった。

世界的に有名なアウンサンスーチー様（１９９１年ノーベル平和賞受賞）の父親アウンサン将軍の活躍するビルマ国

民軍が勝利し、１９４５年に日本軍が降伏する。だが、仮の自由を手に入れたミャンマーが再びイギリスの虜にされることも、繰り広げられる内戦も、今現在の突如起きたクーデターも、不幸な国だとしか言いようがない。しかし、いつの時もミャンマーに力を貸してくれるのが「日本」なのだ。時代は変わり、人も変わる。不幸に満ちた国々にとって「日本」は本当の意味で「神」となった。

資源があるとはいえ、「貪欲と怠惰、貧しさ」の国「ミャンマー」。そんな国の投資業界が「日本」の信頼を得て砂漠に花を咲かせたのだ。誰もが拒むミャンマーに「日本」だけが何度も救いの手を差し伸べた。企業戦士達も、日本政府もミャンマーに利益など求めていない。ミャンマーの人たちを諦めたことはなかった。今も、沢山の奨学金プログラムや寄付・ビザ更新など、在日本ミャンマー人に安心安全な生活を贈ることを忘れない。「日本」はミャンマーに「未来」を与えてくれる国だ。ミャンマーでは、「日本」を夢見る日本語を学ぶ学生が増え続けている。

「戦争の90パーセントまでは、後世の人があきれる理由で起こった。残りの10パーセントは、当時の人々でさえあきれる理由で起こった」（日本の作家・田中芳樹）。ＳＮＳがなかった時代の祖母もこれを心得て怒り・悲しみを乗り越えたと分かる。祖母は日本に世話になる日が来ると考えたに違いない。ただ祖父母二人とも孫娘の私が日本語に夢中になる姿は見ていない。身内を奪った国の言葉を勉強していることに後ろめたい気持ちがないとは言えない。だが、歴史を築くのは「人」で、国というのは一つの領域に過ぎない。私は「日本」の人たちとともに歩みたい。助け合い、素晴らしい歴史を明日に繋ぎたいのだ。

❖「46歳で始めた日本語学習」が私の人生を変えた！

～「漢字の効率的な学習法」を発表～

キルギス❇ヴォロビヨワ・ガリーナ（元ビシケク国立大学准教授　74歳）

私は、日本語を大学、大学院で勉強したことはない。専攻は数学で、ＩＴ分野で働いていた。46歳で趣味として日本語の勉強を始めた。日本にとても興味を持っていたので、１９９５年にキルギス共和国に開設された「キルギス日本センター」の「日本語コース」の日本語学習者になった。「大学」ではないが、４年間勉強し、「大学の卒業生」と同じレベルの日本語の知識を身に付けることができた。「日本語学習」は、遅いスタートだったが、日本語は私の運命になった。

日本人の萩原幸子先生の授業は効果的で、早く日本語でコミュニケーションができるようになった。一方、日本語表記は難しかったが、平仮名の最終テストでも、先生から「ガリーナさんは間違いが一つもありません」と言われ、とても嬉しかった。しかし、「漢字」学習の大変さに驚いた。一字の漢字の情報も多く、学習すべき漢字も大量で、なかなか覚えられない、覚えてもすぐに忘れてしまう。

苦労して一通り勉強が終わったところで、「日本語」の知識をどう生かすか、悩んでいた。萩原先生は、私に、「日本センターで、初心者に日本語を教えたら」と勧めてくださった。教え始めたら、日本語教師の仕事に大きな喜びを感じた。会社で一日中働いて、その後、夜二時間の授業をしても、疲れるどころか、学習者からエネ

ルギーをもらって、空を飛びたくなるほどの幸せを感じた。

50歳で「日本センター」の専任日本語講師になった。萩原先生のご指導で、少しずつ、教授法を習得した。さらに、国際交流基金日本語国際センターの海外日本語教師研修に参加し、その後、「日本センター」の主任講師、ビシケク国立大学の准教授として「日本語」を教えた。そのうちに継続的に自分の日本語の知識も深めていて、2003年に日本語能力試験1級に合格した。

日本語学習者の一番の課題は、「漢字学習」だと分かっていた。漢字の学習を始める非漢字圏の人は、漢字の勉強を始める日本人の子供と随分状況が違う。日本人の子供は生まれてから漢字に囲まれ、漢字の重要性も理解している。しかし、非漢字圏の人は、漢字について知らず、「別世界」に迷い込んだようになる。私は、「漢字の効率的な学習法」の研究をするようにした。

そして、楽しい漢字学習ができるように、漢字教材『漢字物語』を出版し、授業で利用した。その後、誰でもインターネットから無料ダウンロードできるようにした。数回、日本での研究の機会を得て、数多くの研究論文を公開した。2014年に、「構造分解とコード化を利用した計量的分析に基づく漢字学習の体系化と効率化」をテーマにした博士論文で、政策研究大学院大学（東京都港区）で博士号を取得した。2020年に、「キルギスにおける日本語教育の推進に貢献した」という理由で、日本の「外務大臣表彰」を受けることができた。

「日本語」との出会いで、私の人生は大きく変わった。日本の文化と日常生活に触れ、日本人の友達もでき、日本は親しみのある存在になった。趣味として始めた日本語学習は、「魔法の世界」を開くことができた。年齢に関係なく、「千里の道も一歩から」を実感した。

❖「四字熟語」や「ことわざ」は、多彩な宝石！

～言語の感じ方が豊かになる「オノマトペ」～

ロシア❄ブリカ・マルガリータ（日本語教師・ボロネジ市「月話日本語学校」など　28歳）

日本語を勉強し始めた15歳の頃、ある店で「日本語独学コース」というＣＤを見つけて、胸がキュンとしました。日本のアニメやドラマを見ながら、日本の文化にも興味を持つようになりました。私の人生の転機だったと思います。日本のドラマを通して日本の日常生活、料理、習慣などを学んで、日本語の美しさを知りました。日本語の響きがよくて、内容がわからなくても、日本語の音が好きになって、自分も話したくなりました。

ボロネジ教育大学で英語とドイツ語を専攻して、同時に大学の「日本語講座」に通い始めました。その後、独学で勉強を続けて、２０１９年に日本語能力試験のＮ１レベルに合格しました。現在、日本語の教師として、「スカイプ」で個人授業を行ったり、「日本語学校」でグループ授業をしたりしています。日本語を教えるのは楽しいし、他の人と日本語に対する情熱を共有して、相手も日本語が好きだと分かった時、やる気がさらに湧いてきます。

ドイツの有名な詩人のゲーテは、「たくさんの外国語が話せれば話せるほど人間として成長する」と言いました。この言葉は外国語がどれだけ学習者に影響を与えるかを示すと思います。言語は全世代が遺した遺習や知恵が保存されているものであり、国の文化や民族の意識を代表するものです。母国語しか話せないと、世界に関する意見は偏りすぎてしまいます。一方、外国語が話せたら、言語とともにその国の価値観を知り、視野が

広がり、異文化がわかるようになり、心も豊かになります。

日本語を勉強している時、以前気づかなかったことに気づいたりすることが何度もあります。もう何年も独学で日本語の勉強と研究を続けている私は、日本語で小説を読んでいる時、興味深い表現を見かけると心が躍ります。私にとって日本語の勉強は「宝箱」のようです。四字熟語や、ことわざなどは、キラキラ輝く多彩な宝石です。「宝石」の中で、私は「オノマトペ」を格別に愛しています。

私は、ロシア語はもちろん、英語とドイツ語も話せますが、日本語ほど「オノマトペ（擬音語、擬態語）」が豊富な言語を知りません。動物の声や音を真似する言葉はともかく、「気持ち」や「モノの様子」も音で表現できるというのは、日本人の感覚が動詞や形容詞を超えているということでしょう。例えば、人が歩いている様子を説明したい時、「のろのろ」、「ぶらぶら」、「うろうろ」など、雰囲気を表現できます。そのおかげで、絵のように目の前にその場面が蘇って、わかりやすくなります。外国人にとって日本語のオノマトペは、最初は不思議なものですが、日本語を話せるようになれば、言語の感じ方が豊かになります。

「むかむか」、「ウキウキ」、「るんるん」など、人の心は誰にも見えないし、音もしないので、オノマトペは、それを上手に伝えられます。「もやもや」と言ったら、本当に胸に嫌な予感が宿り、気が収まらないのが通じます。まだ日本語と出会っていない頃、「楽しみでたまらない」気持ちを、日本語が話せるようになって初めて、「わくわく」と呼べるようになり、納得できました。「どっさり重い」「ふわっと柔らかい」「ピンと花が咲く」といった表現を用いたら、イメージがすぐ思い浮かび、話が生き生きとしてきます。

「日本語」に心を開いた時、日本語が自分の一部分になり、話している言葉に限らず、考え方や性格も変化しました。「新しい世界」を見せてくれた「日本語」に心から感謝しています。

❖日本の「お笑い」で、日本語に馴染んだ！

～最初は恐怖を感じた「漢字」に魅力～

トルコ❋ブラック・コルクマズ（ボアジチ大学　20歳）

２０１９年の冬のことでした。高校のバレーボールで足を骨折し、家で丸１カ月間安静にすることになりました。その時、私は昔大好きだったアニメを再び見始めました。そして、途中でふと思ったのです。なんとか「ひらがな」を学びながら、アニメを字幕なしで見続けたら、自然に、日本語が習得できるのではないかと。私は正しかったのですが、上達するまでの道のりは思ったほど楽ではありませんでした。

「漢字」の存在を知り、「漢字」一つ一つに、それぞれの意味が隠されていることに恐怖を感じました。それでも毎日勉強し、今に至っています。そして、知らない単語や文法に対する関心が高まり、日本の文化や日本人に対する好奇心も高まってきました。

そんな中で、「常用漢字」を１年ちょっとで習得しました。ＳＲＳというシステムを使い、毎日１～２時間こまめに勉強しました。学べば学ぶほど「漢字」の魅力に惹かれ、今後は書道にも挑戦したいと思っています。

日本語の勉強はほとんど無意識にできました。例えば、通学の時に意味のわからない「ポッドキャスト」を聞いたり、ゲームも日本語で遊んだり、ＹｏｕＴｕｂｅも日本語で見るようにしました。最初は全く理解できなかった動画も、時間が経つにつれて徐々に分かるようになっていく感覚はとても嬉しかったです。そして、日

本語を学べた大きな要因は「お笑い」でした。元々、トルコのお笑いが好きだった私は、偶然ＹｏｕＴｕｂｅで見かけた陣内智則さんの巧妙なコントで日本のお笑いにハマりました。そこから、サンドウィッチマンや他の才能あるコンビのコントに腹を抱えて笑いながら日本語に馴染んでいきました。最初は何を言っているのかわからなかった漫才も、早口の関西弁が理解できるようになり、とても楽しめるようになりました。

実は、日本語がここまで上達できたのは、初めての日本人の友達のおかげです。彼女は、大阪出身の歯科衛生士で、２年前、「手紙交換アプリ」で知り合いました。育ってきた環境や文化の違いで盛り上がり、それでも人生観が同じだということに親密感を感じて、仲良く話しています。最初は、彼女に英語を教えるつもりでしたが、結局、ほぼ日本語で会話し、私が日本語を学ぶ機会の方がずっと多かったです。「乗る」と「乗っかる」の違いや、「貼り付ける」や「引っ張る」などの言葉の末尾に「付ける」や「張る」のような言葉がよく使われている理由など、日本人でもあまり意識しない日本語のニュアンスについて質問する機会があり、日本人の視点から日本語を学ぶことができました。

楽しいだけだと思って学んできた「日本語」のおかげで、人生に新たな可能性がたくさん生まれました。今、ボアジチ大学の「日本トルコ文化交流クラブ」の部長として、大学やトルコ全国の日本文化に関心を持つ人たちのために活動しています。

足を折ってベッドで過ごす退屈な日々から学び始めた日本語が、私の人生をこんなに大きく変えることになるとは思ってもみませんでした。「人間万事塞翁が馬」ですね。

❖「豊かなオノマトペ」の翻訳を研究

～高校生の時、J-ROCKの日本語の歌詞を勉強した！～

スロバキア❇ヤナ・ボリシンツォヴァー（ビジネス・コーディネーター　27歳）

「日本語が、なぜそんなに好きですか」とよく聞かれる。しかし、実は簡単に説明出来ない。子供の頃から、日本語を聞いて心が躍る――それだけは確かだ。

昔から日本語の何に憧れているか知ろうとしていた。それをきっかけに、大学で日本語学習を専攻にした。中学生の時、一応自分の力で日本語を学んでみたが、上手く上達できず、大学生になるまで待ったほうがよい、と判断したのだ。というものの、その間、日本語に全く触れなかったわけでもない。高校生の時、特にJ-ROCKが好きで、日本のロックバンド・SuGの「無条件幸福論」の歌詞の意味を調べて、勉強したりした。そして、日本語への愛情は強まっていった。

大学に入り、初めて日本語の働き方が分かった。一般的に、言語に関して沢山勉強し、母語が人の考え方や価値観などに影響をあたえているということを知った。それに基づいて、「概念メタファー」（ある概念が直接把握しにくい場合、別の概念を通して理解する）という言語学の部分に集中して、研究を行った。日本人をよりわかるようになりたかったからだ。

チェコのブルノの大学三年生の時、京都の立命館大学に一年間、留学した。日本語との接触を深めたり、日

本人の友達が出来たりして、前より日本語に強い関心を持った。そのため、出来る限り、日本語で話す努力だけに集中せず、日本語で書かれている本や小説や漫画を読みはじめた。最初は文章が難しくて、なかなか理解できなかったが、少しずつ納得出来た。その気持ちが何よりうれしかった。頑張った分、成長できた、感じだった。

スロバキアのブラチスラバの大学院生になってから、研究の対象を変更した。分野は今回も言語学だが、「オノマトペ（擬音語、擬態語）」に変えた。理由は、日本語はオノマトペが豊かで、しかも、日常生活によく使われている。自分の日本語を自然に聞こえるようにしたかった。そのため、オノマトペをどのようにスロバキア語に翻訳できるかを研究した。

研究は難しかった。スロバキア語はオノマトペが少ないし、あまり使われていない。子供のような話し方だと思われている。大体の場合、通訳の時、「オノマトペの根拠を持っているいろいろな言葉」を探さなければならなかった。

日本語の「要素」、つまり、様々な日本語のアプローチ、表現、使い方、モダリティ（様式、様相）を勉強したり、研究したりした。日本語には、きれいで面白いところが山ほどあることが分かって来た。

なぜ日本語が好きか、という質問の答えは、まだ明らかではないが、日本語の「何か」に引きずられているのは確かだ。そうでなければ、今までこの言語を日常生活に利用できる方法を探そうとしなかっただろう。

❖「日本語」が「私の心」を救ってくれた！

～アニメや漫画で、「空想の世界」を探します！～

ルーマニア❇ハルデュレア・マリナ（国立バベシュ・ボヨイ大学大学院　23歳）

日本語の勉強を始めたのは、中学生の時でした。ルーマニアのテレビで、アニメ番組が放送されていました。アニメと日本映画を好きだったから、日本の文化と文学もすぐ好きになったので、日本語の勉強を始めました。

中学生の時に、「ひまわり」という「日本語と日本文化の活動」のボランティア団体に参加しました。私は「文学クラブと漫画クラブ」に入り、「ひなまつり」や「七夕祭り」を楽しみました。ルーマニアの若者たちはアニメとドラマが好きな人が多く、日本に憧れる人もいました。

ずっと前から、不安障害とうつ病があったので、自分の目的を見つけることがなかなかできませんでした。でも、日本のアニメや日本の映画を見ていて、その世界に引き込まれていきました。

特に、日本文化に引き込まれる瞬間がありました。「力を持っていて、悪い人を倒すことが出来る」。夢の中では、友達があこがれるヒロインになることもできました。アニメや漫画の中で、「空想の世界」を探します。今も、日本のアニメを見ます。それは楽しむために、です。アニメを見ながら新しい日本語の言葉と文法を勉強することもできます。

高校を卒業する時、「これから、どうしようか?自分の夢は何?」と考えました。

でも、「日本語」のおかげで元気になり、目的を見つけることができました。

母が心理学者なので心理学が好きでしたが、外国語を勉強することが好きですから、今、大学では「英語とスペイン語の翻訳」を専攻しています。でも、様々なことをしたいと思い、「日本語」も好きでしたから、大学で3年ぐらい、一人で、日本語を勉強しました。今は、大学院生ですが、日本語は、自分で買った教科書を使って、一人で日本語能力試験2級のために勉強しています。

携帯電話の「漢字のアプリ」も使っています。「日本語」を忘れたくないですから、もっと日本語で話したいです。

ルーマニア語の「文字」の種類は1つですが、日本語は3つです。漢字は、普通に使われているだけでも二千字以上もあります。読むことは、とても難しいです。しかし、文法に関しては、ルーマニア語の文法の方が日本語の文法より難しいと思います。

大学で、日本語の勉強を始めて以来、一日、一日を大切しています。他の町に引っ越して、新しい友達を作った。そして、毎日自信がついてきました。

今、「マリアの道」という本に取り組んでいます。それは、「数ヶ月間日本に行く、ルーマニアの少女の物語」です。「日本語を勉強したい人」のための本です。漫画のページが含まれており、文章は日本語で書かれており、ルーマニア語に翻訳され、文法と語彙の説明が付いています。

自分の目的を見出せなかった時、「日本語」は私の心を救ってくれました。「日本語」はとても、ありがたいです。

❖最も好きな日本語は「お疲れ様でした」

～二世、三世、四世の日系人に、自らの母語を知ってほしい～

オーストラリア❋イージェン・ウェン（小学校日本語教師　45歳）

鉄道や漫画、アニメが好きだから、日本語を勉強し始めたという理由をよく聞きますが、私は高校生の時、選択科目として、母親に「裁縫」を辞めさせられ、「日本語」を勉強させられました。しかし、今は、母に感謝の限りです。日本語を勉強すればするほど好きになり、今、小学校で日本語教師として、日本語と日本の文化を教え、社会に貢献できていると思います。

学校で日本語を勉強している時、一番難しいと思うのは「カタカナ」でした。今でもそうです。書くのは簡単ですが、スペル（つづり）がややこしいです。どこで母音が伸ばすべきか、発音も英語に似ていないものが少なくありません。カタカナは、「コミュニケーション」ではなくて「コミニュケーション」です。「ユーロップ」ではなくて、「ヨーロッパ」です。外来語は英語に限りませんし、「アットホーム」のような和製英語もあります。そして、スマホ、ワークホーのような省略形もいっぱいです。でも、そのおかげで、他の国の言葉も一緒に勉強することができます。最近習ったのは、フランス語の「フィナンシェ」です。

私は、将来、ボランティアとして、Ｚｏｏｍのようなプラットフォームで、何らかの事情で日本語が勉強できなかった二世、三世、四世の日系人に、自らの母語を知ってほしいと思っています。日本人ではないけれど、

日本語の美しさを知っているつもりです。日本語の勉強を広げたいと思います。

オーストラリアはずいぶん前から、ヨーロッパから、南米、アジア、アフリカまで、続々と移民や難民がきていましたから、多文化の国です。差別されないように、自分の母語を放棄した人や、「英語より母語の方が難しいから諦めたけど、今になって非常に後悔している」と話す人が何人かいます。そして、自分の両親も日本語ができないので、教わることができなかったり、金銭上の理由だったり、週末の日本語学校が近くになかったりするため、日本語を諦めざるを得ない場合もあります。

土曜日の日本語学校は、「大学生や若い社会人や中年の人」のために作られたものはありません。

私は、ボランティアとして、義務教育を修了した人のために日本語を学習する機会を与えたいです。オンラインは一番理想的な勉強法ではありませんが、一番効率的です。皆、自分に合う時間で気軽に日本語の美しさを体験することができます。でも、私一人ではできることは限られています。

私の最も好きな日本語は「お疲れ様でした」です。言葉の意味を理解すれば、日本の文化がわかります。一日を終え、バリバリと働いた人や、よく頑張った人に、その人の姿をみて、「ありがとう」、「感心したよ」、「えらい！」、「すごい！」、「共感する」といった気持ちを込めて言う「労う（ねぎらう）言葉」は、非常に素晴らしいと思います。聞いた人は、きっと明日もっと頑張るでしょう。

日本語は母語ではないけれど、「日本語と私」、「切っても、切り離せない関係」です。私は生涯、「日本語の学習者」です。

❖「日本語教師」を目指す「日本語を学ぶ旅」

～八年目、「日本語」のおかげで、自分の世界が広がった～

……エジプト❋アスマー・アハマド・ムハマド・アヤード（国際交流基金カイロ日本文化センター・日本語学校　33歳）

新しい言語を学ぶと、新しい世界が開くのではないかと思う。私は薬剤師をしていたが、専門は日本語に関係がない。でも、日本語のおかげで、新しい夢や考え方などが生まれ、自分の世界が広がってきた。子供の時、日本のアニメのアラビア語吹き替え版を見ていて、ずっと日本に興味を持っていた。その時、インターネットもまだ普及していないし、学校の図書室に日本に関する本もあまり多くないので、日本の文化や習慣についての豆知識だけだった。

インターネットが普及するにつれて、好きなアニメを日本語で見たり、日本のドラマも見たりできるようになった。初めて日本語を聞いた時、「発音が綺麗だなぁ」と思った。聞けば聞くほど、もっと勉強したくなった。25歳から、独学で日本語の勉強を始めたが、学校で学ぶ方がいいと思い、国際交流基金日本文化センター（JF）を見つけ、そこから「日本語を学ぶ旅」が始まった。

JFで日本語を勉強するだけではなく、図書館で漫画や小説も読めるし、書道をはじめ、色々な文化体験にも参加できるので、幅広く日本語を練習することができた。日本語の勉強を始めたら、難しい反面、面白いとわかった。

日本語の難しさは「漢字」だというのが先入観だったが、実は私にとって「漢字は日本語で一番面白い所」だ

と思っている。漢字が面白いのは、漢字の形が意味に関連していることだ。例えば、漢字の「木」は木の形を模している。「漢字を書くことは絵を描いている」。「書道」で漢字を書くと、なんだか癒される。初めて書いた漢字は「気」だった。今でも、はっきり覚えている。

一方、日本語の一番難しい所は「語彙の使い分け」だ。語彙の意味を辞書で引いて理解していても、使い分けることができるとは限らない。特にレベルが高くなったら、語彙が増えてきて、混乱してしまう。例えば、「経験」と「体験」の意味は近いのだが、ニュアンスの違いがある。そのニュアンスをしっかり理解していないと、語彙を正しく使い分けることができない。日本語を勉強すればするほど、気に入る所が見つかる。「オノマトペ」は気に入った一つだ。オノマトペの発音がかっこうよく聞こえるし、物の動き、人の鳴き声や状態なども細かく表現するので、「日本語の特徴」だと思う。

「ことわざ」も好きだ。意外にエジプトのことわざと似たところがある。「急がば回れ」とか、「三度目の正直」とかだ。でも、一番好きなのは、「継続は力なり」だ。自分に力を与える。続けて日本語を勉強すれば、最後は成果をあげられる、と信じている。

日本語のおかげで、日本人だけではなく、色々な国の人々との交流ができて、色々な文化などがわかった。「日本語」を通して、私の世界が広がってきた。その中で自分の能力を発見できた。大勢の人の前でスピーチや司会もできるし、イベントを計画できるようになった。

近い将来、日本語教師になるのを目指して、日本語教師養成ディプロマコースを受けた。どうして日本語教師になりたいか。それは、多くの人に、私のように「日本語が大好きな人」になってほしいからだ。私の「日本語を学ぶ旅」は終わっていない。これからだ。

❖「日本語」の日常は「昼は笑顔、夜は涙」
～ストレス解消は「自分を褒める」ことから～

……マダガスカル❀ラライアリマナナ・ニライナ・ファメヌス（東京都立大学都市環境学部・都市基盤環境学科　23歳）

私の日常を「日本語」でいうと「昼間は笑顔、夜は涙」です。

ある日曜日の夕方、私は自分の部屋に引きこもって涙を流しました。なぜなら、「人前で泣くのは弱い者だ」とずっと思い込んでいました。しかし、その涙に理由があります。子供だと、親に叱られる時に、慰めてほしいから泣き出します。若者だと、彼氏と喧嘩したり別れたりしたら泣き出します。私はそれと違います。日本に来て以来、勉強を必死に頑張っていて、生活費を稼ぐためにアルバイトもほぼ毎日行っています。そんな日々を繰り返し、自分を「コワス」ぐらい、日曜日には肩こり、頭痛、疲労、ストレスしか感じませんでした。

「壊す」という動詞をカタカナの「コワス」で書きました。まず、「体調を崩す」というコワスです。当然ながら、「勉強が大変なのに、アルバイトに毎日出勤したら体調が崩れるのは当たり前でしょう」と思われるかもしれません。まさに、その通りです。でも、「しょうがない」のです。私がアルバイトをしなかったら、誰が家賃、電気代、ガス代、水道料金、保険料などを支払うのですか。誰もいません。朝5時に起きて早朝のバイトに行き、そのあと学校へ行き、学校が終わったら課題などを終わらせて、次の日の別のアルバイトの準備をし、また次の日もそのサイクルを繰り返すわけです。

次に、「心理またはメンタルを壊す」のコワスです。体は疲労がたまってもビタミンやサプリメントなどを採

れば何とかなるでしょうが、メンタルは弱くなることを防げません。なぜメンタルがこんなに影響されたのだろうか。

そもそも、なぜ勉強をそんなに頑張っているのか。理由は二つあります。一つは、「私が進学するために大学を辞めた姉の誇りになりたい」からです。二つは、自分が子供を持った時、私のような苦しみを与えたくないからです。自分のやりたいことをしてほしい。そんな思いを自分の中で抱え続け頑張っているわけです。しかし、前向きな目的を持っているのに、自分ひとりで悩んでストレスが溜まってしまうのは、その頑張りが無駄ではないか、と思い始めました。

仲良しのYさんに相談しました。Yさんは長年、私のことを知っていてストレスが溜まりやすいタイプだと分かっています。Yさんから「あなたは優秀でしょう。悩んでも、ステップバイステップで行きなさい！」と言われました。うんうん、としか返せませんでした。Yさんからのアドバイスはありがたく思いますが、口で言うほど簡単ではないです。

そこで、自分はここまで来たから、自分を褒めることから始めよう、と思いました。「同い年の友達の中で、自分と同じ経験をした人はどれぐらいいるの?」、「どれぐらい失敗して、回復したの?」など、自問自答しました。やはり、自分の悩みは、自分でしか解決できない、と思います。他人と相談しても役に立つ時と、さらに悩まされる時もあります。視点を変えながら、物事を見ることが大切だと思います。

笑顔でも、涙でも、感情を表すことで自分のことを認識することができます。でも、「笑顔だから強い、涙だから弱い」という単純な定義付けはできないことに気づきました。

❖留学で学んだ「日本の医療技術」をアフリカに！

～重要な「義肢装具」の分野で〝架け橋〟になりたい～

トーゴ＊アドゥアヨム・アヘゴ・アクエテビ（株式会社ドリーム・ジーピー研究員　36歳）

２０１３年にアフリカのトーゴから新潟医療福祉大学に留学しました。今、「ドリーム・ジーピー」（大阪）の研究員として、医療技術の面で、アフリカと日本の「架け橋」を目指しています。

日本に来た目的は、日本の医療技術や文化を理解することです。

日本へ来る前は、まったく「日本語」ができなかったのですが、先生方のおかげで、卒業までに日本語が話せるようになりました。大学院時代は部生の授業を受けたり、２０１８年に大学院修了してからも、「在学生と日本語のオンライン」で勉強したりして、今では学会で研究内容を日本語で発表できるようになりました。

私は、トーゴの将来世代に、明るく安全な未来を約束するために、日本に留学しよう、と考えました。自分の生活で直面している問題にチャレンジし、持続可能な成功に導いて、自分の知識をアップグレードするため、そして、新しい文化として、医療技術で私の専門的知識を広げることができるように、いろいろな国の情報を検索しました。そして、日本の「高い文化と平和」を理解するため日本に留学する決心をしました。

トーゴと日本の友好関係については、多くのプロジェクトがありますが、基本的な活動分野の発展のことを

書きたいと思います。私の将来の夢は、トーゴで大学の教授になり、日本で学んだ知識や技術を多くの学生に教えることです。そして、少しでも、アフリカの医療、社会発展に貢献していきたいと考えています。特に、母国トーゴのような発展途上国や、他のアフリカの国々に貢献するため研究を継続していきます。

大学院では、江原義弘先生の研究室で、日本語を含めて、たくさんのことを深く勉強しました。

私は、日本で習得した国際レベルの知識と技術の全てをアフリカの学生達に教えたい。具体的には、アフリカでは、特に「義肢装具」の分野は重要であり、発展させていかなければなりません。そのためにも若い人材を育てることが最も重要だと考えています。

日本の技術をアフリカの学生がより身近に学べるように、「道」を作っていきたいです。また、日本の大学院で得た知識や技術を、医療の発展を目指す専門機関に提供し、その発展を助けたいと思います。義肢装具についての知識はもちろん、技術を中心にリハビリセンターなどの施設で活用させたいです。義肢装具の分野では、現在ますます新しい技術が開発されてきています。科学的根拠に基づいた専門知識を習得し、質の高い義肢装具を開発できる能力を身につけたいと思います。

「アフリカと日本の医療技術の架け橋」として「トーゴと日本との国際交流」も促進させたいです。私が学んだ「日本語や日本の医療技術や文化や伝統」を、「日本と日本人、そして日本語」の良さをトーゴ人に伝えたいです。若い人材を育てることは最も重要だと考えます。「日本の技術と文化をトーゴへ、そして、アフリカへ！」という夢に向かって、頑張ります。「アフリカの人々が希望を持って社会生活できる環境」を作るために、その「第一歩」を作り上げることが、私の最大の目標です。

❖「日本語」は〝新しい世界の扉を開ける鍵〟
～日本の文学作品や学術著作を翻訳したい～

中国　王子軒（北京工業大学附属高校生　16歳）

日本の「アニメ」から話を始めなければならない。私が三歳の時、幼稚園でともだちたちと一緒に古いパソコンを囲んで、先生に「ドラえもん」を見せてもらっていた。幼い頃の記憶の中で、今でも鮮明に覚えている。日本のアニメは中国の世代に次々と親しまれてきた。中国の人たちに馴染み深い日本のアニメがたくさんある。「ドラゴンボール」「ＯＮＥ ＰＩＥＣＥ」「ＮＡＲＵＴＯ」「スラムダンク」「名探偵コナン」「クレヨンしんちゃん」「ポケモン」「棋魂（原作名・ヒカルの碁）」「幽遊白書」「千と千尋の神隠し」「天空の城」など。日本のアニメは、小さな時から日本語に対して好感を持つきっかけだ。

私は本を読むことが好きで、特に１９２０年代から30年代にかけての作品が好きです。例えば、魯迅や周作人の著作などです。彼らが日本の社会、学問、文学について賞賛する言葉をよく見かけます、これは私の心に種を植え付けた。それ以外にも、私は日本の推理小説が好きです。江戸川乱歩、島田荘司、宮部みゆき、横溝正史らの作品は私に夜を楽しませてくれた。

中学で文学史の本を読んで、日本に多くの優れた作家や文学作品があることを知りました。また、私は村上春樹の『ノルウェイの森』を読んで止められなくなりました。夏目漱石、芥川龍之介、太宰治、三島由紀夫、川

端康成……。私は当時、中国語訳本を読んでいましたが、ある時中国語訳本に飽きたので、英語訳本の『羅生門』を買って読みました。そして、読んでいる感覚が中国語訳本とは全く異なり、翻訳の過程で、何かが変更されていることを感じ、「本当の日本文学を読むには日本語を学ぶ必要がある」と気づきました。日本映画や日本音楽の魅力もあり、中学二年の時、日本語を学ぶことを決意しました。中学校と高校で日本語の授業はありませんが、オンライン言語学校の日本語コースで日本語を勉強しました。

私が囲碁を始めたとき、先生は「日本は世界で最も棋道が発展している国だ」と教えてくれました。それは私に日本に対する好感をより抱かせました。私が使っている囲碁の教材なども、日本のものです。私はそれらが私の心に種をまき、日本語を学ぶきっかけになったと思います。

日本語学習は、簡単なことではありません。一番難しかったのは、日本語の特殊な文法構造です。でも、日本語に対する興味が強かったため、続けることができました。私が自分の日本語のレベルが上がったことを感じるたびに、字幕なしの日本語の動画を見たり、本を読むことに満足感がありました。私は日本語の文学作品を読むことができるようになり、日本文学の巨大な魅力をより感じ、自分が日本語を学ぶ判断が賢明だったと感じるようになりました。日本語は新しい世界の扉を開ける鍵、です。

将来、私は最近の日本の文学作品や学術著作を翻訳したい。文学や知識は国境を越えることができ、人々が「日本の文学作品」を通して日本と日本人をより理解し、日本に対する誤解を減らすことができる、と信じています。多文化社会の中で、日本と他の国々の友好関係について、自分もできる限り貢献したいと考えています。私たちの努力によって、世界中の人々と日本人の心が繋がることを願っています。

❖日系企業に就職して、日本語に興味が芽生えた！
～「関西弁」で、日本語の魅力に惹きつけられた～

ミャンマー❋テッテッティンアウン（日本語教師　30歳）

ミャンマーでは「10年生の高校修了試験」の成績の順位によって、大学の進学が決定します。大学の希望学科までも影響されます。ミャンマーの学生にとって10年生の試験は最も重要なものとなっています。私も、高校修了試験の結果で、ヤンゴン外国語大学日本語学科に入学することになりました。実は、「日本語学科」は第一希望ではなかったのです。しかし、決まった以上は頑張って「日本語」も勉強してみようという気持ちでした。

私には、アニメやマンガなどの日本文化に興味を持ち、それがきっかけで日本語への関心が高まり日本語の学習を始めたという経験はありません。日本語の勉強を始めた時、私は国語辞書の使い方すら分からなかったし、どうすれば日本語が上達することができるか考えたこともありませんでした。しかも、弁論大会、座談会、演劇、ポスター作成といった授業以外の大学のイベントなどにも一度も参加したことがなく、成績のいい学生ではありませんでした。日本語学習への意欲がそんなに強くなかったのです。

ところが、大学を卒業して、日系企業に就職することができ、自分が身に付けた日本語を使って、日本人とコミュニケーションが取ることが楽しくて、相手ともっとスムーズにお話がしたいという気持ちがわいてきました。分からない言葉も調べるようになり、日本語に興味が芽生えてきました。特に、印象に残っているのは、

職場の上司がよく使っていた「関西弁」に触れたことでした。「毎度です」、「いい値段していますね」などの日本語の表現や、「嘘も方便」というミャンマー語と全く同じ意味を持つことわざなど、教科書に載っていない生きた日本語の魅力に惹きつけられました。

また、どんなことでも計画を立て、問題点、改善点を見つけ、反省するという日本人のやり方、ビジネスマナー、仕事における「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」の大切さも見習うことができました。

9年ぐらい前に、スピーチコンテストで優勝し、ご褒美として日本へ一週間行くことができました。初めて温泉に入り、初めて着物を着て、経験したことのない人生初の素敵な時間を体験することができました。そして、日本語の教科書によく出ている鎌倉大仏、東京スカイツリーへも行くことができました。まさに「百聞は一見に如かず」でした。

私は、ヤンゴンの日本語学校で6年間、日本語の教師をしました。今、日本へ行く予定のミャンマーの人たちに日本語を教えています。これから、日本で、日本語を使ってお仕事をしたいと思っています。

日本語との運命的な出会いからもう12年ぐらいになりますが、私にとって日本語を使って仕事をする毎日が新しい発見があって、学ぶところが多いです。過去の自分より何倍も成長したと思います。そして、「物は試し」という言葉のように、これからも私は日本語を使い、自分自身のレベルアップにつながり、誰かのために役立つ仕事に積極的に挑戦していきたいと思います。「言語学習は終わりのないマラソンのようだ」と言われますが、私がまだ知らない日本語の世界にもっと深く入って、日本語を母国語のように話せるように磨いていきたい、それが私の夢です。

❖たくさんのカンボジア人に日本語を教えたい！
～一番好きな日本語は、漢字の「愛」～

カンボジア❊リー・チアーチェーン（通訳者　25歳）

私にとって日本語はとても難しい言語だと思います。なぜ私は日本語を勉強したのでしょうか。中学生の頃、日本という国の名前ぐらいは知っていましたが、日本はどんな国、日本語はどんな感じか、まったく知りませんでした。

ある日、あるグループの日本人が私の学校へ見学にきました。日本人と初めて会った時は、「へえ、日本人はこんな顔なの？　きれいですね」と感じました。その時、彼たちは「日本の文化と日本語」を紹介しました。そして画像を見せてくれました。日本のビデオを見て、日本はすごくきれいな国だと思いました。日本に旅行に行きたいなと思いました。そして、「日本語は字がとてもきれいだ」と思いました。ひらがなとカタカナと漢字を見て日本語は字が多いですねと感じました。その時、「あ、い、う、え、お」を少し勉強しました。とても面白かったです。そしてもらったお土産の中に「日本語の初級の本」があって、私は大切に保管しました。その時から日本語に興味を持ち始めました。しかし、私の住んでいた所は日本語学校がなくて日本語を教える人がいませんでした。その時はスマホも持ってなかったので、勉強したくてもユーチューブなどを見ることもできませんでした。

そのあと、高校三年生になって、卒業の前に学校がいろんな大学を紹介してくれました。奨学金もあり、日

本語学科がある大学があったので、ためらわずに、その大学を受験しました。高校の成績がよいおかげで、その大学に入学できました。ようやく日本語が勉強できました。毎日、日本語を勉強しました。楽しさも難しさもありました。一番楽しかったのは「漢字の勉強」です。漢字は数が多くて難しいですが、字がとてもきれいなので、書く練習が好きでした。難しかったのは「文法」の使い方です。

今まで一番好きな日本語は、漢字の「愛」です。この「愛」の漢字はとてもきれいだと思います。また、意味も深く、人間は「愛」から離れられないと思います。誰でも愛がほしいです。私にとって家族の愛が一番大切です。私の人生は父母兄弟から愛をもらわなかったら、生きていても意味がないです。「愛」の漢字は私にとても大切な字です。

日本語を勉強し始めたのは「日本語の先生になりたい」と思ったからです。大学3年生の２０１８年から1年間、東京の武蔵野大学へ留学しました。生活も勉強もとても楽しかったです。

大学を卒業して、カンボジアで日本語を使って通訳として働きました。先生の仕事のほうがもっと好きなので、2年間通訳者として働いてあと、日本語学校で約1年間働きました。

そして、２０２２年9月、日本に来ました。今、富山県砺波市の「協同組合ＣＥＯ」で、カンボジアの技術実習生に通訳したり、日本語を教えたりしています。両方とも私が好きな仕事ですが、将来、私はもっと多くのカンボジア人に日本語を教えたいです。たくさんのカンボジア人が日本語を勉強すれば、カンボジアと日本の関係はもっと親しくなって、仕事も楽しく、働きやすくなります。そのために、私はもっともっと日本語を勉強します。

❖「日本語」は私の「相棒」です！

～「日本語」で、私の人生は、楽しく、幸せになった！～

フィリピン＊アンジェロ・モラレス（「マイ英語スクール」英語教師・山形県東根市　43歳）

２０１６年8月に日本に来るまで、シンガポールに住んでいました。英語教師になりたいと思い、日本での英語教師の仕事を探すことが出来、東京と神戸市で生活し、２０２２年3月から山形県で英語教師をしています。日本に来ることになって、日本人と友達になりたいと思って、日本語学校などで、日本語の勉強を始めました。私にとって「日本語」は、日本で生活し続けるために大切な「相棒」です。日によって、状況によって役割は変わりますが、私の「友達」であり、「ガイド」であり、「ライフセーバー」であり、「同僚」です。

日本語がなぜ「友達」なのか。日本語で話しかければ、その人と「友達」になることが出来ます。日本人だけとでなく、他の国から来た人とも日本語で話すことで、友達になることが出来ます。みんなと友達になったら、自分の国の文化を友達に教えることができ、逆に、その友達から、その国の文化を学ぶことができます。日本語がなぜ「ガイド」なのか。例えば、大好きな洋服のお店に行った時、店員さんに別の色はないか、別のサイズはないか聞きたい時、ガイドになってくれます。お店の担当者と日本語で話せば話すほど、いろいろ知ることができて買い物が、とても楽しくなります。

そして、日本語は「ライフセーバー」です。ある日、私の命を救ってくれたからです。私は御嶽山（長野県・岐

阜県）へハイキングに行った時、道に迷ってしまいました。その頃、私の日本語はとても下手でした。「大変だ。困ってしまった。どうすればいいんだ」と迷いました。すごく怖くなり、緊張しました。その時です。神様のおかげでしょうか。ハイキングの人が2人やってきました。私は下手な日本語で「正しい道がどれか」を聞きました。そして、無事、目的地に着くことができました。日本語に助けてもらい、本当にありがたかったです。これは、私にとって一番忘れられない思い出です。

日本語がなぜ「同僚」か、いうと、仕事をする時、日本語で話すとよいコミュニケーションを作ることができるからです。職場では、だいたい英語を使いますが、たまに、日本人の同僚と日本語で話すことがあります。日本人の同僚は英語を使おうと頑張ってくれているので、私も日本語を使おうと、頑張っています。お互いに頑張ることで、仲良く仕事できます。

このように、「友達」であり、「ガイド」であり、「ライフセーバー」であり、「同僚」である「日本語」ですが、時々憎らしくなる時もあります。日本語は難しすぎると感じることがあり、上手く話せなくて諦めたくなるからです。しかし、結局「日本語」はとても大事な存在です。たいていの時は大好きです。「日本語」のおかげで、私の人生は、どんどん、楽しく、幸せになっています。

ここまで長く日本に住むとは思ってもいませんでした。神様のおかげなのか、宇宙のおかげなのか、私は、6年以上日本にいます。日本語を話すことによって、日常生活の問題を解決でき、仕事に対する達成感を感じることができます。私の今の日本語レベルはまだまだですが、日本語の「いいところ」や「大切なところ」が分かってきました。もっと頑張って、日本語の勉強を続けようと思っています。

❖「日本語」は、いい未来を与えてくれそうです！

～美しい、「カタカナ」と「ひらがな」～

インドネシア❋ダヤン・フェルナンド（工場在庫管理者・山加産業株式会社　28歳）

僕は、ケディリという町の、普通の学校にいる「授業をよくサボる」生徒でした。将来、軍人になろうと決めた僕はサイエンスの授業のほかに興味がありませんでした。高校生になった僕は、学校に興味はなく、ただ普通に通って帰ってくる生活でした。ところが、高校一年生から日本語の授業があり、入学したばっかりの僕は初めて日本語を知りました。最初は「この言語何なの?」と思いました。高校一年生の時は、自己紹介などぐらいの授業でした。だんだん日本語に興味を持ち、熱心に日本語を勉強するようになりました。日本語をもっと勉強しようと思うきっかけは、「ひらがな」や「カタカナ」が面白いと思ったことです。字が面白い、というか、カッコイイ、美しいというか、もっと知りたいなと思って熱心に勉強しました。そこから、日本語にはまってしまい、授業をよくサボる僕は、「日本語の授業だけ」はちゃんと熱心に勉強しました。クラスの中でランキングが一番下の僕は、日本語の授業のおかげで点数が上がり、ランキングが真ん中ぐらいに上がりました。学校も面白くなり、もっと勉強しようと思いました。

三年生になった僕はそろそろ将来について決めなければなりませんでした。その時の自分は迷っていました。大学で日本語の勉強を続けるか？　高校で終わりにするか？　そこで先生と相談して、どうするべきかを聞き

ました。先生は、僕のことを考えてくださり、「やっぱり、日本語能力が一つの強みだから、大学に行きなさい」と提案してもらいました。そして、大学で日本語の勉強を続けました。そこで、「ずっと日本語を勉強したい、もっと上手になりたい」、という夢を持ちました。

そして、2022年の4月から、日本の工場で働くことになりました。日本語は、「一緒に、僕の性格」を作ってくれました。そして、いい未来を与えてくれそうです。

アイルランガ大学で日本語を学んだ時、最初は、漢字が一番難しいと思いました。しかし、文法が一番難しかったです。漢字はともかく、文法が分からないのなら日本語で話せないです。でも、文法を覚えようと思っても、あまり使わないのですぐに忘れてしまい、一番難しいと思います。でも、毎日使うと日本語能力も上がるし、自然な日本語も話せるようになってきました。

日本語を勉強したおかげで、今、僕は日本に暮らし、日本で仕事を見つけることができました。現在、一番役に立っているのは日本語だと思います。日本語を勉強したことで、仕事も見つかり、生活も出来るようになりました。日本語を勉強してよかった、と本当に思います。将来に向けてこれからもっと日本語が上手になりたい、もっと日本語で喋りたいと願っています。

日本語の中で好きな言葉は「日本語」そのものです。いつも、「日本語」と聞いたら、なんか、胸がキュンとなって、恋に落ちたみたいな感覚です。好きな言葉は、「日本語」です。

❖日本語学習を、七年続けて、楽しさが多くなった！

～日本語に対しての熱意は、さほどなかったが……～

シンガポール❋ゾウ・チェンジン（名古屋大学　22歳）

「日本語学習の難しさや楽しさ」を上手に言葉にすることができないのは、多くの日本語学習者にとってジレンマだと思う。私もその中の一人である。どの言語でも、誰でも最初から流暢に話せるわけではない。それは日本語でも同じだ。

私は、中国で生れ、5歳の時、シンガポールに移住した。小さい頃からバイリンガルだった。中国語は母語であり、英語は学校や公文教室を通して学習した。母は当時、公文で仕事をしていたので、日本への出張が多かった。私もその影響で日本に興味を持ち始めた。15歳のころ、母の勧めで「日本語学校」に通い始めた。アニメや漫画が好きだったが、特に大きい希望があるわけでもなく、日本語を学習しようとした。

日本語をどういう風に習得したか、は自分でもまだよくわかっていない。「ひらがな」から「漢字」まで、自然に学習できた。自分を優等生と思っていたわけではないが、日本語クラスではかなり優秀だった。バイリンガルが故に、なぜか日本語学習が早く進んだ。しかし、自分の日本語に対しての熱意はまださほどなく、放課後の習い事のノリで通っていた感じだった。「日本語学習の楽しさ」を感じたのは、日本語能力試験一級に合格した時だ。その時、まだ成績や授業の評価しか注目しなかった。

大学のことを考える頃、文部科学省の奨学金があり、急に日本の大学に行きたいという願望がわいてきた。初めて自分から積極的に日本語を勉強し、目標に向けて何か月も努力した。文部科学省の奨学金を受けることができ、２０２０年に、留学生の予備教育のため東京外国語大学に来た。そして、初めて「日本語学習の難しさ」を感じた。日本語学校で会話をあまり練習しなかったため、人前で日本語を話すのが非常に苦痛だった。また、専門的なことについてのプレゼンテーションは、英語でも難しいのに、日本語では不可能という感触だった。東京外国語大学での1年間は、私にとって非常に大切な時間だった。「高慢な自分」に日本語学習の難しさを教えてくれた。また、留学生たちとの交流によって、日本語学習の楽しさを実感することができた。

２０２１年から名古屋大学に所属することになった。日本人と関わる場面が倍に増えた。よく、「日本語が上手」と言われるが、私は常に頭の中では「まだ、上達の余地がある」と思っていた。来日してから、様々な国からの留学生と友達になることができた。「私は何という浅い理由で日本語を始めたのだ」とふと思った。自分より努力してきた人への憧れもあり、少し劣等感も感じた。

今までの私は、両親、留学生の友達、先生という多くの人に支えられてきた。日本語学習は難しいけれど、7年も続けたら、難しさより断然楽しさが多くなった。私みたいに、新しいことを始めるのは必ずしも気高い志がなくてもいい。私の大好きなスポーツ漫画『ハイキュー』のセリフで言うと、「何かを始めるのに〝揺るぎない意志〟とか、〝崇高な動機〟なんて無くていい」。

私は、最初に日本語を始めた自分を思い出して、より一層努力したいと思っている。そして、大学院に進み、専門知識を身に付けて、「日本語」を通じて日本と母国の「架け橋」になりたい、と思っている。

❖スリランカの大臣が「日本の分割」を救った！
～日本の「農業機械化と意識」のご指導を！～

スリランカ＊イノーカ・ラサンティカ・ダサナヤカ（日本語学習塾　28歳）

「憎悪は憎悪によって止まることはなく、慈愛によって止まる」とは仏陀の言葉でる。「それはそうだよね」と考えても、この言葉が「日本とスリランカ」に関係があることをご存知でしょうか。第二次世界大戦敗戦後の１９５１年のサンフランシスコ講和会議で、「日本分割占領案（アメリカ、ソ連など戦勝国５カ国が日本を分割して植民地化する案）」が検討された。しかし、スリランカ（当時、セイロン）のジャヤワルダナ大臣（その後、大統領に就任）氏は「戦争に負けた日本にもう一度チャンスを与えて、日本を独立国家として国際社会の一員として受け入れるべきだ。憎悪は憎悪によって止まることはなく、慈愛によって止まる」と戦勝国に対してスピーチを行った。

このスピーチによって、戦勝国は「日本分割占領」の考えを変えて、日本は分割されずに済んだという。その背景には、同じアジアの日本に対する深い尊敬の念があったそうだ。

ジャヤワルダナ大臣の演説がなければ、今の日本の存在は変わっていた、と言っても過言ではない。また、ジャヤワルダナ大臣は日本を愛していた人物で、「死後、片方の眼の角膜をスリランカ人に、もう片方の角膜を日本人に提供してほしい」という遺言を残して亡くなった。そして、「スリランカと日本」の絆が結ばれた。その時から、スリランカと日本の外交関係は深い。スリランカのセイロン紅茶は日本でも大人気だ。多くの日本

人観光客がスリランカを観光で訪れる。

日本からスリランカへの支援で、両国は強い関係で結ばれている。

私は、サバラガムワ大学で日本語を専攻し、２０１７年、埼玉大学で一年間留学した。日本語は9年ぐらい勉強し、色々な面で、日本への関心は高い。

スリランカは小さな島国で、現在、経済危機に直面している。自然災害の影響などがあまりないスリランカは、昔は、「東の穀倉」と呼ばれるほどスリランカは農業が豊かな国だ。

「美味しく」、「健康的で」、「安心・安全」な稲作など、日本農業は魅力的だ。スリランカも、農業の面でも豊かな国になるために、日本は、「技術的に高度な農業」をスリランカに紹介してもらいたい。スリランカは、農地面積は広いが、農業の機械化が進んでいない。そのため、苦労して収穫した作物が市場の要求に応えられない。人の労力が無駄にならないように、適切な機械化、農業技術や人々の農業に対する姿勢などが、日本のようになれば、といつも考えます。

日本の農業生産で私が一番気に入っているのは、「同じ作物を使って多様な製品を作って味わっている」ことだ。例えば、「桜」だったら、サクランボやサクランボジュース、桜の葉っぱを巻いたお餅やお菓子などだ。スリランカにも多種多様な果物や野菜が豊かで、それらからたくさんの食製品が生まれるはずだ。そのための指導や適当なアドバイスが必要な時期だ。

スリランカが経済的に強くなるために、農業の発展が最も効果的だと思うので、一生懸命に頑張っている日本の姿をスリランカで頑張っている農家にも説明させて彼らの意識改革に少しでも貢献できれば、と思っている。日本のご指導をお願い致します。

❖〝七転び八起き〟で頑張った！
～「物語」を作って、漢字は覚えた～

インド❋バビヤ・ラジェシュ（日本語通訳者　37歳）

少なくとも、私が大学生までは日本語の勉強をしている人を見たことがなく、興味を持つきっかけや目的などは何もありませんでした。ところが、大学を卒業した後、私は、インド南部・バンガルールにある日本企業の「トヨタ」に就職しました。会社では、毎日、みんなが、どのように働くかを観察していました。すると、日本人の上司は献身的に仕事をし、時間管理もすばらしく、その上、とても親切であることに、強く感銘を受けました。

そして、私もその上司のように完璧な仕事がしたいと思ったのが、私が日本語を勉強し始めた動機です。

大学では3年間、日本語を勉強しました。初めは、簡単だと思っていましたが、だんだん難しくなってきました。特に、漢字を覚えるのに苦労しました。何回も漢字を書いて練習しました。そして、漢字を覚えるため、物語を作りました。例えば、「男」という漢字は「田＋カ」で、「田んぼで働くには力が必要です。男はこの力を持っています」。また、「嵐」という漢字は「山＋風」で、「山に強い風が吹く」と、「嵐」になります。このように物語を作って漢字を覚えました。

さらに、先輩たちから、日本語の本をたくさん読むことをすすめられ実践しました。

大学の時、私の日本語レベルは、モサイ（ＭＯＳＡＩ＝インド文部省留学生協会）の日本語上級コース試験スコア基

準に達していませんでした。しかし、私はいろいろなユーチューブを見て勉強し、試験の準備をしました。独学で、日本語能力試験Ｎ３に合格しました。私はひたすら日本語の勉強を続け、日本の財団が主催する「日本語の文化コース」と「日本語教師養成講座」にも参加し、修了証ももらいました。

私が頑張り続けられたのは、『七転び八起き』ということわざを信じていたからです。

私は今、日本語通訳者として働いています。日本語を学ぶ上で、文化の違いや共通点を見つけることも面白いと思います。

私が生まれた南インドのお祭りや文化は、日本のお祭りや文化に似ています。南インドの「ナヴァラトリ」は、日本の「雛祭り」に似ています。女の子の健やかな成長と幸せを願うためのお祭りをしますが、日本でも同じです。さらに、南インドには伝統的な演劇芸術の「ヤクシャガナ」がありますが、これは、日本の「歌舞伎」に似ています。

南インド文化と日本の文化がどうして似ているのでしょうか。将来、それについて研究したいと思います。さらに、また、日本語の勉強をしているインド人学生たちに、もっと日本人とたくさん話をする機会を作りたいです。そのサポートができたらうれしいです。

そのために、私はさらに日本語学習を深めたいと考えています。

インドの若者の間では、日本のアニメが人気ですが、私はドラマが大好きです。特に「ドクターＸの大門先生」が好きで大ファンになりました。彼女の自信に敬服し、いつか彼女のようになりたいと思って、これからも日本語の勉強を頑張ります！　日本人の皆様、これからも、そんな日本語学習者を一人でも多く応援してください。どうぞよろしくお願いいたします。

❖人生を豊かにしてくれた「日本語」に感謝！
～日本語の勉強で、「多くの扉」が開かれた～

ニュージーランド❊トリップ・ラズ（カンタベリー大学　21歳）

「ありがとう」――もし「日本語」が一人の人間として目の前に現れたとしたら、そう声をかけるでしょう。日本語は僕の人生においてとても重要な役割を担っています。言語を学ぶ中で挑戦し、刺激を受け、数え切れないほどの新しい機会と経験を与えてくれました。

日本語との出会いは、子供の頃、岐阜県に住んでいる遠い親戚の人に、アメリカで会った時でした。親戚である相手とうまく会話ができなかった僕は悔しくて、その時初めて日本語を勉強しようと決心しました。あの時から十数年が経ち、大学に入って日本語を勉強し始めました。

当初、日本語を学ぶのは大変なことでした。平仮名や漢字の書き方は今まで見たこともないようなもので、文法もありえないほど複雑に思えたからです。最初は「ありがとう」すら、分からなかった僕ですが、学べば学ぶほど夢中になる自分に気付きました。少しずつ上達し、挑戦することに喜びを感じました。授業以外の勉強時間も増やして、言語だけではなく、日本の文化や歴史にも興味を持つようになりました。

日本への興味が増してきた僕は新学年を迎え、言語への理解を更に深めるために、専攻をコンピューターから「日本語」に変えました。家族の事情で休学した時も毎日、練習を続けて、語学力の向上とともに段々と会話のやる気と自信がついてきました。大学二年目が始まってから一週間足らずで、同い年の日本人の友達ができ

ました。彼の存在は、会話の練習相手にとどまらず、私の日本に対する理解に大きな影響を与えました。彼と接する中で、教科書や先生の口からしか知ることができなかった日本社会の根底にある「深い敬意と礼儀正しさ」を肌で感じることができたからです。

また、彼は交流会や剣道など、あらゆる日本関連のイベントに招待してくれました。そこで知り合った新しい友達たちが教えてくれた日本の音楽、ファッション、映画など、日本のポップカルチャーは独自の美しさと複雑さをもっており、どれも魅力的なものばかりでした。いつか、日本に行き、日本文化にどっぷり浸かりながら、学んだ言語を実社会で実践したいという思いが溢れてきました。

最近、私の生活に転機が訪れました。新しいフラット（シェアハウス）に引っ越したのですが、幸運にも4人の日本人と生活することになり、日々新しい日本人の文化に触れることになりました。日本のアニメを一緒に見て、彼らと一緒にテレビゲームをしたり、日本の料理を一緒に作って、その中で分からない言葉を友だちに聞くことで、日々私の日本語のレベルが上達しているのを感じます。

より多くの日本人と話をしたいという思いから、最近では言語交換のアプリも使用しています。ニュージーランドは現在多くの日本人の留学生がいるので、そこでの新しい出会いもありました。新しい課題も見つかりました。留学生の中には英語がまだまだな方も多く、その方たちと話す際に、日本語を調べその友達に伝えることで自分の成長にも繋がり、友達も自分に新しい日本語を伝えようと英語を勉強してくれることもあり、お互いに成長できる環境が出来ました。

日本語を勉強することで、「多くの扉」が開かれました。人生を豊かにしてくれた「日本語」に心の底から感謝をしています。

❖「地震の国」として運命を共有、援助に感謝
～「エルトゥールル号遭難事件」後、関係強化～

……トルコ❋ウメル・カルカン（アンカラ社会科学大学外国語学部翻訳通訳学科日本語翻訳通訳専攻二年生　19歳）

私は子供の頃から、日本のおもちゃが大好きでした。特に『ベイブレード』というアニメも人気があったベーゴマがお気に入りでした。アニメはとても楽しく感動的で、学校の休み時間にも友達と一緒にベーゴマをぶつけ合って遊びました。その時の楽しさから、日本人は「こんな素晴らしいおもちゃを作り出すことができるほど賢い」という印象を持ち、感謝の気持ちでいっぱいになりました。私は子供の頃から日本の影響を受けました。19歳の若者でも、子供の頃からアニメを通じて日本文化を学ぶことができたほど、日本文化がトルコで人気があります。

日本とトルコは地理的には遠く離れていますが、過去から現在までの交流は、一部の言葉や表現が生まれるほど深くなっています。たとえば、トルコ語で勤勉さや規律正しさを表すために「日本人のように働く」という表現が使われます。同様に、日本人の教育や知識に対して、「日本の頭脳」という表現があります。これらは私が子供の頃から聞いてきた表現です。

トルコの若者は日本のファッションに興味を持っています。着物に似た衣服や日本のファッションスタイルの商品を販売するオンラインショップがトルコでも増えています。アニメやドラマ、映画などから日本のファッ

ションを知って、日本語にも興味を持つようになっています。自分の名前をカタカナで書いたり、日本語の知識について、多くの若者から質問を受けることがあります。トルコの公立大学の日本語学科は、「日本語を学びたい」学生や、日本文化に興味を持つ学生に重要な機会を提供しています。学生は、日本語や日本文化について理解を深めることができ、日本に関する知識を持った人材が育成され……トルコにおける日本の認知度は向上しています。日本食レストランも増えて、トルコの若者が箸を使って食事をすることが、もはや珍しいことではありません。

トルコ人は、歴史の授業でも教えられる「エルトゥールル号遭難事件」によって、常に親日的な姿勢をとっています。1890年に起こったエルトゥールル号遭難事件では、日本の和歌山県串本港に停泊していたというオスマン帝国に属するエルトゥールル号が台風により沈没し、587人のオスマン海軍兵士が亡くなりました。事件の後、日本帝国とオスマン帝国との関係が強化され、両国の文化的・商業的な結び付きが生まれ、日本帝国とオスマン帝国との関係が始まりました。

現在、トルコと日本の両国が地震が多い国として相互支援し、友好的な関係を強化しています。日本の地震専門家のトルコでの活動はメディアで非常に注目されています。地震に関する知識を強化し、備えるためにも、トルコは日本との関係を一層強化する方向で進んでいます。

歴史的にもトルコの味方としての日本は、トルコ人の間で常に肯定的に評価され、トルコ語に「日本」に関するポジティブな表現が生まれました。「地震の国」として同じ運命を共有していることから、トルコの人々は日本人に対して共感を抱き、日本からの援助に感謝しています。

❖好きな「ことわざ」は「十人十色」

～3年前、沖縄に来てから「日本語」を勉強！～

……イスラエル❋ウェベル・ナターリヤ（沖縄科学技術大学院大学博士課程・認知科学　35歳）

私が日本語を学ぶ理由は、留学してきた沖縄の地元の人々とコミュニケーションをとり、理解するためです。２０２０年1月に、沖縄科学技術大学院大学博士課程（理論科学）に留学するため日本に来た時、私は全く日本語を知りませんでした。コロナの発生初期でしたが、日本での生活が始まると、日本語がわからなかった私ですが、周りのサポートで何とかなりました。しかし、日本で生活しているうちに、「早く沖縄の人たちと話して、彼らの本当の気持ちを知りたい」と思いました。

日本語の文章は、翻訳などのウェブサイトを使用して確かめています。

私は読書が好きなので、本などを読むことで、日本語を早く学べると思いました。しかし、間違っていました。内容のほとんどが絵であるマンガを読んでも、「漢字」を知らなければ非常に難しいです。「漢字」を知ることが日本文化の鍵です。

大学院では、『Ｇｅｎｋｉ』という教科書を使って日本語を勉強しています。初めは、この教科書で日本語を勉強することがとても楽しみでしたが、すぐに失望しました。例えば、教科書では、最初に「単語」を学びますが、「熟語」は後で習います。単語とその熟語を別々に学ぶことはとても難しいと思います。教科書で、漢字の

学習順序がどのように決められたのか理解できませんでした。自分で漢字を勉強しよう、と決めました。

その時、私は好きな日本語の「ことわざ」に出会いました。それは「十人十色」です。これは、「人々は、それぞれ独自の見方や感じ方を持っている」という意味です。私はインターネットで他の人がどのようにしているかを見たり、アプリを使ってみたり、いろいろな方法を試してみました。

漢字は複雑に見えるかもしれませんが、美しい意味を持っています。漢字を学ぶ一般的な方法の一つは、記憶術を使うことです。漢字の部首の意味を見て、その漢字のストーリーを作り出します。

黒澤ウィリアムズ憲子著『英語話者のための漢字絵解き書（The Key to Kanji）』に、面白いことが書いてありました。「歴」の意味は「歴史」です。古い形では、上の「麻」は稲の植物「禾」を描いており、現在の「木」に置き換わっています。屋根の下に「厂」できれいに掛けられて乾燥しています。下部にある「止」は「足」を示し、順序正しく多くの停留所がある道を歩くことを表しています。「歴」という字は、一つ一つ数えられる多くの収穫の季節を表しています。この意味はとてもきれいです。

学生は、古代の形が意味の直接的なイメージだった時代から現在の形まで、漢字の歴史的な発展を学ぶことができます。このように、漢字の真の意味を教えられれば、学生たちは、漢字の学習をより早く進めることができ、日本語学習だけでなく、日本の文化や歴史を理解することができると思います。

日本では、Ｎ２またはＮ１の日本語能力試験に合格することは、日本語に精通していることを示すための資格となります。日本滞在期間に、そのレベルまで到達できるかわかりません。しかし、「十人十色」です。まだ、日本語を学ぶ方法がよくわかりませんが、少しずつ、私のペースで上達していきたいと思っています。

❖私の人生を変えてくれた「日本語」
～日本語教育の「ユーチューブ」と「言語学校」設立～

ブラジル＊フイジオ・サラ・ロンガット（言語学校のコーディネーター　31歳）

私はブラジルとウルグアイのハーフです。日本との繋がりは２００５年に始まりました。母の仕事（パウロ・フレイレ地域学校の校長）の関係で、ブラジル人がたくさんいる愛知県豊田市に行きました。３年だけいるつもりでしたが、日本での生活、言語や文化に強い魅力を感じ、結局ビザを何回も延長し、10年間、日本に住みました。愛知県立大学の外国語学部英米学科を卒業し、帰国した後も、ＪＩＣＡ（国際協力機構）に就職したり、日本語を教えたりしました。

両親が教師であることから、幼い頃から教育に関心があり、今でも「教育」に恋に落ちています。大学では、人はどうすれば楽しく外国語を学ぶことができるか、について研究し、２０１２年にブラジル人向けの日本語教育のユーチューブチャンネルを始めました。そこでは、文法、語彙や文字（ひらがな、カタカナ、漢字）を無料で教え、現在22万人の登録者を集めています。この経験を通して、これだけ日本に興味がある人・日本に新しいチャンスを探す人がいることを実感し、日本で経験したことをビデオで通信しています。

２０１６年に主な仕事を「日本語教師」と決め、同僚と、夢であった「Mirai Idiomas」という「言語学校」を設立しました。対面授業ではなく、オンラインで授業を行っているため、ブラジルだけでなく、世界中の学

習者に日本語を教えることができます。コロナの影響で生徒がますます増え、教え方、指導の仕方などについて、毎日考えながら一生懸命、学校経営を頑張っています。

教師であるからこそ教えることに魅力を感じ、趣味としての気持ちで、楽しく自分の仕事をしています。私には、「日本語」は一つの「言語」だけではなく、「ライフスタイル」です。日本語を学ぼうと思ったら、文化や習慣も勉強せざるを得ないです。いくら日本語や漢字が上手でも、日本人の振る舞いなどを観察しないと、ナチュラルで流暢に日本語が話せるようになるのは難しいでしょう。

「日本語」は伝統的な文化や習慣から離れられない長い歴史のある言語だと思います。帰国して8年間になりますが、気づいたのは、日本語は私の人生を変えてくれたことです。日本語を習得することによって、新しい文化を身に着けることができ、視野も広くなりました。そして、ひとそれぞれの「違い」は悪いことではなく「違い」があるからこそ、素晴らしく綺麗な世界がある、と思えるようになりました。日本人の血は体の中に流れていませんが、血より深い繋がりがあると感じます。

今年の2月に念願の妊娠をしました。将来、自分の子どもに「私が日本のおかげで生きてきた素敵な経験」を伝え、同じような忘れられない思い出を作らせたいと思います。そして、日本で学んできた「時間の大切さ」、「他人への尊敬」等の気持ちを伝え、自分と「違う人」を尊重するように、子供の教育に力を入れたいと思います。

日本語に「一期一会」という諺があります。日本に行けた機会はまさに「一期一会」でした。日本語のおかげで今の自分がいます。感謝のしようがないです。これからも、大好きな日本語を多くの人に広げたいと思います。

❖「日本語」は「生き甲斐」で、人生の大事な部分
～安心させてくれた「桜梅桃李」という「四字熟語」～

コスタリカ❋アレハンドロ・セースペデス・グティエーレス（日本語教師（言語学校）　33歳）

僕が八歳の時に、コスタリカ大学で働いた父が「日本語のコース」を受ける事ができたので、父は家に基本的な日本語の小冊子を持ってきた。好奇心の強い僕はそれを見ながら、あの遠い国の言葉が母語であるスペイン語と、どれだけ異なるかに驚いた。母音と子音を示す文字の代わりに仮名があったり、概念を表した漢字が存在したり、言葉の順番も随分違ったりするなどの特徴を知って、この言語に、心を奪われた。

そんなに日本語に興味を持ち始めた頃の僕は、どの程度までこの言語が僕の人生や将来を変えるか少しも考えなかった、まして、20年後、この言語を喜んで教えて色々な人に好かれる教師になるとは想像もできなかった。子供の時だけでなく、中学生になっても、大学で電気工学部の2年生になってようやく「日本語」の勉強を正式に始めた時も、僕の頭には、その可能性については、まったく、浮かばなかった。

最初は不安だった。この言語が、僕にとって難し過ぎるようになったらどうしようか、と恐れていた。しかし、運良く、思った以上に、実際に「日本語」が好きになり、上達したと思う。いろいろ苦労した挙句、２０１３年に、「大学の日本語教師のアシスタント」になり、２０１７年から教師として働き始めた。無論、この仕事も大変な事があって、いつも楽しい訳ではないが、「充実している」と感じていた。そんな時、「電気工学」の魅力

を段々感じられなくなっていた。「アシスタントが面白いので、もしかしたら、日本語教師の仕事に向いているのかなあ」と真面目に考え始めた。

言語学を少し勉強したが、やはり、「日本語」は普通の言語ではない、という結論に達した。「漢字」と「仮名」の複雑な組み合わせを始め、文法もインド・ヨーロッパ語族のルールとは異なる。特に、40％の動詞が不規則的である母国語のスペイン語と違って、日本語の動詞の活用は、かなり規則的で、「する」と「来る」だけは日本語で雄一の不規則動詞であるという有利性に、いつも驚かされる。さらに、「擬音語」は、正式な文章の中で、問題無く使いこなせる言葉であるのが、不思議だ。「僕の目が点になる」ほどの大きな特徴だと思っている。

日本語の中で、「四字熟語」が好きだ。四つの文字だけで、複雑で深い意味を表せる事が素晴らしい。お気に入りの四字熟語は「桜梅桃李」だ。「目標を未だ果たさなくても、焦らなくても良い。それぞれが独自の花を咲かせる時が必ず来たる」という意味は、僕をどれ程安心させてくれたことか。人ごとに自分の魂を表す「四字熟語」があると信じる。

その「日本語」で何が出来るか。２０２３年1、2月に日本語教授法研修のため埼玉県に6週間滞在したほか、2回日本へ行った。その体験を生かして、「四字熟語」などのような「日本語」の素晴らしさ、そして、「日本と日本文化」をコスタリカの人たちに伝えたいと思っている。

「日本語」という言語に、恩を感じている。日本語のおかげで、素晴らしい日本語ができる友達と出会い、これまでにない経験をすることができた。「日本語」は、僕の人生の一つの大事な部分であり、「日本語」は僕の「生き甲斐」になった。

❖「日本語」は、「美しさ」を感じる言語

～日本の医学書を翻訳して、ウルグアイの医学に役立てたい！～

ウルグアイ❋ジュリアナ・ノゲエス（ウルグアイ共和国大学　23歳）

私は10歳の頃、いろいろなアニメがテレビで放送されていて、時々見ていました。しばらくして、私はそれが日本から来たことを知りました。ある日学校で、先生が私たちに「世界で興味のある場所はどこですか」と尋ねました。私は、いろいろな場所について調べて、日本のいくつかの写真を見つけました。一度見たら忘れられなくなりました。桜の繊細な花びら、水に落ちた鮮やかな赤いもみじ、お寺や神社、京都の風景がとても印象的でした。それらの写真を見てから、私は夢を見始めました。ラテンアメリカに住む人にとって、いろいろな国に旅行することは簡単ではありません。まず、テレビなどで、日本についてのドキュメンタリーをたくさん見ることにしました。日本文化について少し知ってから、いくつかの言葉も少し理解できるようになりました。そして、日本語を勉強したいと思ったのです。

しかし、その時はお金がありませんでした。２０１９年から、大学（医学部）二年生の時、大学に「無料で日本語が学べるプログラム」があることを知りました。教えている先生は日本人でした。そのコースで勉強することにしました。先生は日本語を教えてくれるだけでなく、「日本人がテレビの世界ではなく、私たちのそばにいる」ことを実感しました。先生は温かくて、尊敬できる人で、私には「特別な人」に感じました。何か違った空気を持っていました。

私は日本語のクラスが大好きになりました。２０２０年、世界で新型コロナのパンデミックが発生して、日本語コースが開講されなくなり、私は大好きな日本語の勉強を続けることができなくなってしまいました。私を魅了した日本語、日本の文化について、それをうまく説明する言葉が見つかりません。美しい？　綺麗？　それだけではないからです。そして、誰かが日本語を話しているのを聞くだけで嬉しくなる私の気持ち、それも言葉では説明できません。

私には、日本語と同じように感じる他の言語はありません。日本語ほど美しさを感じる言語、聞いているだけで心地よい、その特別で美しい文字と表現には文化が込められています。

憧れの国について学ぶ私のプロセスを終わらせたくありません。日本大使館の前を通って日本の旗を見ると、私は嬉しくなって、誇りを感じます。ウルグアイはとても平和で温かい文化がありますが、とても小さい国です。日本が、このような小さい国との関係を大切にしてくれていることは、本当に誇りです。日本は、戦争や震災を経験しながらも、平和主義を貫き、世界の大国となりました。「平和と尊敬の気持ち」が、ウルグアイと日本を結びつけていると信じています。それは二つの国が持つ基本的な考えです。

私は医学を勉強しています。日本の医学が、どれだけ大きな貢献をしたことでしょう。「日本語」の日本の医学書（医学や薬学）を、スペイン語や英語などに翻訳して、ウルグアイの医学に役立てたい、と思っています。そのレベルまで、日本語が上達することが私の夢であり、目標です。

日本は「手の届かない丘の上にある美しい花」のように見えますが、美しい花、特別な言語に興味を持つことができたのはとても幸運でした。努力して、いつかその花に届きますように。

❖漫画家を夢見て学んだ「日本語」で人生勉強！

～グアテマラ人のために「日本語教室」を～

グアテマラ❋ノーマンス・サガストゥメ・ハビエル・アレクサンダー（就職活動中　26歳）

私には、人に笑顔を届ける「漫画家」になるという夢がありました。そのため、「多くの漫画家が生まれる」日本へ行ってみたいと決心し、初めて日本語という存在と出会いました。日本語に魅力を感じ、数年間、母国の語学学校に通いながら、絵の練習もしました。

そして、２０１７年から2年間、日本の専門学校に留学することができました。期待とワクワクの気持ちで、日本に旅立ったものの、現実の世界が、夢見ていたのと異なることを思い知らされました。日本漫画の知識を得られたのに、自分の日本語力が劣っていることに気づかされたのです。

毎日、他人とコミュニケーションを取ることに苦戦を強いられた私は、人生初めて孤独を感じました。自分の考え方を思うまま伝えることができず、人間関係を築くことも不可能でした。何人かに話しかけたり、話してもらえたりしたとはいえ、長い付き合いはもてず、取り残された気分が続きました。「これじゃ、漫画家になる夢は無理じゃない?!」と絶望に陥ったこともありました。しかし、夢に一歩近づけたのにそこで諦めるなんて、もったいない、と気付き、再び日本語の勉強に取り掛かることを決断しました。響きの良い言葉と、優雅な文体を持ち合わせている言語は、日本語の他にはない、と思いました。ようやく日本語が僅かながら上達

しました。人の考え方を日本語で理解することができてから、夢へ向かう道が再び開かれたのです。

クラスメートの漫画作品を読んだり、周りの会話にこっそり耳を傾けたりしたら、他人が経験したこと、思っていることが聞けました。そうした形で、自分の価値観も少しずつ変わっていき、「漫画の更なるあり方」を理解することができました。日本語を通して、「日本人の世界の見方、積極的さ、そしてその努力の源」と遭遇できたのです。「日本人は漫画を通して同じ日本人に少しでも『癒やしの魔法』を与えている！」ということです。

しかし、「外国人の私は日本では活躍できないな」と、孤独のまま帰国することにしました。夢を捨てたわけでもなく、夢が一変しただけなのです。今は、「漫画家になる」夢ではなく、「漫画で母国の人を手伝いたい」という夢へ変貌したのです。日本人がそうするように。母国のグアテマラにも、世界に見せるべき魅力があります。私は漫画という媒体を用いてそれを実現させたいと思います。そうすれば、世界に何かを語りたいグアテマラ人が声をあげるでしょう。

今の私には、グアテマラの話で人に笑顔を届けたい夢があります。そのきっかけとなったのは、「日本語」そのものです。日本語がなければ、かけがえのない経験も得られなかったし、日本人の気持ちも考え方も知る術がなかったのです。日本語にはすごく関心があるので、勉強を続けています。独学ですが、日本語能力試験Ｎ１とビジネス日本語に挑戦しています。同じく日本に行きたいと夢見ているグアテマラ人を手伝うため、将来、日本語教室を開こうと思っています。

「日本語」を通じて、夢に向かう力や、やる気も、元気ももらいました。「日本語」は私にとって「究極の宝物」です。この「宝物」を、次の世代と分かち合う番が来ると信じています。

❖「継続は力なり」で、楽しく、日本語を勉強しています！

～Ａｎｋｉ、チャットＧＰＴも使いましたが……～

ジャマイカ❇アマーニ・クック（ザ・ウェスト・インディーズ大学卒　23歳）

一年以上前、大学で、専攻は英語圏文学で、副専攻は「日本語」でした。二年生の時、キラキラして一生懸命日本語を勉強し始めました。授業外で、毎日毎日、何時間も日本語を聞いたり読んだりフラッシュカードを作ったりレビューをしました。カードを作りすぎて、日本語にひたるより、カードをレビューする時間のほうが多くなりました。厳しかったです。日本語をやりたくない、と思ったこともあります。

「どうしてその難しくて日本国外で役に立たない日本語を勉強しているの？」と自分で悩みました。インターネットによると、Ａｎｋｉという「暗記」ソフトウェアプログラムで、自分で作ったカードをレビューするのは最高の勉強方法だそうです。だから、Ａｎｋｉを使わないといけない気がしました。でも、「誰か、Ａｎｋｉを使わずにペラペラになった？」、「Ａｎｋｉは必要か？」と、相変わらず考えていました。余計に不安でした。

それでも、いろいろ検索して、結局落ち着きました。もちろん、「Ａｎｋｉは効率的に勉強を上手にすることができるが、絶対に必要なものじゃない」、ということです。

大事なことは、「使うことより、楽しむことの方が大事」です。そして、「日本語の勉強を辞めないこと」です。

でも、Ａｎｋｉを削除したからといって問題は解決しませんでした。迷って、他の良い勉強方法をやってみました。単語と文法のリストを作る、とか、ポッドキャスト（インターネット上の音声や動画）ばかり聞いてみるとか。多くの人がはまっていたチャットＧＰＴ（対話型人工知能）も使ってみました。私が興味を持っている短編小説を作りました。とっても楽しかったし、新しい単語と文法を学びました。しかし、結局、ほとんどの物語はあまりにも無茶苦茶な話だと気づきました。例文にチャットＧＰＴは便利ですけど、他の勉強方法をメインに使いたかったです。

日本語の勉強は楽しくなくなった時、また絵を描くことを学び始めました。好きな芸術家のユーチューバーがアドバイスをしてくれました。「楽しむことにフォーカスしてください。描くことをすればするほど、楽しく、上手になります」。「そうだ！　日本語もアートと同じだ」と気づきました。完璧な方法ばかり考え、楽しむことを忘れてしまいました。

日本の本や漫画、アニメなどにひたることが、私の日本語勉強法です。ユーチューブビデオなどで、知らない単語や文法を調べます。繰り返し勉強することは、本当に「魔法」です。ネットフリックス番組やアニメやユーチューブでゲーム実況を見て、日本語を楽しく聞いていますので、リスニング能力は上達した気がします。

今、仕事や勉強のために準備をしています。ＪＥＴプログラム（青年交流）で日本に行って、英語以外で日本語を使って、いろいろな人と話したいです。「継続は力なり」でしょう！　全部が分からなくても、日本に行くまで、興味を持って日本語の勉強を楽しく続けることにします。

❖「日本語」を使って、日本との関係を良くしたい！

～「言葉」のメロディーや、美しい漢字や仮名に惹かれた～

キューバ❋ビアンカ・アルボラエズ・ロペズ（ハバナ大学外国語学部　20歳）

中学校の時、友達にアニメをすすめられ、その時から「日本」が好きになりました。はじめはアニメしか見ていませんでしたが、少しずつ日本文化全体に興味を持つようになりました。それから日本語を勉強することに決めました。

日本語の「言葉」のメロディーや、美しい漢字や仮名に惹かれました。また、年齢や性別、地域によって話し方が変わるというのも、とても面白いと思いました。日本語の勉強を始めてから、いろいろな本を使ってきました。例えば、「みんなの日本語」、「ゼロからの日本語」、「まるごと」などです。「みんなの日本語」は文法の詳しい説明があるので一番好きです。

大学では、週2回・合計4時間、日本語を勉強しています。日常生活では、日本語を使う機会はあまりありませんので、家では一人で勉強しています。日本語学習のためにユーチューブの動画を見たり、ポッドキャストを聞いたりもしています。

日本語に難しい点が多いです。特に、話す時に多くの文法の細部まで考慮しなければなりませんから、流暢に話すのは難しいです。動詞が他動詞なのか、自動詞なのかを考えなければなりません。そして、動詞の「て形」か「ます形」か「た形」か、どれを使うかも考えなければなりません。そのうえ、時々、本で教えている日

本語と日常的に話している日本語は違います。だから外国人が日本語を話すと自然に聞こえないことが多いのです。

日本語の書記体系も複雑です。ひらがなとカタカナはあまり難しくないですが、漢字はとても難しいです。漢字の数は多いし、読み方もたくさんあります。

しかし、日本語を勉強することは、困難なことばかりではなく、喜びもあります。

漢字はたくさんありますが、漢字を勉強する時とても楽しいです。絵を描く画家みたい、だと思います。そして、読む時は漢字が分かると嬉しいです。それに、日本語を勉強しながら、文化も学んでいます。

日本語学習のおかげで、代表的な日本料理や伝統的な服装、お寺での振る舞い方まで知ることができました。面白い物語を読むこともできました。浦島太郎、雪女そして蜘蛛の糸などです。

私は、世界の多くの問題を解決するためには、コミュニケーションが重要だと思います。そこで、将来は通訳と翻訳者になって、日本語を使って、「言葉の壁」がなくなるようなコミュニケーションに貢献したいです。

そして、キューバと日本の関係が良くなるために働きたいです。

時々日本語学習が大変だなと思う時があります。でもその時にはこの日本の諺を頭に浮かべます。「塵も積もれば山となる」。これからも、日本語が上手になるように頑張ります。

❖「書道」で書いた「漢字」が、気に入った！

～日本に行って、「醸造と食品化学」の勉強をしたい！～

ロシア ❋ クセーニャ・ビリューコヴァ（モスクワ市立教育大学　23歳）

子供の頃から、書道、日本のアニメに興味がありました。日本文化に興味を持ち始めたのは、13歳の誕生日に、母が「書道」の本、筆、墨のセットをプレゼントしてくれたからです。早速、「漢字」を書いてみたら、とても気に入りました。次に、日本の都道府県や習慣、伝統、料理、名物について興味があり、その本を買いました。14歳の時、モスクワで「生け花」や、アニメ・イベント、「着物の着付け教室」などに通い、15歳の時に、モスクワ市内の「日本語教室」に通い始めました

でも、カタカナを覚えることはとても難しかったので、日本語の勉強を続けていくのは無理かもしれない、と思いました。カタカナは同じような形が多く、違いがよく分かりませんでした。そんな時、日本語の先生から、「猿も木から落ちる」と言われたので、「失敗してもいい」と思い、カタカナと、五級の漢字、語彙、文法に挑戦しようと思いました。

ある日、一人の日本人が私たちの日本語のコースにやってきて、「金沢市の一ヶ月の交流プログラムに参加しませんか」と誘ってくれました。12人を選ぶ面接があり、「なぜ金沢市に行きたいのか」という質問でした。ロシア語と少しの日本語で説明する必要がありました。私は、「日本語だけでなく、日本の伝統的な建築物や伝統工芸を見たいと思います」と答えました。なんと合格することができました。２０１５年の秋、金沢市への旅

行が決まり、がむしゃらに日本語を勉強しました。当時16歳で、両親が同伴しない初めての海外旅行でしたので、両親はとても心配しました。

金沢の「リファーレ」というビルで、日本語の授業だけでなく、日本文化についてのワークショップもありました。例えば、「水引」や、書道や、生け花などです。ワークショップのおかげで、日本の文化をより理解することができ、日本人とコミュニケーションすることに自信を持つようになりました。「水引」のワークショップは、私のホストファミリーのお母さんが行い、私は、初めて、「水引」を結びました。

ある日、ホストファミリーと一緒に、石川県をはじめ他県の物産を販売する市場へ行き、「くじ引き」をしました。「くじ引き」で、箱を回して、くじを引き、石川県産の「醤油」をもらいました。この醤油は、家族へのおみやげとして、モスクワに持って帰りました。

交流プログラムの後、モスクワ市立教育大学のアジア研究部に入学しました。日本語の授業で一番難しかったのは、日本の文学でした。例えば、芥川龍之介、夏目漱石、古事記、源氏物語も読みました。大学では様々なイベントを開催しました。筑波大学と早稲田大学の日本人学生たちが、国際交流で、モスクワに3週間滞在しました。モスクワの大学でロシアの学生に日本語を教えたりしました。とても楽しかったです。

大学の時、日本のお酒や食品に関係するイベントで、ボランティアとして活動しました。パンフレットの翻訳を担当しましたが、外国人向けの日本語教科書と違うので、戸惑いました。専門用語もあり、とても大変でしたが、とてもいい経験になりました。その後、ウイスキー、日本酒、食品の製造に興味を持つようになり、今は、日本に行って、醸造と食品化学などの生化学を勉強しようと思っています。

❖ 一生かかっても勉強し尽くせない「日本語」

～私は「円珍（マルチン）・可茶野（カチャノ）」です～

ポーランド❄マルチン・カチャノフスキ（新聞記者・ビドゴシチ市　47歳）

幼い頃、「将軍」という映画を見てから、大学生の時、日本語の勉強を始めました。日本の江戸時代に、英国人航海士だったウィリアム・アダムス（のちに日本名・三浦按針）は、初の英国人として日本の豊後（大分県）に漂着しました。彼はヨーロッパと全く違う社会制度や生活習慣にとても驚きました。ポーランド人の私も冒険や新しい挑戦が好きなので、いつか、はるか遠くにある日本列島に漂着してみたいと思ったのです。もちろん、日本の「神風」を出し抜いたとしても、現代でこんな事をしたら、きっと日本の海上保安庁に捕まるでしょう。

そして、大学生の時、1999年に、高知県の高知大学へ短期留学しましたが、25歳の時、「日本語を活かして真面目に仕事が出来ない」と思って、日本語の勉強を止めました。しかし、昨年（2022年）から、独学で日本語の勉強を再開しました。

日本での滞在を満喫するためには、ある程度、日本の言葉を使いこなさないと不自由だと思って、事前に日本語を勉強することにしました。日本語の難しさは、「漢字の数の多さ」と「敬語」にあります。日本の新聞を読んで理解するには、約4千種類の「漢字」を知っておかなければなりません。単純計算で、毎日、四つの漢字

を勉強していけば、大体、3年で漢字をマスターできることになります。しかし、勉強しても、最初は、身に付けた漢字はどんどん忘れていってしまうので、正直、至難の業です。「敬語」も複雑で、謙譲語、尊敬語、丁寧語もあり、さらに細かく言えば、丁重語や美化語もあります。

実際に日本を訪れてみると、幸いなことに、日本人でもすべての漢字を知らないようでした。また、敬語も間違えているので一安心かな、と思いました。例えば、「敬語」としては、「ご苦労様でした」より「お疲れ様でした」の方が自然な敬語の表現だそうです。

日本語を学ぶ楽しさの一つは、ポーランド語と日本語との同音異義語です。例えば、日本語で「谷(たに)」と発音したら、ポーランド語で「安い」と言う意味になります。「お金(かね)」をポーランド語で発音すると、日本語の「傘」のことを指します。方言も楽しいです。でも、日本語は語彙が豊富なので一生かかっても、勉強し尽くせない言語かもしれません。

将来、日本語の翻訳家になろうと思っていましたが、最近、翻訳アプリが登場したため、諦めた方が良いかな？　と考えています。アプリ開発が進んで、翻訳家の仕事がどんどん減ってゆき、五年、十年後には、翻訳者や通訳者は要らなくなるのではないでしょうか。また、在日ポーランド大使になれれば、と思ったこともありましたが、どうしたら良いかさっぱりわかりません。

私は日本語で「円珍(マルチン)・可茶野(カチャノ)」です。好きな諺の一つは「一期一会」です。人の出会いは一生に一度きりと考えて、いつもこの瞬間を大切にしていく、という茶道の言葉です。これから、「一期一会」を大切に、「苺」を食べて、日本語の勉強を続けるつもりです。

❖初めに書いた字は、「書道」で「人、水、春」

～日本人とチャットして「日本への空想旅行」が始まった！～

イタリア❋フェデリコ・タリアフェッリ（会社員　33歳）

私は子供のころ何となく日本が好きでした。どうしてだったかよくわかりません。学校が終わって家に帰ると、いつもテレビで日本のアニメが放送されていて、ほとんど毎日見ていたからかもしれません。大人になるにつれて、日本にだんだん興味を持つようになり、五年前から一層興味を感じ、初めに「書道」を習いました。筆と墨を使って、初めは、「人」や「水」など簡単な「漢字」を書いていました。「春」も書きました。

それから、日本語を一生懸命勉強し始めました。その日から、とても素晴らしい「日本への空想旅行」が始まったのです。「ひらがな」と「カタカナ」は易しかったですが、「漢字」は今も難しいです。しかし、漢字はとても面白いと思っています。日本語を勉強し始めた頃は、「どうして漢字なんて使うのか」とか、「ひらがなとカタカナだけいいのに」と考えていました。今では、漢字がない文を見て、「どうして漢字を使わないのか」と考えます。日本語を勉強して行くうちに「漢字」の大切さがよく分かりました。

ある日、日本語が上手になるように日本人とチャットしてみようと思い、アプリで挑戦してみました。日本語でちょっと話せるおかげで違う文化に会えました。世界の裏側から日本人がチャットしながら私に日本のことを沢山教えてくれました。空想が現実のように迫って来ました。例えば、四月の初めに学校が始まること、年

始の初詣と書初めの習慣、年中の祝日、学校の放課後クラブ、お花見などなど。目を丸くしてワクワクしながらチャットを読んでいました。この日本人と次第に仲良くなり、三年後の今、私達は友達です。いつか、日本で私の友達に会うのが夢です。

ある年、日本から友達が私にお菓子やカレーを送ってくれました。何を食べてもすごく美味しかったです。まるで私が日本人の友達の近くにいるような気持ちになりました。幸一さん、杏子さん、順子さん、かなこさん、友達になってくれて、本当にありがとうございます。

簡単な日本語で書いてある本なら読めるようになりました。今も日本語で書かれたマンガを読んでいます。日本語の本を読めるのが「空想旅行のハイライト」です。本当に満足しています。日本語のおかげです。日本語の勉強は小さなきっかけから始まりましたが、今はとても大切なことで、生活の一部になっています。

今、一番重要で楽しい習慣は、毎日日本語を使うことだと思っています。私はまだ日本に行ったことがありませんが、今すぐにでも行きたいです。日本に行ったら日本の人達と話せるし、道路標識も読めるし、全ては日本語の練習になるでしょう。日本語の勉強は、難しいからこそ楽しい、と思っています。日本に行ける日を楽しみにしています。

日本語の勉強を始めた頃は、こんなに楽しくて、面白くなるとは全く想像もしていませんでした。きっといつか、「日本へ行く」という夢が実現する日が来ると信じています。

❖日本の「アニメの主題歌」に涙が出ました！

～「日本語」の素晴らしさを、セルビアの人に教えたい～

セルビア❇ミリツァ・ヴカソヴィッチ（ベオグラード言語大学・日本語学科大学院生　22歳）

子供の頃、私は喘息で体が弱く、すぐ疲れたり体調がよく崩れたりしました。友達が少なくて、外でたくさん遊ぶこともできませんでした。だから、自然にテレビの前で一日を過ごすのが趣味になりました。ディズニーと日本のアニメが一番好きでした。でも、両方とも私の母語で吹き替えられていましたから、原作が別の言語のものだと知りませんでした。

私の人生が変わったのは、初めて日本語の「しゅごキャラ！」というアニメを見た時です。今まで聞いたことない言語に驚きました。勉強していた英語やフランス語と全然違って、発音がきれいで、言葉が水のように流れていました。そのアニメの主題歌を聞いた時、歌詞の意味も分からず、思わず涙が出たことを忘れません。なぜ泣いたのか、今でもよく分かりませんが、たぶん、子供でも大切なものを見つけたと無意識的に気付いたからかもしれません。12歳で小学校六年生だった私は、日本語に夢中になりました。アニメを見るたびにキャラクターが話していた言葉を口に出して、発音が完璧になるまで何回も繰り返しました。日本語の何もかもが面白くて、新しい単語を覚えるのがとても楽しみでした。

それなのに、将来について悩み始めました。日本語を勉強するために言語専門高校に行きたいと思いましたが、好きなことを勉強しても、この国では仕事が見つからない、と言われて、「自分の夢を追いかけるか」、そ

れとも、「好きでもない道を選んだほうがいいのか」、悩んでいました。プレッシャーでおかしくなるかと思った時に、憧れている日本の歌手・声優の宮野真守さんの心に触れた言葉をＹｏｕＴｕｂｅで聞きました。「人生は短くて儚いものだから、やりたいようにやればいいじゃん。なりたいようになればいいじゃん。一番大事なのはどんな道を選んでも、最後まで自分らしく生きることだ」。私もそのような人間になりたいと思って……周りに「変だ」と言われても、「日本語」を勉強しようと決めました。

それから、言語専門高校を卒業して、大学でも日本語を勉強し続けて、日本の美術に興味がありますから、今は大学院生として、「日本の明治と大正時代の女性画家」について論文を書いています。

日本語は決して優しい言語じゃありません。学生時代、私が好きだったのは「日本語の文法」の勉強です。アニメを見ながら憶えてきた言葉が、どうやって文章につながるのかが面白かったです。自分の日本語の能力を発揮することができる会話の練習が楽しかったです。しかし、今も苦労させるのは「漢字」です。「漢字」だけがどうしても頭に残りません。それでも、日本語を勉強するのは嫌いじゃありません。もう9年ぐらい日本語を勉強していますが、最初の日から楽しかったですから。あっという間に時間が経ちました。もう、大人になりましたが、子どもの頃と同じように、毎日、日本語を勉強するのが好きです。

「日本語」を知ったおかげで、私は人として良い意味で変わりました。少しずつ自信を得て、人に話しかけるようになって、毎日、笑えるようになりました。日本語について話しても、日本人と会話して日本語が上手だと褒められても、日本語を通して日本の文化を知っても、全部がドキドキさせてくれます。今の日常では、あまり使えなくても、いつか「日本語」で仕事がしたいです。そして、必ず、私は、大好きな「日本語」の素晴らしさを、セルビアの多くの人に教えたいです。

❖「勤勉で、責任感と義務感が強い」日本人！

～ブルガリアと日本の「文化交流」の企画の仕事を～

……ブルガリア ❄ アレクサンドロヴァ・ネリー（ソフィア大学（聖クリメント・オフリドスキー）古典現代言語学部日本学科　23歳）

日本とブルガリアの正式な外交関係は１９３９年に始まりましたが、それ以前からブルガリアでは日本に関する意見や考えが形成されていました。ブルガリア人は日本の自然、料理、建築、歴史などを高く評価しています。一般的に、日本人は勤勉で、責任感と義務感が強い、とされています。

私は２０１９年から大学で、一日3～5時間日本語を勉強しています。２０１７年と２０１８年に、日本の岡山市とブルガリアの第二の都市・プロブディフ市との間の留学生交換に参加しました。日本文化について学んだ経験が、私の「日本への愛と興味」を呼び起こしました。

ある国の人々が別の国の人々についての考えや知識を得るのは、二国間の交流関係とポップカルチャーと思います。１９７２年に岡山市とプロブディフ市の姉妹都市提携が始まりました。これは二国間関係のごく一部ですが、多くのブルガリア人が日本に対して感じるインスピレーションを生み出すことができたのは、姉妹関係とそれに関連するすべての活動で、日本の文化を知り、日本を訪れることができたからです。

ブルガリアと日本の間には多くの友好関係の都市があり、両国間の市民外交の基礎を形成しています。岡山市の社会主義国友好協会のイニシアチブで、岡山市とプロブディフ市は、１９７３年10月23日に、正式に姉妹都市提携を結びました。両国間の交流・プロジェクトは、相互に関連して、全体がブルガリアと日本の間の外

交を支える安定した構造を構築しています。

ブルガリアと日本の「貿易と教育の分野における協力」と共同プロジェクトは、新しい仕事と専門的な人材を提供することにより、両国の経済を支えています。姉妹提携20周年の1992年には、日本大使館主催の公式レセプションが開催され、教師、医師、商人の日本代表団が参加し、茶道と生け花のデモンストレーションが行われました。

青少年の交換は、文化外交の重要な部分です。相手の国と人の永続的な関係、愛と尊敬が最も効果的に生まれます。これらのイベントの参加者は、相手国に対する視野を広げ、二国間の友好関係を常に支える準備ができています。

2018年に、日本人学生をホストした子供たちは日本に旅行し、岡山県の姉妹都市の間で国際交流が行われました。子供たちは姉妹都市の文化だけでなく、他の未知の国の文化や習慣にも触れることができ、将来、異なる都市と姉妹関係を結ぶ機会が開かれます。

2019年にも交流が行われ、岡山県からの学生グループがプロブディフに到着し、その年の後半にプロブディフの学生が姉妹都市に向けて出発しました。次の3年間は、パンデミックの状況により交流が制限され、オンライン環境ですが、若者の文化的および教育的交流が引き続き行われました。

異なる国の人々が、永続的な絆を形成するためには、このようなイベントや交流は、非常に重要です。私は、将来、「ブルガリア人が日本文化を」、「日本人がブルガリア文化」を学べる文化交流やイベントを企画する機関で働きたいと思っています。

❖「優秀な日本語教師」を夢見ている！
～十代の頃、日本語を学ぶ夢を諦めかけたが……～

ケニア❋ウェリケ・イヴォン（中国の英語教育学校（オンライン）の英語教師　46歳）

子供の頃、私は「Japan Video Topics」というテレビ番組を通じて「日本」と出会い、日本に対する興味を持ちました。箸で食べる人々を見たり、広島の歴史を学んだり、富士山を見たりすることが私の日本文化や言語についての意欲と探究心をかきたてました。

十代の頃、ジェームズ・クラベルの小説『将軍』を読んで、鮮やかな日本文化と歴史に引き込まれました。優雅なマリコやジョン・ブラックソーンの日本での冒険、そして武士たちに魅了され、夜通し読み続けるほどの興奮を覚え、日本に関するあらゆることを学びたい、と思いました。しかし、当時のケニアにはスマートフォンアプリや辞書、言語クラスなどの学習環境がなく、日本語を学ぶ夢を諦めかけていました。

エガートン大学で秘書のインターンとして働いていた時、日本語の先生を紹介され、3回の無料レッスンを受けました。その後、プログラムが中止されました。しかし、先生から「日本語を教えるのを手伝ってほしい」と頼まれ、日本語を教えていたので、独学で勉強を続けました。日本語は学びにくい言語、と聞いていましたが、夢中になりました。

そして、ケニアの日本大使館に手紙を書いて、「日本語を教えるためのトレーニングを受けたい」と伝えました。すると、大使館の人と、前の先生（当時ケニアは不安があったので、日本に帰国）が、教師養成プログラムに申し込

むよう勧めてくれました。おかげで、国際交流基金の埼玉県の機関で、２０１２年９月から６カ月、トレーニングを受けることができました。日本を訪れるという幼い頃の夢を実現することができました。日本文化の多くの側面が面白く、考えさせられるものでした。

しかし、帰国したら、悲しいことに、エガートン大学の日本語プログラムはありませんでした。私は、現在、ケニア日本語教師会の秘書として、ケニアでの日本語学習をサポートするために全力を尽くしています。日本大使館が開いている「日本語能力試験・Ｎ３以上の興味のある人」の無料レッスンに、週１回・２時間のクラスに通っています。日本語の美しさとシンプルさが大好きです。ひらがな、カタカナ、漢字は、それぞれ独特の美しさがあります。

私が日本語を学び始めた時、「よし、やれやれ、ええと、ねええ」などの間投詞は新鮮でした。正しく使うことに慣れるまで時間がかかりましたが、今では「ねええ」を使うのが大好きです。

日本のことわざや表現も魅力的です。私のお気に入りの一つは、何かを強く望むことを表す「喉から手が出る」です。また、「七転び八起き」は、困難に直面した時に、粘り強さを伝えるメッセージを持っています。さらに、「猫の手も借りたい」という言葉は、とても面白い。「お腹がぺこぺこです」という表現は、空腹時の音を表したように聞こえます。日本の音楽も私の日本語学習の重要な部分です。〈アンジェラ・アキ〉の「手紙」は私の心を打った。そして、〈いきものがかり〉の「ＳＡＫＵＲＡ」と「ＹＥＬＬ」は私の絶対的なお気に入りです。

日本語学習という素晴らしい経験を通して、言語や文化の美しさを感じ、自分の世界を広げ、素晴らしい友達を作ることができました。いつか、優秀な日本語教師になれることを夢見ています。

❖私は日本が好きになれて幸せです。
～大学2年生のとき、運が向いてきたと思いました～

ナイジェリア＊アカンビ・エスター・オルワフェランミ（アブジャ大学　24歳）

大学時代、私は日本映画、特にアニメを見るのが好きでした。しかし、最も不満なのは、映画の中には字幕がないものがあり、何が起こっているのか、理解するために画面を見つめるだけしかできなかったことです。しかし、大学2年生のとき、私は運が向いてきたと思いました。

「奨学金をもらって日本に留学したことのあるナイジェリア人」の講師の一人が、日本での生活について簡単な話をしてくれたのです。財布を4回もなくしたのに、いつも、警察署から電話がかかってきて、財布を取りに行った、という話でした。授業が終わった後、私は彼に「私も日本に行きたい」と伝えました。そして、「日本文化クラブ」を紹介してもらいました。そこは、首都・アブジャにある日本大使館とアブジャ大学の組織で、日本語や日本文化について学び始めました。

日本文化部の中野美緒先生は、私が実際に会う初めての日本人でした。彼女の魅力的なところは、ホスピタリティと礼儀正しさです。何キロも車を運転して教えに来てくれて、十分な材料を用意して、日本料理の作り方や食べ方を教えてくれました。彼女はとても親切で、フレンドリーだったので、私はすぐに日本文化クラブでのすべてのことに対してとても熱心になりました。私はいつも黒人以外の人に近づくのが怖かったです。白

人は私たち黒人が嫌いだという印象とメンタリティで育ってきたからです。しかし、中野先生は私が持っているその固定観念と誤解を解いてくれました。

「ひらがな」と「カタカナ」の勉強を始めたとき、「難しい、できない」と思いましたが、十分な教材を使って、2カ月でマスターできました！　しかし、「漢字」は時間が掛かりましたが、自分の進歩に満足しています。「日本語」は、私にとって、とても楽しいものです。アルファベットや数字を、「歌にして」覚えました。私は歌が大好きなので、趣味と日本語を結びつけることができて本当に嬉しいです。日本語の難しさは分かっていますが、中野先生とその後に来られた森田光昭先生も、より楽しく、より分かりやすく教えてくださいました。

私は、国際関係の一翼を担い始めていることを嬉しく思っています。

ナイジェリアの人々は、日本についてもっと知りたいと切望していますし、日本の文化にも興味を持っています。私は、日本や日本語について質問するために、多くの不特定多数の人から声をかけられました。日本語を学び、話す外国人の数は日々増えていますが、私の国の人々もその一員であることを嬉しく思っています。

私は自然保護主義者で、自然を愛しています。日本の自然は、私が日本に惹かれた理由の一つです。奨学金をもらって、日本の大学で修士号や博士号を取得し、自分のキャリアで成功したいです。

私の有名な日本のことわざは、先生が最初に教えてくれたことわざです。「七転び八起き」です。私はいつもこのことわざを使って、どんなにつまずいたとしても、粘り強くやれば最後には必ず勝てる、と自分を鼓舞しています。

私は日本が好きになれて幸せです。

❖約7年、独学で日本語を勉強し続けた
～日本の大学でエンジニアの勉強を続けたい～

南アフリカ❋クザニ・マベナ（ツワネ工科大学大学院生　28歳）

私が「日本語を勉強し、日本に魅了される旅」は、7年前、静かに部屋に座って自分自身と深い会話をしている時に始まりました。２０１７年、部屋に静かに座っていると、頭の中で、「日本語を勉強して日本でエンジニアとして働きなさい」と言う〝柔らかく優しい声〟が聞こえた気がした。

ためらうことなく、わくわくしながら、日本の文化、宗教、教育制度、技術革新などについて調べ、一人で日本語を学び始めました。「日本に引っ越して、日本での生活を直接体験する」というアイデアに興奮していましたが、多くの課題に直面していました。

一つ目は、基本的な日本語を話すことができること。二つ目は、日本語学校に入学するお金が必要になること、です。当時、私はまだ大学で工学を学んでいましたが、語学学校で日本語を勉強するお金がありませんでしたので、独学で日本語を学び始めることにしました。

それから、日本語の本を読んだり、日本語でニュースを見たり、ランゲージエクスチェンジ・アプリを使ってオンラインで日本人の友達を作ったり、日本の映画を見たり、日本の音楽を聴いたり、その他たくさんのことを始めました。

何年にもわたって勉強し、私の日本語は少しずつ上手になり、日本人の友達と日本語で快適にチャットできるようになりました。日本語を独学で勉強するのは簡単ではなく、諦めたいと思うこともたくさんありました。しかし、エンジニアとして日本で働くという目標を達成するために決心、頑張りました。

「日本語は世界で三番目に難しい言語」と知られていますが、それを知っていながら、7年以上、独学で日本語を勉強し続けました。私はまだ日本語がペラペラではありませんが、将来はそうなる自信があります。

日本の音楽を難なく聞いたりできるようになるなど、日本語がペラペラになってからやりたいことがたくさんあります。

日本語を勉強する旅の中で、日本語の勉強を手伝ってくれたり、英語の勉強も手伝ってくれた多くの日本人に出会いました。最初は言語パートナーとしてスタートし、ゆっくりと、友達になっていきました。今日までＬＩＮＥとＩｎｓｔａｇｒａｍで5年以上のお付き合いの人もいます。

私はまだ日本に行ったことがありませんが、日本人と一緒に、たくさんのビデオ通話をして、将来日本で会って、楽しい時間を過ごすことについて、いろいろ話し合っています。

私の好きな日本のことわざは「継続は力なり」です。

数年前、アメリカ・フロリダ州のバレンシアカレッジでロボット工学を学び、現在は南アフリカの大学院で電気工学を学んでいます。日本の大学でエンジニアの勉強を続けたい。そして、日本に住み、エンジニアとして働くことが目標です。

海外で日本語を学ぶ若者たち①

ポーランド=ワルシャワ日本語学校（坂本龍太朗先生）

タイ=ウボンラチャタニー大学日本語学科（運寿純平先生）

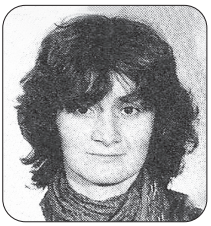
中国=大連海事大学（陶金先生）

第三章

第1回～第25回
（1989年～2020年）までの
「入賞作文」から20編（17カ国）

1989年
❖「外国との共通性」に目を向けて

フランス❄ノエスモエン・イザベル（立教大学）



三年ほど前のことです。私はある日本人の先生から、「あるラジオ番組が捕鯨についての外国人の意見を聞きたがっているので、何か話してくれませんか」と言われました。私は、捕鯨についてあまり大したことをいう自信もないので、断ろうかとも考えました。しかし、先生から「別に強い反対意見でなくてもいいから」と強く勧められ、呼び集めた三人の友人たちといっしょにインタビューに応じることにした。

しかし、数日後にその番組を聞いた時、私は驚きと怒りを禁じ得ませんでした。

私たち四人のうち、捕鯨反対の意見を述べたのは一人だったのに、他の三人の意見が正しく紹介されず、まるで全員が反対意見であるかのように伝えられた。そして、その番組の結論は、「やっぱり外国人には、日本人のことはわからない」というようにまとめられてしまいました。

もちろん、このようなことは極端な例かもしれません。しかし私は、いろいろ考えさせられました。特に考えたのは、日本の「国際化」とか、「国際人の養成」ということが叫ばれています。

しかし、実際の生活のなかでは、その「国際化」に逆行しているとしか思えないことにしばしば出会います。

日本人は外国人と比べて自分たちの違いをあまりに強調しすぎる、と思います。もちろん日本にはいろいろな特殊な側面もあります。たとえ外国から採り入れたことでも、日本独特の特色を備えるようになったものもあります。柳田国男の研究をとおして、日本にある様々な習慣や風習を見てきた私には、よくわかるつもりです。

しかし、そうした日本独自の文化・伝統の豊かさを尊重することと、その独自性だけを一面的に強調することとは別だと思うのです。ラジオ番組の例にみられるように、日本人は自分たちの独自性・特殊性に対して意識過剰のように思われます。そして、「外国人に日本人のことがわかるはずがない」と思い込んでいるようです。私にはむしろ、日本の独自性ばかり強調しがちな人たちが本当に日本のことを正しく理解しているのかどうか、疑問に思われます。ステレオタイプ化された「日本らしさ」をイメージしているだけのような気がします。

また、しばしば強調される日本人の一体性＝同質性ということにも疑問を感じます。日本の各地を訪ねてみた私の経験からも、各地方の歴史はかなり多様だし個性的だと感じます。

このように考えると結局、多くの日本人は日本をよく知らないと言わざるを得ないのです。ソクラテスの「汝自身を知れ」という言葉を思い出します。日本の独自性だけでなく外国との共通性にも目を向け、他方で、日本の中の多様性にも正しく目を向けることによって、自国の理解がもっと深まるに違いありません。そうすれば、外国人とのコミュニケーションももっとスムーズになり、相互理解も広がると思います。そして、それこそが真の「国際化」につながると私は確信します。このような認識が多くの人々に広まることを期待します。

1989年

❖「違いを認め合う」ことが国際交流の第一歩

アルゼンチン❋ガブリエル・フェラーリス（天理大学）

日本人の望んでいる国際交流とはどういうものでしょうか。日本人は今までの国際交流への道は正しい、と思っているかもしれないけれど、外国人である私から見れば、今までのやり方ではうまくいかないと思います。何が足りないのでしょうか。まず、言葉の問題があると思います。私は「英語」という言葉が日本の社会で想像以上に大切な役割を持っていることに驚きました。日本人にとっては、暗記した英語の単語の数や文法を覚えていることが非常に大切なようです。

しかし、私は、そんなことより言葉を使えるかどうかがずっと大事だと思います。けれども、いくら使うことが大事だと言っても、日本語の中の外来語をそのまま使える訳ではありません。例えば、テニスの練習の時など、大きな声で「ファイト」とさけぶ学生が多いのですが、「ファイト」というのは「けんかする」を意味する言葉です。私は、初めてそれを聞いた時、日本人はそんなに、けんかが好きなのかと思ってしまいました。

若い人は、会話の時に英語の語彙を使いすぎるような感じがします。一日に何度、ラッキーやナイスという言葉を耳にするかわかりません。これは英語でありながら、カタカナによってマジックのように日本語になってしまいました。私は、このような英語の言葉は日本人の欧米に対する憧れからではないかという気がします。

日本製のTシャツやトレーナーにも英語が書いてあり、歌謡曲にも英語の言葉が数多く出てきます。また、髪を金髪に染めたり、パンクやヘビーメタルの格好をした日本人を都会では見かけます。私は、その人たちを初めて見た時にハーフだと思って、声をかけたら、上手な関西弁が返ってきました。日本人は外国人のまねをする傾向が強いと思います。

私の国では、外国人と一緒に生活することになったら、親しくなるに従って、その人の気持ちをわかろうと努力します。しかし、日本人は、外国人と親しくなっても、文化の壁を壊す努力もせず、いつまでも「外国人」として扱います。

私は、外国人は鼻が高くても、皮膚の色が違っても、同じ人間として認めて頂きたいと思います。この世界には、様々な国があって、そこにはそれぞれ特徴のある生活、文化があります。もし、すべてが同じような生活、文化であったら、どんなにつまらない世界になるでしょう。

私は、お互いの違いを認めることが大切だと思います。違う考え方があっても、お互いの助け合いや心と心の理解から、日本人の望んでいる国際交流が始まると思います。道で外国人に会っても、逃げたりせずに、話をすることから国際交流の第一歩が始まるでしょう。日本人だけしか日本の事は理解できない、というような考え方をやめて、もっと心をオープンにして、外国人と一生続く友情を育ててみませんか。

1989年
❖「ニンニク風のおつき合い」を

インドネシア ❊ ハニイ・ウイジャヤ（北海道大学）

ニンニクはお好きですか？「あんまり」、「臭くて……」という方がおおいでしょう。でもニンニクは世界何十カ国の、何千何百というお料理をおいしくしているもとですし、またさまざまな薬効も持っています。そう、近頃ブームの機能性食品の一つで、昔からいろいろと利用されてきました。

日本へ来て四年が過ぎましたが、本当の友人と呼べる人は、指で数えられるほどしかいません。どうしてでしょう？　お会いした方々はどなたも皆、優しく親切で気楽でした。それなのに、本当に親しくなれる人がこんなに少ないなんて、他の留学生からもよく、同じような話を耳にします。

日本の皆さんは、私たち外国人をとても大事にして下さいます。大変嬉しいのですが、逆に言うと「お客」としてしか見てもらえないさびしさを感じます。とても礼儀正しく丁寧に接してくれますが、ありのままの自分はなかなか見せてもらえません。だからいつまでたっても、通りいっぺんのおつき合いで終わってしまう。残念なことです。

それから、日本人の優しい心の中には、常に相手の気持ちを思いやる気持ちがあるようです。自分は少しが

まんをしても相手が喜んでくれればそれが一番、という考え方です。これはもちろんとても良いこと、すてきなことで、私も出来れば見習いたいものです。ところがこの思いが強すぎて、相手の気持ちを傷つけるかもしれないと心配するあまり、必要以上に神経を使ったり、余計な気をまわしたり、すっかり疲れてしまうのは当然です。やがて会うこと自体がわずらわしくなっても、何の不思議もありません。できれば、会うことを避けたくなるでしょう。すると今度は、避けていることが相手にわかってしまうのでは、と心配になったりして、こんなことなら、いっそ他人のままでいる方がましですよね。

相手によく思われたいという気持ちは自然ですし、相手の心を傷つけないようにする心使いは大切ですが、くたびれてしまっては何にもならないし、本当の友情を求めるなら、それだけでは済まないでしょう。人と人とがつき合うのですから、傷つけたり傷つけられたりするのは、やむを得ないと思います。ある程度傷つけられたりしながら、お互いの本当の気持ちを理解し合い、認め合ってゆくものではないでしょうか。

正直で率直で気楽なつき合い。個人どうしの交流はそこから生まれ、それが国と国との交流のための確かな懸け橋になってゆくのだと思います。

ニンニクは傷をつけなければたいして臭いません。でもそれではお料理には役立たない。傷をつけると、あの強烈な臭いが出てくるけれど、料理の味をグンと引き立て、健康をも増進してくれます。傷をつけると「臭いけどおいしくなる」ニンニク。では、「トラブルもあるけど仲良くなれる」ニンニク風のおつき合いはいかがでしょう。エスニック料理もはやっていることですし……。

1989年

❖交流は「一方通行」ではいけません！

バングラデシュ❋サイド・サムスディン・アハメド（長崎大学）

日本に来て、いろいろなことを見たり、学んだり、体験したりして、まるで新しい世界を発見したような感じになりました。そして、こどもの時の印象と現実には大きなずれがあることが分かりました。

現在、「文化交流」、「友好」、「親善」などの言葉が世の中にあふれています。これらの前提条件になっている「相互理解」について、まず考えなければなりません。

しかし、この「相互理解」ということは、現実には、きわめて難しいことです。また、「理解」できたとしても、時によっては、それはすごく「身勝手な理解」で、自分にだけ都合の良い「理解」になって、本来の「相互理解」は忘れられがちです。

人間はとかく、自分たちの生活、風俗習慣、文化などを基準にして、他のものを推し量ろうとします。むしろ、それは当たり前のことですが、この世の中に存在しているのは「自分だけ」でなく、他人もいることも忘れてはなりません。それをしっかり認識して行動することは、人間社会にとって不可欠です。

たとえば、さまざまな国の人々が日本に来て、日本人が生の魚を食べたり、集団でお風呂に入ったりするのを見て、驚く人が多いかもしれません。それは、その人々の従来の生活の中でまったく考えられない出来事で

あり、また、そういった習慣が日本人の生活の一部であるということを知らないからではないかと思います。しかし、そのことに驚いてもいいけれど、自分の国と日本の国とでは生活のあり方は違う点もあるだろうということも理解しなければなりません。

もちろん、自分の風俗、習慣、価値観などを捨てる必要はないけれど、日本にいる間は、日本のそれとぶつからないように、日本の社会秩序を乱さないように、日本社会のあり方を尊重しなければなりません。

もう一例をあげます。酒は、「酒は百薬の長」という言葉があるように、日本人の生活の中で重要な役割を果たしています。ところが、イスラム社会ではアルコール類は、いかなる場合にも、一切禁じられています。そこで、問題は、酒の善悪ではなく、生活様式や文化の違いがあるということです。どちらがいいか、悪いか、という結論は出ません。違いがあるということだけは知っておかなければなりません。

交流とは、いったい何でしょうか。交流とは、「人と人との付き合いで、互いの経験や考え方を交換できることが基本です。そして、打算ぬきで、仲間や隣人と同じように心からのお付き合いができる」ことです。しかし、現実には、なかなかうまくできていません。

交流は一方通行であってはならず、「交流」という言葉の奥には、「相互」という意味が含まれています。

本当の「交流」に必要なのは、当事者の素直な気持ちと決意です。

1992年
❖中日は、「友好のシンボル」が要らない仲に！

中国 ❀ 高媛（吉林大学）

僕はユウユウだ。東京の上野動物園に住むパンダの家族の一員だ。最近、ある新聞社のインタビューを受けた。「二十一世紀に向けて、日中友好のシンボルとして、何か一言」と。「なに？　二十一世紀になっても、我が家族がシンボルになり続けるのか……」と僕は丸い目を一層丸くした。

僕はシンボルになることがとても幸せだと思う。毎日熱気むんむんの見物人を相手にしたり、エアコン付きの部屋で寝転んだり出来るような上野動物園の生活のおかげで、僕はずいぶんふとってきた。でも、僕には悩むことがある。人間が我が家族に名づけてくれたこの「友好のシンボル」とは一体何だろう。僕たちはただ大自然の中で人間と同じように生きている一動物にすぎない。「友好のシンボル」と見なされているのは恐縮千万。僕たちの社会では、友好とか、親善とかはみんな口で言い合うものではない。気持ちさえあれば、口に出さなくても、表情や行動で心を伝えることが出来る。その点が人間とは違うのだね。

先日、退屈しのぎに雑誌をぱらぱらめくっていたら、ある記事が目に入った。それは日本に滞在している中国人の多くは自分にパンダというニックネームをつけ、日本の社会で外国人だと区別され、敬遠されていることをこぼした内容の記事だった。それを読んで、僕は思わず涙ぐみ、我が家族が中日友好のシンボルになって早くも二十年の歳月が経った今、中日友好の道がまだまだ遠いものだとつくづく感じた。

「友好のシンボルとは一体何だろう?」。僕たちのような表面だけにとどまるシンボルはどうしても必要なのだ

ろうか。結局、シンボルが必要なのは人間だ。その人間同士の間はまだ他人であり、心と心は溶け合わず、人間としてのふれあいがまだ足りないことを示していると何とかいう哲学者が言っている。僕の意見と一致しているね。僕はもし人間だったら、すぐれた哲学者になるだろう。そして、シンボルのかわりに、有識者の一人として中日友好のために具体的な貢献が出来るだろう。

中国といい、日本といい、二十一世紀に直面すべき共同の課題は一つである。それは国際社会が進んでいく中で、人間性がだんだん薄らいで来ることにどうやって対応出来るかということだ。僕の答えは、人間性というのは、国境や民族などを越える人間の基本的な感情だから、人間性を豊かにするには、文化交流などの「草の根の交流」がどうしても必要だ。「ほんの一滴の水でも偉大な太陽の光を反射することが出来る」と僕はよく人間の口から聞かされる。文通とか、ホームステイとか、作文コンクール、論文募集など、小さな工夫、小さな努力が、お互いに本音で話し合えるのに大きな役割を果たす。そうした小さな交流が深まれば深まるほど、心と心が開きあい、肌でお互いの文化と民族性を感じ取れるようになるだろう。

中日両国はお互いに偏見や誤解をきれいに捨てて、もっと包容し合い、理解し合い、手を携えて、一緒に人間性豊かな二十一世紀を目指すように頑張っていったらと僕は心から願っている。

人間の口調をえらそうに真似て、僕はインタビューを終わった。エアコン付きの部屋に戻った途端、僕はホームシックに襲われたような気がした。二十一世紀の中国と日本が仲の良い兄弟姉妹のように以心伝心で交流出来るようになれば、もうシンボルも要らないだろう。僕もその時ひさしぶりに四川省の山に帰って、思いきりコロコロ転がったり、楽しい夢を見たり、静かな老後生活が送られるだろう。楽しみだ！

1998年
❖もし、「日本語」を勉強しなかったら……

中国 ❖ 李錦成（遼寧師範大学）

二ヶ月前から、私はバイトで、外国語専門学校で、初級、中級の人たちに日本語を教えることになった。ある日、クラスの張という学生に「先生はなぜ日本語を勉強することになったんですか」と聞かれて、私はいつものように「中日友好のために」と答えた。するとその学生は続けて「先生は中日友好のために何をしたんですか」。「えーと、あのう……」。私は何も言えずに顔が赤くなった。そこまで考えたことがなかったからだ。「中日友好」とよく口にしても、ただ挨拶として使ってきたのだった。

その日から、私の頭に「中日友好を深めるため、何かをするべきではないか」という問題が残った。もし日本語を勉強しなかったら、私はこんな問題を考えなくてもよかったかもしれない。しかし私にはそれは出来ない。日本語を十年余り勉強して、中日友好に力をささげている人たちに大変お世話になったから。

私たちが勉強している教室（「大森日本学習研究中心」）は日本の大森先生夫婦から贈られたもの、教材も大森先生夫婦の寄贈だ。私たちが勉強している本は日本人の先生が日本から持ってきたものだし、辞書も日本の友人がくれた。私の卒業論文は、日本の菊地先生が下さった参考書を参考にして書いている。

このことなどを、私は毎週のバイトの授業で15分ぐらい、学生たちに紹介したりした。

先週、バイト先の授業で、日本の経済、文化などを紹介していると、あの張さんが突然立ち上がって、「李先

生が中日友好のために何をしたのか分かりました。先生のおかげで、私たちは日本国と日本人に対して新しく理解することが出来ました。私のおじいさんが日本軍に殺されたので、今まで日本人はとてもいやでした。しかし、李先生のお話で考えがすっかり変わりました」と言った。この話で私は涙がこぼれるほど感動した。こんな効果が出るとは夢にも思わなかった。

実は私の日本に対しての考えも、日本人の先生、中国の日本語の先生、それから多くの知らない日本人のおかげで変わったのだ。私の祖父も日本軍に殺されたので、もし日本語を勉強しなかったら、もしこんなに、中日友好のために力をささげている人達がいなかったら、私は一生日本を恨んで、日本を正しく理解出来なかったかもしれない。

私が学生たちに客観的に日本人と日本国を教えたから、学生たちは日本に対して正しい理解が出来たのだと思う。中日友好を深めるため、教育の役割は大きいと思う。私たちは日本と中国の国民に、客観的で、正確な情報を伝えることが一番大事だ。

今でも、たくさんの中国人と日本人は正確に理解し合っていない。多くの中国人は日本を恨んでいる。しかし、日本では大森先生夫婦のような「友好の使者」がだんだん多くなっているし、中国でもたくさんの日本語教師が一生懸命働いている。

私ももっと一生懸命に日本語を勉強して、もっと多くの中国人に今の日本と日本人を紹介するつもりだ。日本語を十年余り勉強して、今年七月に大学を卒業する。卒業後は、日本語の先生になりたい。お世話になった日本の人たちに恩返しをするため。

2016年

❖「金継ぎ」は日本人の魂

……ルーマニア❋マリア・カメリア・ニッツァ（国立バベシュ・ボヨイ大学　20歳）

「心の傷」という比喩は、私たちが人生を語る上で使われ、すべての人にかかわるものです。日本の伝統技術の中には、壊れた碗や器などを金で修繕する「金継ぎ」という技術があります。私は高校生の時、インターネットで、日本の「金継ぎ」のことを知り、とても興味を持ちました。

そして、大学で日本語を学んで、より深く金継ぎという芸術を理解できるようになりました。日本人の魂は、その「金継ぎ」の芸術における美しさと明瞭さの比喩の中に見てとれます。

「金継ぎ」の芸術は真の日本の精神における本質を表していると思います。日本人の魂と「金継ぎ」の繋がりは、「永遠に続くことはなく、終わることもなく、完全でもない」という禅の三つの道義に基づき、わび・さびの概念にも繋がっています。傷を隠そうとするのではなく、修繕した跡を目立たせるのです。全ての人が時の変遷を感じるのは、器が欠けたり割れたりして、壊れてしまうのと同じです。

「金継ぎ」の本質的価値の一つは協調性であり、その協調性は、一つの作品を生み出すいくつかの手、すなわち独特な個性を維持したそれぞれの作者の存在からも見てとれます。例えば、碗において、金色の継ぎ目によっ

て強調された修復方法の見事な繊細さを通して、私たちは元々の陶磁器職人とニス塗り職人という二人の芸術家の手仕事を見出すことができます。修繕された陶器は、同時に亀裂感と時代を超える連続性を伝えます。金継ぎの芸術と人々の経験は互いに関係し合っていると私は思います。

壊れる前の脆弱性と、壊れた後の強さという二つの表現があります。人生が終わり、亀裂は人生において人が通らなければならない曲がりくねった道のようなものです。修理された陶器は我々にその教訓と美しさを教えてくれます。

私たちは、少なくとも人生に一度は敗北を経験しているか、これから経験するのです。それは避けられないものなのです。碗や湯呑みのように、私たちは自身のこぶや擦り傷に耐え抜きます。幸運にも過去は常に改善し得ます。これらの内面的な亀裂を恩恵に変える方法があります。私たちの中に隠されている光は、私たちの心と感情を溢れ出させるために解き放たれるべきなのです。私たちの世界を変える最大の力は、何がベールに隠されているかを見極める力にあります。私たちはたとえ暗闇に囲まれていたとしても、しっかりと光の中にいさえすれば、暗闇は消え去ります。その時に、私たちは癒す力を得て癒されます。私たちは新たな方法で考え、違った角度で心の傷を見るのです。

2016年

❖「世界一正直」な国

ベトナム ❊ ドン・フン・タオ（社会人　27歳）

私は、広島の日本語学校と福井県立大学の六年間の留学体験を通じて断言できるのは、日本は「世界一正直」な国ということだ。

警視庁遺失物センターの調査によれば、二〇一六年に東京都内で警察に落とし物として届けられた現金は約三十六億七千万円に達し、そのうちの七割以上が持ち主に返されたそうだ。日本人の多くが、拾ったお金をネコババせずに警察に届けていることは、多くの外国人にとっては驚くべきことだ。海外でも、日本人の正直さが称賛された。

私は小さい頃、家の近くで財布を拾ったことがある。従兄弟はそれを持ち主に返すことに反対したが、頑固な私に負けて、ようやく返すことができた。私は持ち主の笑顔を見ることが出来て、とても嬉しかったのだが、それを家族に報告すると、〝なんでお金を返したの?〟と、半ば馬鹿にしたように私を笑った。その時戸惑った私が、大人になってだんだんと気づいてきたのは、貧しい国での信頼関係というのは、何より価値がある、ということだ。落とし物が戻ってこなかったり、盗まれたりすることも珍しくないため、いつの間にか、人間同士の信頼が失われていく。

そんな他人への不信感に困惑していた私は、日本に来て衝撃を受けた。

ある日、下宿の駐輪場に戻った私は、自転車のカゴの中の小さい袋に気付いた。袋を空けてみると二千円とメモが入っていて、そこにはこう書かれてあった。「ごめんなさい。自転車をぶつけてカゴを壊してしまいました。少ないですが受け取ってください」。確かに、よく見るとプラスチック製のカゴが少し欠けていたが、黙っていればわからないくらいだった。母国ではあり得ない奇跡が起きていた。相手がいない所でも、ちゃんと責任を取るという日本人の行動は、私に大きな感動と感激を与えてくれた。そのことがきっかけとなり、私は「人間の信頼関係」について真剣に考えるようになった。

今までは、人間が正直でないのは貧しさのせいだと思い込んでいた。本当にそうだろうか。あの東日本大震災によって、私の思い込みが大きく覆された。地震発生直後、米国メディアが日本人の「精神的な回復力」を絶賛していた。災害時の「物資の略奪」などは、東日本大震災ではほとんど見られなかった。それこそが、日本人の誠実さなのだろう。

私は、「正直な心」を持つ日本人の素晴らしさを、ベトナム人に知ってもらうために努力したい。近い将来、母国に、正直な人達がいっぱいになることを願っている。

2016年

❖「四国・八十八ケ所巡り」の思い出

アメリカ❋ジェンセン・ロー（プリンストン大学　21歳）

私は大学で物理学を専攻していますが、日本語に興味を持って、趣味で勉強しています。そして、タイで生まれたので、仏教のルーツを学びたかった。「二つの興味」を実現するために、日本へ行きたいと思っていました。

去年、「Princeton Club of Japan」主催によるプログラムに参加し、二回目の「日本」を体験しました。プログラムが終わってから自由時間があったので、四国に行って「八十八ケ所巡り」をすることにしました。一ヶ月の間、四国を歩いて回りました。一人で歩きましたが、「お遍路さんは弘法大師様と同行して歩いて回ると言われています」ので、「二人で歩いて回った」ことになると思います。

香川県の弥谷寺の近くにある「俳句茶屋」でお茶をいただいたこと、徳島県で私がお腹が空いて倒れそうな時にあるおばあちゃんにパンをいただいたこと、などなど、たくさんの素敵な方々との思い出は忘れられません。なまっているおじいちゃんとおばあちゃんたちが多いので、日本語の日常会話なら問題がないはずの私には聞き取れないことが多かったです。私は、おばあちゃんたちによく「子供扱い」されました。普段、「子供扱い」

という言葉は否定的なニュアンスがありますが、四国のおばあちゃんたちにとっては、いい意味です。四国のおばあちゃんたちはあまりにも優しくて、いただいた四国のお菓子はあまりにも美味しかった。私はもちろん、「大人になりたい」という気持ちがあるが、四国に住んだら「子供に戻っても構わない」という気持ちになりました。

ところで、日本に行ったことのないアメリカ人は、「日本はどんな国だと思いますか」という質問に、「毎日お寿司を食べる国！」「ハイテクでとても綺麗な国！」「侍が忍者と戦う国！」などと答えます。私も初めはそう思っていました。しかし三年前に、友達に宮崎駿のアニメを紹介してもらって、「日本はお寿司の国だけではなく、トトロが昔から住んでいる国だ！」と思いました。

さらに、日本への発見はどんどん広がりました。

最初の訪日は二年前の夏です。石川県で「Princeton in Ishikawa」という日本語プログラムに参加し、温泉への愛を発見しました。富士山の山頂で日の出を見たり、友達と京都の伏見稲荷にも行きました。優しかったホストファミリーとは今でも手紙や年賀状のやり取りをしています。

いろいろ経験すればするほど、愛するようになってきたのが、「日本」という国、です。

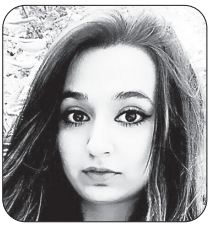
今度、日本に行った時、何を発見するだろうか？　とても楽しみだ。

今は、〈【日本】という国〉と、ずっと一緒にいたい、と思っています。

2016年

❖日本の「優しさ」を象徴する「優先席」

アゼルバイジャン＊イルヤソワ・ヒマハニム（社会人　23歳）



私は、保健省の会計士として働いていますが、アゼルバイジャン国立経済大学の時から、日本語と日本について興味があり、勉強しています。

まだ、日本へ行ったことはありませんが、動画サイトで関連するビデオを観たり、インターネットで、日本の情報を集めて、勉強しています。そして、日本の公共交通機関などにみられる「優先席」に、とても感心します。他の国に、「優先席」はありません。

優先席とは、高齢者や妊娠中の女性、身体障害者などの着席を優先させる、通常の席とは区別されている座席です。優先席のほとんどは出入り口付近に設置されていて、多くの人に公共の交通機関をより快適に、より安全に使用してもらおうという配慮からです。私は、現代の日本社会の「優しさ」を象徴するのが「優先席」だと思います。

「優先席」の対象となっている人たちは、他の人に比べると席を確保するのが困難である人たちです。そのような人たちに席をより確保しやすい状況を作るのは、誰もが暮らしやすい「社会づくり」の一環としてとても大切なことです。

そして、優先席は交通機関の安全を保護するためにも欠かせないものです。足元が不自由な人々にとって、走行中の急停車の際など、立っていると危険を伴う場合があります。他の客には影響のない揺れであっても、それによって怪我などを負う可能性があるからです。さらに、事故を未然に防止することができます。

優先席は必要ないという意見もあるそうです。全ての座席を優先席と同様に扱い、乗客は場所に限らず、いつでも必要な人に席を譲るマナーを身につけるべきだという考え方です。優先席をなくすことで、人々にそうしたマナーの向上を求めることができます。しかし、車中での携帯電話やゲーム機器の使用が増加する中、乗客の周囲へのマナーや配慮は薄くなるばかりです。周りの乗客に席を譲り合う気配りは難しいと思います。実際に、優先席であっても席を譲ろうとしない若者がいるそうです。

個人のマナーやモラルの向上は、簡単ではありません。不確定なマナーやモラルの向上を期待するのは難しいと思います。「優先席」を必要としている人々の安全を犠牲にするべきではないと思います。

「優先席」は、日本人の「優しさ」を世界に証明しました。高齢者や体の不自由な人たちだけでなく、公共の交通機関をより多くの乗客がより快適に安全に使用することができる「優先席」は素晴らしいと思います。

2016年

❖ 見習いたい「日本の平和憲法」

韓国 ❋ イ・ジュヒョン（ハンバット大学　21歳）

二〇一一年三月の東日本大震災の時、被災した日本人たちは慌てずに避難し、みんなが「秩序」を守って行動しました。そして、私はこれまで三回、いずれも、六日間ぐらい日本を旅行しました。道に迷った時、店で買い物した時など、いろいろな体験をして、「日本は秩序を守る国」、「他人に配慮する優しい人々が住んでいる国」だと思いました。

日本は、本当に平和な国です。なぜなら、日本は、韓国のように事実上「戦争中」でもないし、徴兵制度もないからです。私は軍隊で働いたことがあります。北朝鮮との悪い関係のため「戦争」の恐ろしさを肌で感じました。その恐ろしさや不安は二度と感じたくありません。

高校時代、東北アジア史の授業で先生が「日本国憲法は平和憲法です。大切ですから、しっかり勉強してください」と言いました。日本国憲法は世界唯一の平和憲法です。何よりも日本は憲法で戦争の放棄が規定されていますので、日本国憲法の平和主義を見習いたいと考えます。

日本と韓国は同じ民主主義の国で、憲法の内容はほとんど同じです。

しかし、少し違う点があります。一つ目は、日本は内閣制度、韓国は大統領制度である点です。二つ目は、一

九四六年に公布された日本国憲法は九条に「戦争の放棄」が規定されているため、平和憲法と呼ばれています。しかし、一九四八年に発表された韓国憲法は「戦争の放棄」は規定されていません。

最近、日本では、北朝鮮と中国の動きの影響を受けて、日本国憲法を改正しようとする動きがありますが、私は日本国憲法を改定しないでほしいと思います。

なぜなら、日本は自衛隊と在日米軍がありますし、世界的にみると「軍事力」はけっこう強い方です。何よりも戦争の恐ろしさを実感した私は、日本は、韓国のように戦争状況にならないようにしてほしいと思います。日本の「集団的自衛権」行使も心配です。同盟国が攻撃された時、その同盟国と一緒に反撃できる権利ですから、戦争に参加することができることを意味します。「他人に配慮する優しい人々が住んでいる日本」が、戦争でたくさんの人々が死んだり、家族や大切な物が失われることがないことを祈ります。

私は、今の日本の平和憲法を守ってほしいと願っています。

2018年

❖「自己主張力」を備えた〝勇者〟を

ベナン❋アイエドゥン・エマヌエル（大阪府立大学大学院留学生　27歳）

私はアフリカの西側にあるベナン共和国に生まれ育ちました。まだまだ発展途上の母国を背負っていけるような人材になりたい、という強い思いを抱き、高校卒業後、日本に留学しました。国にいたときの自分は、いつもわがままで、どんなときでも、まず先に自分のことばかりを考えていました。しかし、どんなときでも、「相手のことを考える日本人」が、そんな私を変えてくれました。

私は日本語の〝お疲れ様〟という言葉が日本らしく、大好きです。

〝お疲れ様〟というのはあなたのことを見ていて、どのぐらい頑張ったかを分かっていますよ、という意味だと思います。それは他の言語には珍しく、「日本人が相手を大事に思う気持ちをはっきり表している」と思います。人に迷惑をかけないように自己管理し、相手を傷付けないように婉曲的な表現を使うなど、日本では「和」を重んじるために、一歩下がって周囲に合わせることが常識とされています。

しかし、自己の意見や考えや欲求などを、遠慮せずはっきりと他人に伝えることも大切です。

私は「不思議な一人の日本人」と知り合いました。私の同級生の赤井くんの最初の印象は「男前で、とても静

かな人」です。その赤井くんが、授業のグループワークの発表で、大きな声で誰よりも積極的に質問したり、論理的に論争したり、議論の発展に貢献したとき、私はとても衝撃的でした。

日本では社会のほとんどの分野で個人の精神力、決断力、想像力の必要性よりも、むしろ周りに協調し、依存することが求められるように感じます。しかし、社会はこれからもますますグローバル化し、国際競争も厳しくなります。多様化した社会では、優秀な伝統を受け継ぐことも大切ですが、多様な価値観も必要です。特に今の日本は、赤井くんのように、個人の精神力、決断力、自己主張力を備えた〝勇者〟を必要としているのではないかと思います。

そのためには、世界に出て、違う国の文化やマナーに興味を持ち、交流の機会を増やすことだと思います。「異なる存在、異なる声」を恐れるのでなく、むしろ力に変えていけるような社会造りに取り組む必要があると思います。そうすることによって、新しいタイプの〝勇者〟が生まれ、これまで以上に、日本から国際社会に通用する優秀な人材が育つのではないでしょうか。

2018年

❖「チームワーク」を教えてくれた「日本文化」

スーダン❊バヤン・アリ（ハルツーム大学　25歳）

日本は、本当に私たちに驚きと魅力、そして愛情を感じさせてくれる国です。戦争の災難ののち再び復興し、世界の国々に劣らない文明を築き上げることができました。私は彼らから全ての人間は人生において役割を持っているということを学びました。人間の重要な役割は、社会において活動的な一員になること、そして真剣に社会の復興と成長に貢献することです。

私の母国スーダンと日本は、地理的距離があるにもかかわらず、日本は私たちの危機に立ち向かうために多くの支援をしてくれています。日本が私たちに与えてくれたすべてのことに、私たちは感謝しています。私はきっとこの関係は将来の世代にも広がると確信しています。

私は特別な経験をしました。この経験は私の人生で偉大な教訓をくれました！

私は２０１７年に、「日本の文化を紹介する文化祭」に参加しました。文化祭の日本人の責任者は非常に厳しく、そしてとても細かい人でした。その日、私は早く会場に来て、残りの参加者を待ちました。しかし、私は参加者が真剣ではないことに気付きました。そこで、私は「これはみんなの前で自分の能力と努力を示すチャ

ンスだ」と思いました。そこで、私は来たのはいいけれどやる気のない参加者の目の前で、一人で仕事をやり終え、責任者のところに行きました。責任者は私に不思議そうな表情を見せました。私は今も、彼のその表情を思い出すことができます。そして、なぜか私を参加者のもとへ連れていきました。私は責任者が何を望んでいたのか分かりませんでした。なぜ、まず私のことを褒めてくれなかったのでしょうか？

そして、彼は、私に言いました。「グループのメンバーは誰も、あなたのように、もしくは、あなた以上に働くことはできないと思いましたか？　この文化祭の目的は最良の結果を導き出すために、あなた達がみんなで一緒に働くことです。あなたは根本的に考え方を変える必要があります」。

最初に私は、責任者のことを不公平だと思いました。しかし、時間の経過とともに、私はこの経験の意義を理解することができました。「チームワーク」の大切さを教えてくれたのです。

「チームワーク」は日本文化の中心であり、成功と卓越性の理由の一つです。この日、学んだことは、今後、私の中に常にあり続けるでしょう。日本に「ありがとう！」と伝えたいです。

2018年

❖日本人は、ほんとうに無宗教なのですか？

イラン❋マヘルプル・ルヒナ（日本大学文理学部留学生　21歳）

日本人のみなさん、外国人から、日本の宗教について聞かれた事はありませんか。その時どう思いましたか？　一般的には、「無宗教」と答える方が多いようです。でも私には、日本人が無宗教だとは思えません。日本人は宗教について大変狭い意味で受け取っているからではないかと思いました。

日本人の行動は、とても宗教的だと感じます。例えば、正月になると初詣に、受験の時には合格祈願に行き、お盆の時にはお墓参りに行きます。

日本の宗教というと仏教、神道が代表的ですね。ですが、一般の日本人はこの自分たちの宗教についてどれくらい理解しているのでしょうか。

私は、初詣でお参りしている日本人の皆さんを見ると、この人たちは何と熱心な神道の信者なのだろうと思います。でもその方々に「あなたの宗教は何ですか?」と聞くと、ほとんど、「無宗教」と答えます。どうも、お祈りをしていることが宗教を信じている事に結びついていないようです。

また、日本人は宗教にこだわりがないと言われますが、でも本当にそうなのでしょうか？　日本人のほとん

どは生まれた時には神社にお宮参りに行き、結婚式はキリスト教で、そして人が死んだ時にはお寺に頼みます。これを入れ替えてみましょう。例えば、生まれた時には教会に、結婚式はお寺で、そして亡くなったら神社に、というのはどうでしょう？　考えられますか？　ほとんどの人は考えられないと思います。それが日本人の宗教的こだわりと言えるのではないでしょうか。

さらに、日本人は、無宗教と言いながら盛大にクリスマスを祝っています。でも、私たちイスラム教徒からすると、とても不思議なのです。日本人は実は宗教的な考えや、信仰を持っていると思います。でも、日本人はそれを宗教だと思っていないということです。

皆さんは街中でスカーフをしている女性の姿を見かけると、イスラム教徒だと判断なさると思います。それと同じようにお盆にお寺に墓参りに行く皆さんを見たら、仏教徒だと見る方が自然だとは思いませんか？

もし外国人から自分の宗教について聞かれた時には、「無宗教」ではなく、是非、「仏教」なり、「神道」なり、「キリスト教」なり、答えて頂きたいと思います。なぜなら、ほとんどの人が何らかの宗教を信じている外国人から見ると、宗教をもっている人の方が信頼出来ると思うからです。

2018年

❖数秒にかける相撲から学んだ「生き方」

中国 ❋ 王若瑄（淮陰師範学院　20歳）

私が初めて相撲に接したのは高校生の時でした。ある日、テレビで相撲の番組を見るきっかけがあり、その面白さと、力士たちの巨大な身体の割に、極めて柔らかな身体の動きに驚きました。それは実に不思議なスポーツの一つで、その時から相撲に興味を持つようになりました。

相撲との出会いがあったためか、大学の専門を日本語科にすることにはまったく違和感がありませんでした。昨年から日本語を学び、日本の文化により深く触れるようになってから、以前から興味を持っていた相撲についていろいろ調べることになりました。

そして、なぜ相撲がこんなに日本人に人気があるのかについて、一人の日本語学習者の立場から考えてみました。

未熟ながら私の考えは次のようです。まず、相撲は圧倒的な存在感とパワーを放つことで、観客に元気を与えます。特に私は力士がその巨大な身体をしなやかに動かし、数秒のうちに勝負を決める姿は、言葉にならない達成感と喜悦を感じます。しかも、小さな身体の力士が大きな力士に勝つことは、「日本の国」の魅力に通じ

ると思います。

次に、相撲文化は昔中国から日本に伝わったものとされていますが、日本が丁寧に相撲文化を守ってきたところが魅力的です。日本は地理的に小さな島国として、歴史や文化の面で中国を含め他国の影響を多く受けてきました。そのため日本人は、他国の良いものを積極的に吸収し、かつ常に大事にしようとする心があるのだと思います。相撲文化からは、小柄で知られる日本人が相撲からパワーをもらい、より強くなっていこうという願いがあったのではないでしょうか。

しかし、相撲の世界が大変厳しいことも知りました。力士たちは、体重を増やしながら、厳しいトレーニングを続けなければなりません。最近はモンゴルなど外国人力士が多く、彼らの大きな身体に比べると、日本人力士は優位ではありません。

私は日本人が敬う「相撲の心」を持った横綱の競技が見たいです。日本語を勉強し始めて一年、相撲のパワフルで勝利のために戦い続ける精神は、常に私を元気付けてくれます。「数秒のために全力で邁進する相撲の精神」から、私は「生き方」を学びました。

2019年
❖「広島の夕焼け」に「平和」を想う

……ベトナム❋チャン・トゥー・チャン（名古屋大学学生交流課留学生支援係　28歳）

中学校時代、私は歴史の授業で「第二次世界大戦、日本の広島と長崎に原爆投下されました」と覚えました。被害の数字も教科書にありましたが、当時の幼い私は、戦争の悲しさを想像できませんでした。

その後、友人の誘いでボランティアを始め、障害者支援をしていく中で、戦争時代にベトナムでアメリカ軍が枯葉剤を散布し、その影響で障害を持った子供が今までも続々と生まれたことを知り、自分の故郷に戦争の爪痕が残っていると実感しました。

そして今年の夏に日本の終戦の特集番組を見ている中で歴史の授業を思い出し、いつか、原爆の日の広島と、今の広島の姿を、自分の目で見たいと思いました。

その機会は２０１９年の10月に来ました。私は広島に行って、平和資料館に向かいました。広島の街はゆったりとした雰囲気で観光客も多かったですが、資料館に入ると、別の世界が目の前に再現されました。

なぜ人がこの被爆を体験しなければならなかったのでしょうか。私の涙が止まりませんでした。

館内を見学している中で、当時の状況を語り継いでいるボランティアの方の言葉が心に突き刺さりました。

『広島で原爆を体験した人の中で、今でも「夕焼け」を絶対見ない人がいます。広島の「夕焼け」は綺麗ですが、原爆の色を思い出させてしまう色だからです』。

帰り道で、原爆ドームを通ったとき、ふと空をみあげるとオレンジと紫が混ざっている美しい「夕焼け」が見えました。仕事終わりの方や観光客の方も足が止まり、その瞬間の写真を撮りました。私もこの美しい光景に感動しました。

しかし、その「夕焼け」を楽しむことができず、戦争の苦しみを思い出し今でも苦しむ人がいます。日本もベトナムと同じく、戦争で命を失った人や、人生の楽しみを失っている人がいます。

でも同じところで、二度と戦争がないように、平和の大切さを後世に伝えようとしている人たちがいます。日本では、戦争の一番悲惨なところに、「戦争博物館」ではなく、「平和資料館」が建てられました。単に歴史にあった戦争と被害を記録し保存するところではなく、「平和」のために、次の時代が自然の「夕焼け」の色を楽しめるために作られた場所です。

今のベトナムでは戦争の面影が経済の発展とともに薄れてきています。

私は日本と同じようにベトナムの人々がこれから戦争を決して起こしたり、戦争に参加したりしないように、一度広島におとずれて、被爆者のお話を聞いて、平和な日々を守る大切さを再び知ってほしいと思いました。

2019年

❖伝えたい！「日本人の働き方」

ミャンマー❊レイレイピュー（会社員　丸紅ネピドー出張所　32歳）

十年前、日本・静岡国際ことば学院外国語専門学校に留学し、二年間滞在したが、自分が生れ育った国の伝統、習慣、文化や考え方等と異なることにカルチャーショックを受けた。文化的衝撃というのは、母国から離れて外国で生活している誰でも体験するのは言うまでもないが、私は驚くほどカルチャーショックを受けた経験がたくさんある。

ミャンマーでは先生、親や偉い人と話す時には目上の人に敬意を表すために腕を組んで話すが、日本では腕組するのは礼儀正しくないとか、日本のお坊さんは結婚できる等の文化である。何にも増して一番驚き、そして、尊敬したのが「日本人の働き方」だ。

それはサークルKというコンビニでアルバイトをしたときのことだ。最初の時、作業内容とやり方が全然分からなかった私に対して、副店長が優しく丁寧に色々教えてくれた。お店の品物の前出し、フェイスアップ（商品を整える作業）、先入れ先出し、棚割り等の売場管理、接客態度やマナーから売場の整理整頓まで徹底的に教えてくれた。しかも、副店長の彼女は一方的に教えたりやらせたりしているのではなく、彼女自身も一生懸命に働く人だった。それらの作業が終わって手が空いてたとき、「今から一番大事な作業のやり方を教えるよ」と言

われた。一番大事ってどんなことかな？　と思っていたら、それはトイレの掃除だった。母国で家族と一緒だった頃は、自分のお皿さえ洗わなかった私が今皆が使うトイレの掃除をさせられた直後は、涙が溢れてくる程嫌だった。

ある日、副店長が病欠して、彼女の代わりに日本人一人が出勤した。その人は一度もお店に来たことはないがお店の作業を効率よくこなしていた。接客態度も誰より上手くて、お辞儀も上手だし、トイレ掃除をする時まで笑顔でちゃんとやる人だった。その人の働き方を見て、すごく気になったので先輩に聞いてみたら社長だと分かって、また、ショックを受けた。社長なのにバイト店員と同じ制服を着て、同じ作業を行って、トイレ掃除まで嫌な顔一つもせず頑張っている姿に心が奪われ、頭を下げた。

私の国では、社長が掃除するどころか、社員さえ自分が担当している仕事ではないと無責任・無関係で一切協力しようとしない。その上、雇用者と従業員を差別したり、偉そうに振る舞う人が多い。日本のバイト先のその社長は、トイレ掃除が嫌だった私の気持ちを変え、責任感や「働く」ことの本質的な価値を教えてくれた。

私を照らしてくれた光、でもある日本での留学生時代の体験を、ミャンマーの人たちに伝えるように努力している。これからも、多くのミャンマー人が「日本人の働き方」を学んで、国がさらに発展することを願っている。

2019年

❖ 小学校で「日本語」を教える「誇りと責任」

ポーランド ❄ ツァバ・ユリア（小学校教師　ワルシャワ日本語学校　27歳）

私は、2009年から、ワルシャワ大学で日本語を勉強しました。

日本が私にとって「不思議な国」だったことが日本語を勉強したきっかけですが、入学してからすぐ茶道、書道などに興味を持ち、日本語と日本の文化の素晴らしさを実感し、日本学科でよかったとすぐ確信しました。

2013年から1年2カ月、東京都・昭和女子大学と大阪府・大阪大学に短期留学し、過去8年間、9歳～70歳までのポーランド人に日本語を教えてきましたが、今年、公立小学校の教壇に立つことになりました。私はその小学校で学んだ教育の神髄について日本の皆さんにお伝えしたい。

そこは、「ポーランド・シベリア孤児記念小学校」。シベリア孤児とは約100年前に日本によって救われた765名のシベリアにいたポーランド孤児たちのことです。そのため小学校として、日本への関心はひときわ高く、ポーランドと日本の国交樹立100周年の今年、一年生と四年生が、日本語を必須科目として学ぶことになりました。

私は今、ポーランド人史上初めて公立小学生の子どもが日本語を必須科目として学ぶ現場で、感謝、誇り、責

任を日々感じています。子どもたちが日本語を学んでくれることへの感謝。両国をつなぐ仕事に携わるという誇り。そして無垢な子どもに正しく日本を伝えなければならない責任だ。

その小学校の教育内容も日本の皆さんにお伝えしたい。シベリア孤児記念小学校では日本語だけでなく、日本文化や両国の歴史を読み聞かせ、折り紙、空手などの授業がある。シベリア孤児の歴史を学ぶ中で、先生は子どもたちに、「自由というものは求めずして手に入れるものではない」ことを伝えている。

また、自由を得るためには同時に責任も負うことだと教える。その責任とは他人・学校さらに地域社会・国・世界に対する責任です。

これまで、教育の神髄について深く考えたことはなかった。民間の日本語学校では、初めから誰もが意欲と目的を持っているが、小学校では、なぜ日本文化や日本語を学ぶ価値があるのか、子どもたちに将来の選択肢がどう広がるのか、も考えさせなければならない。それをどう伝えるか、日々格闘する中で、私自身が子どもたち以上に教師としての成長を感じ、感謝の気持ちがふくらんでくる。

子どもたちは、日本とのつながりを誇りに感じながら学ぶことの価値を、日々教えられている。

ポーランドは何度も国土を奪われたが、そのたびに立ち上がり、祖国を勝ち取ってきた国だ。小学校での日本語教育に携わるようになった私は、将来、両国の橋渡しとなる人材を育成することを日本の皆さんに約束する。

2019年

❖広めたい、日本の「ありがとう文化」

カンボジア❋チャエム・ソンレン（カンボジア日本技術大学　24歳）

感謝のことばを言うのは国や文化によって異なっていると思います。

日本は「感謝の国」だとよく言われています。日本人はどんな小さなことでも感謝の気持ちを忘れずに、何かを助けてもらったらいつも相手に「ありがとう」と言います。カンボジアは日本と違って、「ありがとう」という言葉をあまり耳にしていません。特に家族や親しい友達の間で「ありがとう」というのをほとんど言いません。私は日本語を勉強して日本語の中で一番尊敬しているのは感謝の気持ちを表す表現が豊かなことです。

「ありがとう」の気持ちを忘れずに相手に伝える必要性は、どこの国でも親が子供に言って聞かせますが、日本の日常生活にある豊かな「ありがとう」という感謝の気持ちを表現するのは他の国と異なっていると思います。日本語には感謝の気持ちを表すために、たくさんの言い方があって、日本語学習者にとって習得するには大変かもしれませんが、それは日本語の特徴の一つだと思います。

わたしは２０１６年から２０１７年にかけて一年間日本の宇都宮大学（栃木県）に留学しました。日本・留学の一番の目標は日本語を上手に話すことです。日本語が上手に話せるように、日本語を練習するため、スーパー

でアルバイトを始めました。スーパーのレジの仕事でした。

アルバイトをしていた時一番気になったことは、日本人が私に感謝の言葉を言ってくれたことです。ほとんどのお客さんは会計が終わってからいつもやさしく「ありがとう」と言ってくれました。カンボジアではお客さんから店員に感謝の気持ちを表すことはあまり見たことがありません。そして、「どうも、ありがとう」を聞いてから、日本のサービス業に興味を持ち始めました。その「どうも、ありがとう」を聞いたからこそ、「ありがとう」をなかなか言えない私が身の周りの人にもよく「ありがとう」を言えるようになったのです。これからカンボジアで日本の「ありがとう文化」を広めていきたいと思っています。

日本人は人だけではなく、どんなものに対しても、感謝の気持ちを抱いています。

ご飯を食べる前に「いただきます」と言います。「ありがとう」という気持ちを持つことが大切だ、と思います。「ありがとう」とよく言ってみたら、プラスの視点で物事を見ることができると思います。

これからも日本人のお礼の心を、どの国に行っても、大切にしていきたいと思います。

2019年

❖「心の癒し」を与えてくれる茶道

……ウクライナ❋ドローシナ・アナスタシーヤ（キエフ国立言語大学6年　28歳）

日本語を学ぶ、いいえ、日本語をある程度学べる人は、たいていみんな心の奥に日本との深い繋がりを抱いていると思う。アニメや漫画だったり、歴史や文学だったり、伝統的な文化や近代文化だったり……諦めずに少しずつ上達している日本語学習の心が日本の何かと微かに光っている細くて強い糸で結び付いている。その何かが、遥か彼方にもう少し頑張ればはっきり見えるようになりそうな何かが辛いときは心を慰めてくれる。自分もあるとき、ある所に、不安の念に駆られる魂であった。志望専攻に入学できなかった上、人間関係もうまくいかず、家族のことも心配ばかりで、落ち着くことは殆どなかったのである。

しかし、子供のとき母と本屋に行ったとき、たまたま、日本の昔話の本を買って貰い、プロット（話の筋や構想）の新鮮さや面白さに夢中になった。何年かして、テレビのアニメや映画で日本の言葉を聞き、一目惚れのように、川のように流れるような音に心を打たれた。いつか必ず日本語を勉強しようと思い続けた。そして、ストレスや不満が特に多かった頃、ウクライナ日本センターで趣味として日本語を学び始めたのだ。同じ日本センターで、文化講座もあり、茶道、書道などの日本文化に触れられ、日本と日本文化に対する関心が更に深

まった。

その上、同好者に囲まれ、共通の価値観や好みを持った友人にも出会い、生きがいに満ちた生活を送るようになった。さらに、日本、日本文化、日本語を、自分の人生と深く結び付けたくて、再び大学に入り、今、日本語を専攻することになった。ウクライナ日本センターでも、諦めずに日本に関係がある様々な活動に参加している。運がよかったので、文部科学省の奨学金をもらい、日本に留学できた経験のおかげで人生が変わった。日本と日本人と日本文化の遥か彼方にある「光り輝く何か」に、幸せと安らぎを感じる毎日だ。

特に助けてくれたのは、今でも「心の癒し」を与えてくれる茶道だ。その「和・敬・清・寂」という理念や観点を変える教えには世界平和が潜んでいると思う。裏千家の千玄室大宗匠様が「一碗の茶から平和を」という思いを世に説いている。それらの人々の心を結び、自然との縁を復興させることができれば、世界がもっと美しい所になるだろう。自分の国の国民のため、前よりもっと強く日本文化、日本語の美しさ、世界を癒せるそれらに含まれるアイデアを伝えたい。

だから、日本語の教師として、茶道の先輩として、できるだけみんなに教えたいと思う。

海外で日本語を学ぶ若者たち②

トルコ=エルジェス大学

スーダン=ハルツーム大学

中国=大連工業大学（劉愛君先生）

第四章

《日本語作文コンクール》

「考え方」、「応募者の反応」、「歩み」、「応募者の国・地域」

一、「考え方」

私ども主催の《日本語作文コンクール》は、

・「世界の日本語学習者」に、「わかりやすい日本語の作文」を書く力を高めてもらう。

・「世界の日本語学習者」の「日本語作文」を多くの日本人に読んでもらい、各国・地域で日本語を勉強している人たちの「ありのままの姿と心情」を、日本人に伝える。

という二つを目的としている。

（「入賞作文集」を出版、あるいは、ＨＰで紹介）

●●●

二、応募者の反応（以下、応募者から届いたメールの一部）

グァテマラ＝ノーマンス・サガストゥメ・ハビエル・アレクサンダー（就職活動・26歳）

直してくださった作文は、間違いはありませんでした。とても読みやすくなっており、嬉しい限りです。また、自身の勉強不足のところも分かり、助かりました。

ブラジル＝フイジオ・サラ・ロンガット（言語学校のコーディネーター・31歳）

入賞しなくても、参加するだけでとても嬉しいです。帰国してから作文を書くチャンスがなかなかなかったので、今回はいいチャレンジになりました。

ケニア＝ウェリケ・イヴォン（中国の英語教育学校（オンライン）の英語教師・46歳）

この作文を完成させるのにほぼ3か月かかりました。もちろん、私は辞書を使用し、「Google translate」（翻訳）を使用しました。

ウクライナ＝リンニク・マルガリタ（東京育英日本語学院・20歳）

作文を添削をしていただきありがとうございました。日本で作文コンクールに参加し、私の気持ちを発表する機会をいただけたことにとても感謝しております。

ロシア＝ブリカ・マルガリータ（ボロネジ市「月話日本語学校」日本語教師・28歳）

私ごときの作文を高く評価していただき、嬉しい限りです。大森さんご夫妻がご訂正くださった私の『作文』は、とても読みやすくなりました。直してくださって、感謝を申し上げます。

フィリピン＝アンジェロ・モラレス（山形県東根市英語教師・43歳）

作文を直してくれて、本当にありがたいです。作文コンクールに参加するのは初めてなので、緊張して嬉しいです。こんな機会が珍しいと思いますので、参加することができて、よかったです。

三、歩み「テーマ」と「一等賞」受賞者の氏名（巻頭カラー頁、第三章参照）

・平成元年から「留学生」対象＝計5回（応募数・3、121編）

「第一回」　1989（平成元）年　テーマ「日本（日本人）のここが好き、ここが嫌い」あるいは「日本（日本人）への期待と注文」

最優秀賞・李春植（中国　岡山大学文学部・男）

「第二回」　1991（平成3）年　テーマ「日本の国際化のための提言」

優秀賞　・マリン・タナンパイ（タイ　早稲田大学文学部・女・21歳）

・劉淳方（台湾　明治大学経営学部・女・23歳）

・李明伍（中国　東京大学大学院社会学研究科・男・31歳）

・禹燦三（韓国　広島大学大学院教育社会学研究科・男・35歳）

・ケイ・グレゴリ（アメリカ　関西外国語大学・男・20歳）

・石平（中国　神戸大学大学院文化学研究科・男・29歳）　ほか5人。

「第三回」　1992（平成4）年　テーマ「二十一世紀の日本と中国の役割」

一等賞　・王頎（中国　お茶の水女子大学・女）

「第四回」　1994（平成6）年　テーマ「私にとっての日本」

最優秀賞・張華（中国　日本大学大学院・女）

「第五回」　1995（平成7）年　テーマ「戦後五十年・日本に望むこと」

優秀賞　・李妍焱（中国　東北大学大学院・女）

・平成5年から「中国の大学生」対象＝計16回（応募数・2万2、945編）

「第一回」１９９２（平成４）年　テーマ「二十一世紀の日本と中国の役割」
一等賞・高媛（吉林大学・女）

「第二回」１９９４（平成６）年　テーマ「私にとっての日本」
一等賞・高媛（吉林大学・女）
・路邈（北京第二外国語学院・女）

「第三回」１９９５（平成７）年　テーマ「戦後五十年・日本に望むこと」
一等賞・劉岩（遼寧師範大学・女）

「第四回」１９９６（平成８）年　テーマ「日本語と私」
一等賞・曽建（北京第二外国語学院大学院・男）

「第五回」１９９７（平成９）年　テーマ「日本の政府・企業に望むこと」
一等賞・王暁（北京第二外国語学院大学院・女）

「第六回」１９９８（平成10）年　テーマ「日中友好を深めるにはどうすれば良いか？」
一等賞・李桂萌（北京外国語大学・女）

「第七回」１９９９（平成11）年　テーマ「近以来の日本と中国について」
一等賞・郜楓（西安外国語学院・女）

「第八回」２０００（平成12）年　テーマ「二十一世紀を迎える日本へのメッセージ」
全体の一等賞・劉愛君（遼寧師範大学大学院・女）
中国の一等賞・李莉（北京第二外国語学院大学院・女）

（第一回・中国、韓国、台湾の大学生《日本語作文コンクール》として開催）

「第九回」　2001（平成13）年　テーマ「私と日本」
一等賞　・陶金（遼寧師範大学・女）
「第十回」　2002（平成14）年　テーマ「日本と中国の将来」
一等賞　・陶金（遼寧師範大学・女）
「第十一回」　2003（平成15）年　テーマ「日本語と私」
一等賞　・趙嵐（北京第二外国語学院大学院・女）
・石金花（洛陽外国語学院・女）
「第十二回」　2004（平成16）年　テーマ「日本語学習と私」
一等賞　・袁俊英（河南大学・女）
「第十三回」　2006（平成18）年　（第一回《中国の大学院生・日本語作文・スピーチ・討論コンテスト》として開催）
作文のテーマ「日本、あるいは日本人に言いたいこと」
スピーチ・討論のテーマ「十年後の日中関係を予測してください」
一等賞　・徐蓓（北京大学大学院・女）
「第十四回」　2007（平成19）年　（第二回《中国の大学院生・日本語作文・スピーチ・討論コンテスト》として開催）
テーマ「日本と中国の、これからの責任と課題」
一等賞　・李婷（大連海事大学大学院・女）
「第十五回」　2012（平成24）年　テーマ「日中の絆を深めるには？」
一等賞　・韓福艶（安陽師範学院・女）
「第十六回」　2014（平成26）年　テーマ「最新版＋改訂版　日本語教材『日本』の感想文コンテスト」
一等賞　・董亜峰（北京第二外国語学院・女）

・平成28年から「世界の日本語学習者」対象＝計5回（応募数・3万6、660編）

「第一回」　2016（平成28）年　テーマ「『日本』は、どんな国だと思いますか?」

一等賞　・シュレヤ・デイウェ（インド　プネ大学・女・20歳）

・王志博（中国　留学生・宇都宮大学大学院・男・25歳）

・ドン・フン・タオ（ベトナム　在日企業勤務・女・27歳）

「第二回」　2018（平成30）年　テーマ「『日本』、あるいは『日本人』に言いたいことは?」

一等賞　・ニコール・フェッラリオ（イタリア　カ・フォスカリ大学大学院・女・23歳）

・アイエドゥン・エマヌエル（ベナン　留学生・大阪府立大学大学院・男・27歳）

「第三回」　2019（令和元）年　テーマ「『日本のこと』で、『あなたの国』に伝えたいこと、は何ですか?」

あるいは「『あなたの国のこと』で、『日本人』に知ってもらいたいこと、は何ですか?」

一等賞　・チャン・トゥー・チャン（ベトナム　名古屋大学学生交流課留学生支援係・女・28歳）

・レイレイピュー（ミャンマー　丸紅ネピドー出張所・女・32歳）

「第四回」　2020（令和2）年　「〈俳句〉コンテスト」（俳句と30字前後の説明）

一等賞　・チョチョキン（ミャンマー　丸紅ネピドー出張所・女・35歳）

・李海（中国　貴州省貴陽市・貴州民族大学教師・男・38歳）

「第五回」　2023（令和5）年　テーマ「『日本語』と私」あるいは

「あなたの国にとって『日本』はどんな国ですか?」

◆一、二等賞の氏名は巻頭カラー頁。

三等賞、努力賞はHP（http://www.nihonwosiru.jp/）

四、応募者の国・地域

第一回〜第二十六回(通算)世界の日本語学習者《日本語作文コンクール》

92カ国・地域(太字は、「作文」を掲載した入賞者の国・地域＝49)

アジア　**中国**(香港特別行政区を含む)、**韓国**、**台湾**、**インドネシア**、**シンガポール**、**カンボジア**、**ベトナム**、**タイ**、**スリランカ**、**キルギス**、**カザフスタン**、**アゼルバイジャン**、**インド**、**ミャンマー**、**フィリピン**、**バングラデシュ**、**モンゴル**、ラオス、マレーシア、パキスタン、ネパール、ウズベキスタン、ブータン

大洋州　**オーストラリア**、**ニュージーランド**

中東　**トルコ**、**イラン**、**イスラエル**、レバノン、シリア、クウェート

ヨーロッパ　**ハンガリー**、**イタリア**、**フランス**、**ポーランド**、**ロシア**、**ブルガリア**、**ルーマニア**、**ウクライナ**、**セルビア**、**スロバキア**、イギリス、スペイン、ドイツ、スイス、フィンランド、スウェーデン、サンマリノ、リトアニア、モルドバ、ベラルーシ、クロアチア、デンマーク、ノルウェー、ベルギー、ポルトガル、チェコ

アフリカ　**エジプト**、**トーゴ**、**ケニア**、**マダガスカル**、**南アフリカ**、**スーダン**、**ナイジェリア**、**ベナン**、ガーナ、セネガル、リビア、コンゴ、エチオピア、タンザニア、モロッコ、アルジェリア

北米　**アメリカ**、カナダ

中南米　**ブラジル**、**コスタリカ**、**パラグアイ**、**ウルグアイ**、**アルゼンチン**、**グアテマラ**、**ジャマイカ**、**キューバ**、メキシコ、プエルトリコ、ペルー、コロンビア、ニカラグア、チリ、ベネズエラ、エルサルバドル、ドミニカ共和国

第五章

独自に作成・出版した《日本語教材》

約80万部寄贈→電子書籍化（巻頭カラー頁、第一章参照）

・出版、寄贈した各版の《日本語教材》
・《日本語教材》の感想と活用法

出版、寄贈した各版の《日本語教材》と電子書籍

◆35年間に、出版した各版の《日本語教材》は次の通り　（寄贈数等は、第一章参照）

一・1989（平成元）年～1997（平成9）年＝8年間
日本語学習・情報誌 季刊誌『日本』（33号まで）＝各号28頁～40頁。

二・1995（平成7）年→日本語精読教材『日本』＝206頁

三・1997（平成9）年→大学用・日本語教材『日本』＝上・387頁、下・460頁

四・2004（平成16）年→新版・日本語教材『日本』＝上・330頁、下・345頁

五・2009（平成21）年→朗読MP3付『日本』＝上・311頁、下・302頁

六・2012（平成24）年→最新版、改訂版・日本語教材『日本』＝各252頁

七・2014（平成26）年→『新日本概況』＝252頁

八・2022（令和4）年→〈【日本】という国〉＝240頁

九・2016（平成28）年以降
→「日本語教材」各版を電子書籍として無料公開（HP：http://www.nihonwosiru.jp/）

※各種、各版の「日本語教材」の出版部数、大学や日本語学校等への寄贈部数は「巻頭カラー頁」、「第一章　35年間の軌跡」参照。

《日本語教材》の「感想」と「活用法」（手紙やメール）

◆日本語学習・情報誌「季刊誌『日本』」（33号まで）

▽「日本へ行く機会のない日本語学習者の大多数が、季刊誌『日本』を通して日本の政治、経済、文化などを勉強し、理解しています。季刊誌『日本』は、新しい内容がいっぱいで、日本語を学ぶ教材、日本を知る教科書だと思います」（**中国＝吉林省・延辺教育学院、朴澤龍先生**）

▽「日本語科の学生が毎号、季刊誌『日本』を待ち望んでいます。中国の学生のために頑張っていらっしゃる大森先生ご夫妻のことを、いつも学生に話しています。学生は目を輝かしながら季刊誌『日本』を読んで、「中日友好」の将来を考えています」（**中国＝遼寧省大連市・遼寧師範大学日本語科主任、曲維先生**）

▽「手元に置いてある季刊誌『日本』を、いつも出して読んでいます。学校の授業では勉強できない日本についての知識がたくさん載っているので、大変勉強になります」（**中国＝岡山大学留学生、李振生君**）

▽「季刊誌『日本』を頂いて、本当に〝雪中に炭を贈る〟のたとえ通り、大助かりです。どう感謝してよいか分かりません」（**中国＝現代日本語学校就学生、沈伯明君**）

▽「季刊誌『日本』を百冊ありがとうございました。学生たちは、日本のいろいろなことを知るのに大変役に立つと喜んでいます」（**中国＝四川省・四川大学日語専業主任、胡徳友先生**）

▽「季刊誌『日本』から、日本語らしい日本語を身につけることができ、日本と日本人の考え方を知ることができました。学生は『日本語を勉強するのが楽しくなりました』と話しています。本当に役に立つ季刊誌で

す」（中国＝遼寧省大連市・大連管理幹部学院、権偉華先生）

▽「待ち望んでいた季刊誌『日本』は、大学の四年間で一番親しい友達でした。季刊誌『日本』は私たちが手に入れられる唯一の日本情報誌です。その中から日本の風土、人情や、最近の政治、経済まで沢山の生々しい知識を収穫できます。私たちが使っている日本語教科書は二十年前のものです。私たちは何十年前の日本しか知らないのです」（中国＝江西省南昌市・南昌大学、易婧さん）

▽「大阪大学に留学したばかりの時、アルバイトの厳しさとホームシックから、狭くて暗い下宿に帰って、毎晩のように泣いていました。気持ちを紛らわすために、大学の留学生相談室から渡された季刊誌『日本』を読み始めたのです。毎号、一気に読み終わりました。〝他郷で知己に会う〟気持ちでした。『親友に心の話をする』気持ちで、大森先生に手紙を出しました。すると、大森先生から返信を頂きました。それを読んだとたん、涙がいっぱい流れました。……『今は、冷たい冬かもしれませんが、終わらない冬はありません。必ず暖かい風が吹く時が来ますよ』と書いてありました。アルバイトの疲れも一気に吹き飛び、下宿の小さい部屋もぱっと明るくなったようでした。大森先生の手紙は、今でも忘れません。私たち留学生を理解してくれる日本人がいることにとても感激しました」

（中国＝江蘇省南京市・南京大学日本語科、羅萃萃先生。五年後に帰国、南京師範大学、南京航空航天大学などの日本語教師）

◎「季刊誌『日本』の発行があと一年で終わることを読んで、とても悲しく思いました。こんなに素晴らしい

日本語教材がなくなるのは、我々、日本語学習者にとって、とても残念です。長い間、本当にご苦労さまでした」（**インド＝神戸大学大学院博士課程、プラシット・パルデシさん**）

◎「毎回、季刊誌『日本』をお受取りした時は、感激いっぱいでなりません。大森さまご夫妻の手作りの日本語教材ですから、いつも、じっくり最初（表紙）から最後まで読むのです。私が教えている学生も、みんな、『ルビが振ってあるから助かる』と言って、喜んでくれました」（**台湾＝大学の日本語教師、劉敏先生**）

◎「私は東海大学大学院文学研究科日本文学専攻の博士課程に在籍しています。同時に、韓国の大学の兼任教授として日本語教師を兼ねています。テキストも自分で選択し、副教材も自分で工夫しなければならないのです。季刊誌『日本』は創刊号から愛読しています。これからは教え子たちにも広く読ませたいです」

（**韓国＝信興専門大学教授、申賢周先生**）

● ● ●

☆季刊誌『日本』を発行して間もなく、日本から一番遠い新疆ウイグル自治区の**烏魯木斉（ウルムチ）職業大学**の日本語教師・**石村日満子先生**から学生三十三人の手紙と写真が送られて来た。

「今使っている『日本概況』という教科書は内容がとても古いです。季刊誌『日本』をクラス全員に一冊ずつ頂きました。内容がとても豊富で、日本の政治や生活習慣や風俗や文学などが含まれています。日本を知る上で大変役立ちますみんな、「いい教科書だなぁ」と思わず言いました。中国と日本は昔から一衣帯水の隣国ですが、新疆は我が国の西北に位置し日本と一番遠い省区です。地図を見る度に新疆に住んでいる私は一衣帯水という言い方は正しくないと思いました。しかし、季刊誌『日本』を手にした時、この距離感が突然消えました。**季刊誌『日本』が内陸の新疆と遠い日本の間に虹の架け橋をかけたようです**」（三年生の**鐘響さん**）

☆北京の外交学院で日本語を教えておられた**谷川栄子先生**から「季刊誌『日本』は、漢字に読み仮名がついていて、内容も簡潔であるため、二、三年生の学生達には格好の教材で、『日本事情』という授業の中で使わせて頂いています」として、次のような具体的な活用法を知らせて頂いた。

「『日本事情』という授業は、二年生、三年生を対象に毎週一回行われています。まず、「政治」「歴史」などのテーマを決めて、その内容を簡単に説明し、中国との違いを含めディスカッションします。一方で、季刊誌『日本』を学生たちに配り、二、三週間後の授業において、私がその内容に関する質問をし、学生が答えるという形で授業を進めています。同時に、季刊誌『日本』の中で印象に残ったところをそれぞれ発表させています」

◆大学用・日本語教材『日本』（上・下）

・中国＝河南師範大学（河南省新郷市）、劉潤徳先生

中日両国人民の相互理解は言葉としては簡単ですが、実行は至難なことです。中日両国の間にまだ相互不理解と誤解がたくさんあります。

大学用日本語教材『日本』というテキストは、中国の若い世代の日本理解に大いに役立つと思います。日本の自然から歴史、政治、文学から和食のことまで、本当にいろいろなことについて、詳しく、そして、易しい文章で解説してあります。『日本』を初めて見た学生は、「一番新しい日本事情の本です」と大喜びです。まず、教師たちは『日本』を「日本概況」の教材として活用しようと相談しています。日本語の授業が豊かになると思います。心からお礼を申し上げます。

・中国＝北京第二外国語学院（北京市）、秦明吾先生

大学用日本語教材『日本』（上）を頂きまして、教師・学生ともに拝読・勉強させて頂いております。日本の歴史や文化、政治、経済、社会、教育などの面について、いろいろ知ることできるようになり、非常に喜んでおります。

また、『日本』の下巻を４６８冊もいただきまして、誠にありがたく思っております。上巻と下巻をあわせると、日本の全般を紹介していますので、日本語をよりよく勉強しながら、日本についての知識を広げるのには大いに役立つものだと皆申しております。

◆新版・日本語教材『日本』（上・下）

・中国＝黒龍江大学（黒龍江省哈尔濱市）、陳雨賢先生

今教えている学生にも日本国民に恨みを持っている学生がいます。それは歴史的な問題が主なのですが、日本国民を理解できないということもあります。大森先生ご夫妻の『日本』が、日本のことを分かりやすく紹介してくださったので、それを使って学生に紹介する自信も沸いてきます。20年、日本語教師をしていますが、一番大事なのは言葉の後ろにあるその国の文化・民族精神・歴史などを客観的に理解することだと思います。学生に日本語を通して広く日本についての教育と一緒に、社会人にも日本の国・社会・文化・歴史などについて理解してもらえるように、頑張っていきます。

・中国＝厦門大学（福建省厦門市）、林娟娟先生

２００５年にご寄贈いただいた新版日本語教材『日本』の１５０冊について、活用法をご報告致します。

① 日本語学部の教師全員に４冊ずつ渡しました。

② 優秀な学生に、コンテストなどの「賞」としてプレゼントしました。

③ 残りは、研究室と資料室に配置しました。

（前の「大学用・日本語教材『日本』」も、「日本事情」という科目の必読書として２０１２年から厦門大学の大学院入試の参考書となっております。

◆朗読ＭＰ３付・日本語教材『日本』（上・下）

・中国＝遼寧師範大学大学院（遼寧省大連市）、張園園さん

大森先生ご夫妻は日本語を勉強する中国人のために力を尽くしてくれて、とても感動しました。大学生時代に、「新版『日本』」を学んだことがあります。日本の地理、政治、経済、文化や文学などが書いてあります。役に立ち、本当に面白い本だと思いました。私は既に４年間、日本語を勉強しましたが、発音とアクセントなどがまだまだです。新しい『日本〈上〉』はＭＰ３がついています。これから、私はＭＰ３の朗読を聴きながら正しい日本語の発音も勉強したいと思います。

・中国＝大理学院（雲南省大理市）、董雲建先生

充実した内容と高度な文章に魅了され、とても勉強になっています。日本語だけではなく、日本の社会や文化などに関するものも、もっともっと勉強していかなければならないと実感しております。私にとって、この本は最高の参考資料で、大切に使わせていただきたいです。日本語を教えている者として、本当の日本をこちらの学生に伝えられるようにまず自分を磨いていきたいです。

寄贈して頂いた20冊については、日本語の先生に渡したり、日本と日本語に大変興味を持つ優秀な卒業生に1冊ずつ送ります。４冊ぐらいは今度の期末テストの成績を基に、よくできた学生に奨励品として使わせていただきます。そして、沢山の学生にも読んでもらえるように、残りの10冊は全部図書館に置きます。

◆「最新版」＋「改訂版」・日本語教材『日本』

・中国＝安陽師範学院（河南省安陽市）、韓福艶さん

「日本語教材『日本』」は、日本語学習者にとって本当に素晴らしい教材です。日本についての知識が豊富になります。私たちが使っている教材は、10年も20年も前の日本の状況ばかりです。『日本』は、私を豊かな「日本語の世界」へ連れていってくれます。

日本語を学ぶ私たちにとって、日本の社会や文化などを理解することがとても大切です。『日本』は、今の日本の真の姿を知ることができ、日本の本当の姿を深く理解することができました。範囲が広くて、日本人の生活や歴史、文化など、内容はとても豊富で、面白いです。特に『四章・自然』で、季語や年中行事についての理解が深まりました。

・中国＝西安外国語大学（陝西省西安市）、孫麗雲さん

大学で日本語を勉強する前に考えていたこと、特に中等学校から学んだ「日本に対する漠然とした歴史的反感」、そうでありながらも先進国であり、多くの自由が保障される国という「漠然とした憧れ」のようなものが、「混沌」としていましたが、「日本語教材『日本』」を読んで、今は少しずつ「落ち着いて」いくような感じです。

私が何を誤解してきたのか、何故ほかの国ではない日本に特別な思いをもっていたのか、そして、将来は日本をどのように正しく見るべきか、を悟ったのが、最も大きな収穫です。

日本語教材『日本』に出合って、本当に幸運だと思います。

◆日本語教材『新日本概況』

・中国＝南京大学（江蘇省南京市）、李雨萍さん

日本語は既に四年余り勉強してきた。日本という国に対するイメージは、「小さく、かつ不思議な色彩を帯びている島国」だった。自分が知っている日本は限られているものだとつくづく思う。外国語専門の学生にとって、自分の専攻言語を勉強する時、単に言語しか学ばないというわけにはいかない。どの国の言語を身に着けようとも、その国の社会・自然・歴史やその他様々な事柄を知ることが重要だからである。

日本語教材『新日本概況』という本は、全面的に日本という国を理解するには、とても都合のいい本だと思う。日本人の手によって編纂されたものであり、驚くほど内容が豊かであり、詳細である。伝統的なものもあれば、時代性に富んでいるものもある。東日本大震災から日本の政治・経済・・国土・歴史・自然・伝統文化・言語・行動様式・和食など、いろいろなことが詳しく、かつ分かりやすく説明している。文章も読みやすい上に、難しい単語には、ちゃんと振り仮名がつけられている。日本語の初心者にも日本を理解することができる優しい教材だ。日本語教材『新日本概況』を読むことにより、日本の真の姿を知ることができ、新しい日本を発見することもできる。とても楽しいです。

・中国＝北京第二外国語学院（北京市）、黄倩榕さん

日本語教材『新日本概況』を編集してくれましたお二人の精神に深く動かされました。、日本に関することが大体理解できるようになりました。まるで「日本指南書」のように感じられます。チャンスがあった

ら日本に行きたいと思います。残念ながら、今でもなお、中日両国の間にまだいろいろな誤解があります。この本を通して、両国の人民がお互いに理解を深めることができます。これから私はしっかり日本語を勉強し、いろいろな知識を身につけ、口先だけでなく、自分の行動で、中日両国人民の末永い友好に寄与したい。

・中国＝華東師範大学（上海市）、黄怡梅さん

表紙に書いてあるように、「この一冊で日本が分かる」。「政治」や「歴史」はちょっと難しいが、「四章」の自然の部分は本当におもしろい。一つの項目に俳句やイラストがあり、楽しい。私は新しい俳句を習った。

・中国＝天津財経大学（天津市）、熊瑾さん

学校で学んだ「日本」は文学や歴史などが多いですから、日本人の考え方と行動様式はなかなか理解できないです。日本語教材『新日本概況』が「現在の日本」と「日本人の心情」を紹介していただいたのが一番いいことと思います。大森さんご夫妻が、日本語を勉強している中国人の学生のために、日本語教材『新日本概況』を作成・寄贈したり、『日本語作文コンクール』を開催した活動を長い間続けてきたことに、「感想」より、「感謝の気持ち」がいっぱいです。本当にすばらしい本でした。

◆〈日本〉という国〉

・ナイジェリア＝森田誠亮（アブジャ大学日本語日本文化研究所、所長代理）

非漢字圏で日本語を専攻とする高等教育機関の目的の一つは、日本の政治・経済、社会問題、日本語、文

学、歴史、伝統文化などを一通り学ぶことです。それらすべてを網羅しています。

・**中国（福建省）＝黒岡佳柾**（福州大学、日本語教師）
政治、歴史、自然、文学、料理など多岐にわたり、魅力的で、新たな発見と驚きに満ちた内容がいっぱい。学生と教員が、様々な角度から「日本と日本語」を「共に学び、語り合う」ことが出来る教材です。

・**パラグアイ（アスンシオン）＝田村能子**（セントロホッカイドウ日本語教室）
様々な視点からまとめられた、とてもいい教材です。ルビ付きもありがたいです。

・**タイ＝運寿純平**（ウボンラチャタニー大学、日本語教師）
政治、経済から地理、伝統文化、文学、料理、日本人、日本語など、学生が興味を持ちそうな話題が幅広く網羅されています。

・**ドイツ＝菊地奈緒美**（ドイツＶＨＳ日本語教師の会）
『日本』を様々な角度から知ることが出来る良い教材です。ドイツやポーランド、ルーマニアの生徒にも紹介したいと思います。

・**アメリカ（カリフォルニア）＝久米英美子**（日本語教室主宰）
私が『日本』について知りたい事がある時にチェックする本です。生徒さんに説明する時にも、とても役に立っています。

・**トルコ＝浅野涼子**（アンカラ社会科学大学外国語学部日本語翻訳通訳学科）
『日本』について深く考えるきっかけになる要素が詰まっています。日本語の「重箱」のような一冊です。

・**日本（愛知県犬山市）＝土田敏子**（名古屋教育学院）
日本語を教えることは、日本文化や日本人の考え方などを教えること、です。日本語教師にとって、〝教え方の手引き〟です。

★電子書籍〈【日本】という国〉の感想（25カ国・地域の27人）（巻頭カラー頁参照）

・セルビア＝ミリツァ・ヴカソヴィッチ（ベオグラード言語大学日本語学科大学院・22歳）

日本語教材〈【日本】という国〉は読みやすくて、色々な面白い情報に溢れている本です。勉強の教科書としても自由読書の本としてもとても便利だと思います。私の誕生日が日本では「女の子の日」だということを知ってからこの祭りを好きになりましたので、「自然」の章の「春」の部分で「ひな祭り」を見つけた時はうれしかったです。セルビアはキリスト教の国ですから、日本のキリスト教の歴史を知るのが面白かったです。

・エジプト＝ヤスミーン・ザカリーヤ・ムハンマド（カイロ大学文学部日本語日本文学科・女・22歳）

〈【日本】という国〉というデジタル版の教材を作って頂いたご夫妻に感謝の気持ちを申し上げたい。こんなに詳しい内容の本を無料で手に入れることはなかなかない。内容のバラエティもすごいし、とても勉強になる。特に、六章と七章の『日本語』に興味があって、楽しく読ませていただいた。例がたっぷりで非常に役に立つ本だと思う。

・アゼルバイジャン＝イルヤソワ・ヒマハニム（社会人・女・23歳）

この教材がとても好きになりました。すべてがとてもよく書かれています。役に立つ本を読むのは面白いです。この教材を作ってくださってありがとうございます。嬉しくなりました。

・サンマリノ＝ジェシカ・チェケッティ（日本語の個人学習者・女・31歳）

記事は面白くて、私のように日本に興味がある人々には参考になると思います。私は日本語、文化と和食の話題を楽しみました。フリガナもあるし、昔話や俳句の例も書き、読書は順調に流れました。画像がある本は魅力的だと思うので、この本にもあっちこっちあったから、分かりやすかったです。特に、「自然」というところがよかったと思います。花、季節伝統、そしてどのように自然が人間と結びつけることが好きでした。ほかの民間行事を知ることはその文化を、遠くて見えるのに、近づいている感じがすると思います。

・ハンガリー＝マロキティ・ルツァ（カーロリ・ガーシュパール大学・20歳）

「〈【日本】という国〉を読ませていただきました。実に素晴らしい教材だと思います。私は今学期に卒業論文を書かなければなりません。〈【日本】という国〉も参考にさせていただきました。特に第一章を。私たちは大学で『日本を知る』という古い本から学んでいますが、それよりも〈【日本】という国〉を使った方がより楽しめるのではないかと私は思います。本に載っている写真も素敵ですし、「私を読んでください」という感じがします。こんなに良い本を書いてくださって本当にありがとうございます。

・ミャンマー＝レイレイピュー（丸紅ビネドー出張所・女・32歳）

日本は私にとって故郷とも言える愛国です。〈【日本】という国〉を読んで、日本にいた時体験できなかったことや、ルビ付きで、日本語を勉強している人々の為にはすごく役に立ちます。伝統文化等を目で体験することができましたこれからも、本というより「辞書」として大切に使わせて頂きます。

・チリ＝ポーレット・ドール（チリ大学・女・19歳）

電子書籍・日本語教材〈【日本】という国〉を、読まていただきました。日本の現状や環境について、色々な意味で勉強になりました。経済問題、社会問題、福祉問題、原爆、等。色々な問題を乗り越えたからこそ、日本です。文化や伝統、教育まで、各々の特徴が現在の日本という国を生み出しました。それらを、〈【日本】という国〉という教材にまとめた、と言っても過言ではありません。本当に勉強になりました。

・インド＝シュレヤ・デイウェ（プネ大学・女・20歳）

海外に住んでいる日本語の学生として、とても役に立つ日本語教材だと思います。教科書はもちろん大切ですが、このような教材があれば、日本語を楽しく勉強ができると思います。今日の日本社会や伝統文化などが日本に行って体験しない限りわからないと思いますが、この教材を読むとイメージができ、日本にいなくても日本のことがよく知ることができると思います。

その上、「初級者向け」と「上級者向け」の教材があって、とてもわかりやすくて、どんな段階の学生も読むことが出来ると思います。うちの大学では、電子書籍・日本語教材〈【日本】という国〉のことを是非知らせます。お二人は私のような日本語の学生の力になってくださっています。この教材はとっても役に立つことで、ぜひ私の友達にも知らせます。

・チェコ＝ヤクブ・ヴェンツル（パラッキー大学・男・25歳）

日本について、知らないことはまだ山ほどあるので、頑張らなければいけませんね。〈【日本】という国〉という教材は日本語の学習にとても役に立ちますので、一生懸命、勉強します。

・**ウクライナ＝ヴォロシナ・タチヤーナ**（ドニプロペトロフスク国立大学の卒業生・社会人・女・32歳）

〈【日本】という国〉という教材を読み始めました。分かりやすくてとても面白い教材なので、読書に夢中になって最後まで出来るだけ早く読み切りたいと思います。外国語を学ぶということはその国の言葉で話をしたり、文章を読んだり、書いたりすることだけではなく、「言語」を通してその国の人の国民性とかその国の文化、歴史、政治などを理解する事ですね。素敵な教材を作っていただいて誠にありがとうございます。

・**アルゼンチン＝ザイア・マリア・フロレンシア**（公務員・日本語学校・日亜学院・女・44歳）

勉強の材料はとても面白くて、新しいことを学ぶことができた。四章「自然」は、とても面白くて、新しいことを学ぶことができた。私は「季語」と「年中行事」から俳句の意味が分かってきた。「俳句」で色々な気持ちと感情を表すだけでなく、少ない言葉でたくさんのことを表現することができる。また、「俳句」で自然を味わうというのは、人々が詩情豊かな方法で毎日の生活を楽しく感じるということです。大森ご夫婦に心を込めた「日本語教材」を作って頂き、誠にありがとうございました。

・**イギリス＝ローレンス・ミラー**（リーズ大学大学院・男・25歳）

電子書籍「日本語教材〈【日本】という国〉」を大体読んだのですが、多くの専門語について説明されてあり、日本の勉強をする上で、大変有用だと思います。しかし、日本語の難易度が割りと高いため、初級者にとっては難しいかもしれません。私にも難しいです。

・**韓国＝金恵蘭**（昭和女子大学卒・主婦・57歳）

24年前に、昭和女子大学日本文学科（東京都世田谷区）を卒業して今、主婦をしています。日本語が大好きですが、生活に追われて、しばらく離れていました。『日本語を、また勉強したい。日本のことをもっと知りたい』と思っていた時、国際交流研究所の電子書籍〈【日本】という国〉のことを知って、ワクワクした気持ちになりました。

「教材」の「一章から十章」まで、全部をダウンロードして、『紙の日本語教材』を作りました。目で見たり、手で触ったり、日本語は楽しい！　とつくづく思います。私は日本語で夢を見ます。日本語が私の人生を豊かにしてくれるので、幸せ！　です。

『日本語の達人』を目指して、がんばります！

・**韓国＝イ・ジュヒョン**（国立ハンバット大学日本語学科・男・21歳）

「二章・三節」の「日本国憲法」は大変勉強になりました。それを読んで、「世界の日本語学習者」を対象にした《日本語作文コンクール》に応募しました。また、教科書にはない内容がありました。例えば日本の「昔ばなし」とか広辞苑の新語です。そして政治と少子化についてよく知る機会になりました。最も記憶に残るのは早口言葉です。何度も挑戦してみましたが難しくて結局できませんでした。

・**キルギス＝クバトハ・ヌルザット**（ナリン市子供教育センター職員）

無料で勉強できる日本語の教材を教えていただき、ありがとうございます。とてもうれしいです。これで勉強してみます。本当にありがとうございます。

・インドネシア＝マリア・フロレッタ（ブラウィジャヤ大学日本文学専攻・女・21歳）

「www.nihonwosiru.jp」でどこでも、いつでも、日本についての情報を読むことができます。日本の文化、和食、日本人の行動様式、伝統文化などについてたくさん書いてあります。日本語を勉強しながら、日本のことも色々わかるようになります。これで、外国人も楽しく日本語の勉強ができます。日本語を勉強している外国人の皆様もぜひご利用ください。

・アメリカ＝ジェンセン・ロー（プリンストン大学・男・21歳）

〈【日本】という国〉を拝読させていただきました。このような教材をずっと探しておりましたので、本当に役に立ちそうだと思います。私は、文藝春秋を読んでいますが、トピックをあまり説明してもらわないのであまりにも難しいと思います。内容的には、大森さんの作ってくださった教材はすごくよろしいと思います。

・ベトナム＝ディン・ティ・トゥ・ホアイ（佐賀大学大学院・女・26歳）

電子書籍の〈【日本】という国〉を拝見して非常に勉強になりました。読んでみて、「なるほど」と思いながら、政治・歴史・文化等の様々な場面で、知らない日本のことがいっぱいあると気づきました。もちろん、知らない日本の言葉もありますので、日本語の学習にも役に立ちます。

・エチオピア＝ベリフ・メスフィン（メケレ大学医学部・男・26歳）

文章は少し難しかったですが、細かく説明しているので、とても便利で、面白かったです。電子書籍の〈【日本】という国〉を参考にして、「桜」について作文を書いて、第二回・世界の日本語学習者《日本語作文コンクール》に応募しました。

・トルコ＝ヤーズ・アルプ・オクル（エルジェス大学・男・26歳）

〈【日本】という国〉の『「国」の形と仕組み』という部分を読みました。専門的な言葉が出てたので読むのはちょっと難しかった。しかし新しい言葉を見たから勉強になりました。私は元々大学で地学を勉強したので「国の形と仕組み」という部分に興味がありました。日本で研究生として地学を勉強しようと思っています。この部分にある単語は地学や地理学に関するのでとても役に立つと思いました。「川幅」や「急流」や「水力発電」など色々な大事な言葉を知りました。それに日本の国土について色々なことも知りました。地学や地理学に興味がある人はこの部分を読んだら満足すると思います。

・中国＝王志博（宇都宮大学地域デザイン学部・男・25歳）

〈【日本】という国〉という本は、素晴らしい本だと思います、自分の感想を少し書きました。

日本語の学習はもう4年間になった私は、〈【日本】という国〉という本を読み終わり、大いに勉強になりました。第一章から第十章まで読んだ上で、日本人の生活習慣、風俗、国民性などをもっと知るようになり、日本文化をもっと好きになりました。

日本文化の魅力はいっぱいあるが、美しい着物であれ、優雅な茶道であれ、美味しい日本料理であれ、全部日本文化の魅力の一部分だと思っています。その中に一つの共通点がある。それは、〝繊細さ〟です。この繊細さが、日本文化の特徴であり、私が日本文化で一番魅力的に感じるところです。〈【日本】という国〉という本こそが、私を改めてその〝繊細さ〟を感じさせてくれました。

・中国＝崔英才（淮陰師範学院日本語教師・女）

電子書籍の〈【日本】という国〉は、ウェブから無料で手軽に見られる、一・ルビがついていて、とても、便利です。二・日本語に接したばかりの一、二年生の大学生には、日本の常識を比較的、幅広く理解することができ、そこから興味を広げるきっかけとなりうる、そこで、今学期の私のクラス（二年生）の共同プロジェクトとして、〈【日本】という国〉の目次から、自分が好きな分野を1つ選んで、「電子教材の内容＋自分の調査」という形で、日本の文化の一面を調べ、ポスターにまとめる作業を進めた。

・スリランカ＝アエーシャー・ダルマシリ（ケラニヤ大学・女・22歳）

日本語を勉強する学習者にとって「宝物」だと思う。日本についてAからZまで、すべて書いてあるからです。誰にでも無料で使えることも大事なことです。このサイトはとても重要なのでもっとpublicityがあったほうがいいと思う。私はこのサイトを私の友達にも送りました。

日本の情報も知りましたし、夏目漱石、森鷗外や昔の文学のことも勉強しました。正しい日本語も身につけることができました。

・リトアニア＝マタス・シュカーヌリス（ヨナス・バサナヴィチュス高校・男・17歳）

〈【日本】という国〉を少し読んでみました。知らない言葉がたくさんありますから、私にとってちょっと読みにくいです。でも情報が多いし、面白そうだし、ふりがなもありますので、新しい単語を勉強しながらよく読むかもしれません。この本を知って、とてもうれしいです。ありがとうございます。

・ポーランド＝坂本龍太朗（ワルシャワ日本語学校・教頭・男）

電子書籍〈【日本】という国〉は、それなりにレベルが高い日本語学習者でもフリガナがあったとしても専門用語が多いとなかなか読み進められません。そのため難しい言葉には別途、横や下に簡単な日本語での辞書的説明を加えたらより多くの人が読めると思います。フリガナも入れるなら全てに入れたほうがいいと思います。一度出てきたときフリガナがあったから読めたとしても、そこですぐにその漢字を覚えられるわけではないからです。

例えば私の学生たちに読んでもらおうと考えた時、絵や写真があったほうがいいと思います。政治の話では総理大臣の写真、地震では地図など読むだけではなく視覚的な補助があるとより理解度が増すと思います。

・カザフスタン＝バウベククズ・ジャンサヤ（カザフ国立大学・女・23歳）

概ね読んだのですが、多くの専門語が説明されてあり、日本の勉強をする上で、包括的な参考書として大変有用だと思います。しかし、日本語の難易度が割りと高いため、初級者にとっては難しいかもしれません。我々世界中の日本語学習者のために今回のような機会を作ってくださって心から感謝申し上げます。

・ケニア＝ンジェリ・カゲマ（日本語教師・女・30歳）

ケニアでは日本語の読み物が少なく、日本語で話す機会も少ないため、こんな教材があることをありがたく思っています。

おわりに

国際交流基金の調査では、毎年、世界の１４０を超える国、地域で約４００万人が日本語を学んでいますが、インターネットなどの独学の日本語学習者を加えると、その数をはるかに超えていると言われています。

世界の日本語学習者が一人でも多く、〝日本ファン〟になってほしい！「日本と日本人をより深く知る情報」と「日本語の文章力を鍛える場」、を提供したい！

１９８８（昭和63）年夏、数カ国の留学生と出会い、「日本のことをもっと知りたい」という切実な声を耳にし、「そのために、夫婦で、できることがあれば挑戦したい！」と考え、「日本語交流活動」を決意してから35年が過ぎました。「幼なじみ」の夫婦が48歳で始めた活動は、「日本語を勉強してよかった」という世界の多くの人たちに支えられて、**〝楽しみながら、共に学ぶ〟**ことができました。

活動を長く続けることが出来たのは、運寿純平先生（タイ・ウボンラチャタニー大学）、笈川幸司先生（福島県・ＮＰＯ法人日本語スピーチ協会理事長）、黒岡佳柾先生（中国・福州大学）、森田誠亮先生（ナイジェリア・アブジャ大学日本語日本文化研究所所長代理）、段躍中先生（東京都・日本僑報社）を始め、多くの方々（後述）のご理解とご協力のおかげです。心から、感謝申し上げます。

２０１６年から、国際交流研究所のＨＰ（http://www.nihonwosiru.jp/）で無料公開の「日本語教材〈【日本】という国〉」は、幸い、世界の多くの日本語学習者・日本語教師に活用されています。

世界の日本語学習者や日本語教師との「メールの交流」を続け、**電子書籍「日本語教材〈【日本】という国〉」**が、より多くの世界の日本語学習者に活用してもらえるように、改訂版を発信したいと考えています。

◇35年間、世界各地の日本人教師や教育関係者の方々に、日本語の授業などで、各版の「日本語教材『日本』」を活用して頂いたり、大学等として《日本語作文コンクール》に取り組んで頂いており、側面から協力して頂いたおかげで、各国の日本語を学ぶ人たちとの交流を広げることができました。改めてお礼申し上げます。（敬称略）

・**中国**＝大川亜紀子、大川常（南京工業大学）、小椋学（南京郵電大学）、黒岡佳征（福州大学）、須崎孝子（貴州大学）、谷川栄子（外交学院など）、堀川英嗣（山西大学）、前川友太（河北工業大学）、八塚住子（浙江師範大学など）

・**台湾**＝津田勤子（致理科技大学）

・**タイ**＝運寿純平（ウボンラチャタニー大学）、横山英輔（タマラートスクサースクール）

・**モンゴル**＝八尾由希子（名古屋大学日本法教育研究センター）

・**ポーランド**＝坂本龍太朗（ワルシャワ日本語学校）

・**ドイツ**＝菊地奈緒美（ＶＨＳ日本語教師の会）

・**ハンガリー**＝若井誠二（カーロリ・ガーシュパール大学）

・**アメリカ**＝久米英美子（日本語教室）

・**パラグアイ**＝田村能子（セントロホッカイドウ日本語教室）

・**ブラジル**＝弓場稔子（ユバ日本語学校）

・**ケニア**＝大門碧（留学コーディネーター）

・**日本**＝笈川幸司（ＮＰＯ法人日本語スピーチ協会）、段躍中・景子（日本僑報社）、土田敏子（愛知県　名古屋教育学院）、藤嵜政子（㈱スリーエーネットワーク）

・**カンボジア**＝鬼一二三（国際日本文化学園）

・**コスタリカ**＝安永愛（日本語教室・ガッテンハポネス）

・**スーダン**＝石井一成（ハルツーム大学）

・**ナイジェリア**＝森田誠亮（アブジャ大学）

◎35年間には、多くの方々から、「ご理解・ご協力とご支援」を頂戴しました。（敬称略）

個人

・北海道＝野坂米子

・山形県＝齋藤太、水野清平、吉田時夫

・新潟県＝鈴木栄吉、多賀秀敏、高橋節子、三浦真

・茨城県＝海老原博・恭子、清水完洋、景山晃

・埼玉県＝辺刀芳雄、後藤江恵子、鈴木公子、菅沼洋、周劍龍・楊延慧、福田孝、藤木典子、増田麻美子、水野惠子、森西マスミ、山口榮一、吉田豊、湯本恒章

・千葉県＝石井宏明、大津浩子、北村康子、清田治史、佐久間勝博・ちさ、白井公枝、島崎元志、孫淑寧、多田真理子、野村美知子、平澤昭男、堀内正範、堀口伊都美、松原繁子

・東京都＝相沢峰、安斎和子、秋山耿太郎、荒谷三和子、伊藤政彦、五十川倫義、氏岡真弓、海老原畝美、遠藤英湖、大菅孝子、大野千賀子、大橋照枝、大橋京子、川浪年子、加島茂子、梶野明子、河上恭雄、北中一栄、栗原忠躬、桑田弘一郎、高媛、小林功、今野康子、櫻井美佐・美果、佐藤美佐子、清水勝彦、杉田美津子、住川治人、高野公子、武本孝俊、西澤良之、中江利忠、中島清成、中島茂子、中島俊明、成田正路、内藤武宣、永田隆子、永山義高、箱島信一、羽原清雅、林田英樹、藤嵜政子、藤里郁夫、古谷浩一、増渕直子、松田眞一・町子、松平謙次、真鍋一史、三露久男、三輪幸雄、村島章惠、森崎ノリ、山口清華、山口秀生、山下照雄、渡辺澄江、青嶋孝代、井上よし江、石戸喜久夫・紀久江、岩田佳子、上原栄子、奥田正博、鴛海量良、大和修、貝啓、加島茂子、菊池佐智子、黄川田南、久保美紗子、関史江、高野紀子、泊次郎、野村彰男、村野坦、

・宮城県＝布施谷安政、三浦七郎

・福島県＝菊池芳枝、齋藤正

・栃木県＝石野祐三子、高尾初江

・群馬県＝横塚昊・紀子

橋本千代、藤田實、前田昌子、天野明子、石川郁子、井上和佐子、猪原満也・喜久枝、
牛島静子、内川洋子、大岩美恵子、太田豊、岡田佳子、堅山寿子、北澤清子、倉島康雄、
倉田任子、小泉文子、酒井道子、坂巻延子、笹川浩一・政子、佐藤孝子、塩原法子、下島澄子、
鈴木貴志江、須崎キヨ子、高砂清子、田窪清子、竹野恵美、竹島正雄・謹子、谷藤正典、
田沼綾子、津田耕嗣・玲子、豊田彦治・郁、中村節子、長津浩介、二階堂禮子、橋本吉右、
長谷川道子、濱田朝子、廣瀬正・徳江、冨里善次・陽子、松井外恵、松蔭泰男・美奈子、
松島節子、松村キミ、宮崎照美、雇地千恵子、山本修司・邦子、和田和子

・神奈川県＝浅野勝人、石井功、井口梨花、池内文雄、石村実・日満子、石井一成、井出敬二、
稲富誠二・美佐子、大谷俊典、大林主一、大平力、大森春樹、川村恒明、河内イホコ、木村伊量、
久佐賀義光、小池美樹彦、佐藤禎一、佐藤麻子、佐野剛平、猿田逸央、塩入広中、志甫溥、
鈴木恒夫、高橋純子、寺澤行忠、戸枝嫩葉子、歳納明子、西田幸子・尚彦、本田来介、牧野光延、
村山孝喜、持田周三、茂呂禮子、八百屋千代子、八塚住子、横瀬一郎

・静岡県＝小泉恕美、重田達人、鈴木嘉弘、山崎正

・岐阜県＝太田道子

・福井県＝五十嵐嶺子

・京都府＝内海紀雄、大槻登美子、下村あい子、中山晶、羽賀田さかえ

・大阪府＝芦田悦雄、戸毛敏美、冨田健次、中嶋弘子、宮川文子、八木澄子、安延正和

・兵庫県＝大橋一喜、高松暘、徳岡貢

・岡山県＝植田貞子、桑山哲郎・皓子、坪井あき子、鳥越清恵、藤本紀久子、渡辺みさ子

・鳥取県＝森下みづ江

・富山県＝山瀬孝

・三重県＝稲垣逸夫、中森昌昭

・愛知県＝鷲見順子、谷川栄子、水谷淳子

・石川県＝角島記代子、小泉晶一、古賀克己

・奈良県＝太田佳生、伊藤文昭

・広島県＝桑田隆明、山本なほみ

・**香川県**＝石井一也、小野加代、橋本恭子、平井加奈子
・**愛媛県**＝常光謙輔、渡邊杜・美紀子
・**高知県**＝竹内功
・**福岡県**＝佐々木清、恒成巧・綾子、富澤義敬、西牟田耕治、前田晃、李暁燕、李紅蘭
・**長崎県**＝高橋一樹、武田明子、永田耕作、平石泉
・**宮崎県**＝清水新二郎、木村厚子、山口良輔
・**熊本県**＝伊黒昭文、大窪公子、門垣逸夫、谷川俊夫
・**鹿児島県**＝高橋加泰

◇アサキョウコ、アンドウミツグ、イズミサワトシエ、カンノユリコ、シミズミワコ、ツジテルヨ、フジシマアイ、ナカガワヨシフミ、マミアユウコさんら約30人は、住所が確認できませんでした。

・**中国**＝黒岡佳征、崔春愛、兪美香、李丹
・**韓国**＝金恵蘭
・**タイ**＝横山英輔、運寿純平
・**マレーシア**＝ヒーアンスン
・**ベトナム**（名古屋在住）＝チャン・トゥー・チャン
・**ミャンマー**＝チョチョキン

団体

国際交流基金、文化庁、かめのり財団、社会貢献支援財団、日中児童教育基金、全国ＰＨＰ友の会、まちだ地域国際交流協会、ベトナミスト・クラブ（「ベトナムに関心のある人々の集まり」）など。

二〇二三（令和五）年九月

大森和夫・大森弘子

編著者の略歴

○大森和夫（おおもりかずお）

昭和15（1940）年東京都生まれ。東京都・九段高校卒。早稲田大学第一政治経済学部政治学科卒。朝日新聞記者（大分支局、山口支局、福岡総局、大阪・社会部、調査研究室、政治部、編集委員）を経て、平成元（1989）年1月、国際交流研究所を開設。

◇大森弘子（おおもりひろこ）

昭和15（1940）年京都府生まれ。京都府・西舞鶴高校卒。京都女子大学短期大学部家政学科卒。京都府・漁家生活改良普及員（地方公務員・3年間）。
季刊誌『日本』、日本語精読教材『日本』、日本語教材『日本』、『新日本概況』、電子書籍・日本語教材〈【日本】という国〉各版の編集長。

《日本語作文コンクール》の審査（2003年6月）

出版した「日本語教材」など（2020年9月）

□活動

一・「日本語教材『日本』」の各版出版と寄贈、電子書籍・日本語教材〈【日本】という国〉を無料公開。

二・「留学生、中国の大学生、世界の日本語学習者」それぞれを対象にした《日本語作文コンクール》を通算26回開催、など。

□出版物

・季刊誌『日本』、日本語精読教材『日本』、『新日本概況』などの教材。

・各回の《日本語作文コンクール》入賞作文集。
（朝日ソノラマ、スリーエーネットワーク、日本僑報社）

・『世界の日本語学習者（64カ国・地域の112人）が書いた
ユニークな「日本文化」論』（朝日新聞出版、2020年9月）

・『世界（47カ国・地域）の日本語学習者の102人の「俳句」と日本語の夢』、
（朝日新聞出版、2021年7月）

・日本語教材〈【日本】という国〉（240頁、朝日新聞出版、2022年5月）

・『中国の大学生〝日本への思い〟と〝心の叫び〟』（34年記録。241頁、
日本僑報社、2022年9月）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

文部科学大臣表彰・国際交流功労者（2003年）
第十二回・東亜同文書院記念賞(2005年)
中国日語教学研究会・栄誉證書(2005年)
中国日語教学研究会・中国日語教育貢献奨(2006年)
平成18年度社会貢献者表彰・社会貢献支援財団(2006年)
第三回かめのり賞・かめのり財団(2010年)
国際交流事業助成・かめのり財団(2013年)
文化庁長官表彰　国際文化交流・多文化共生社会実現に貢献(2019年)
外務大臣表彰　日本と中国を含む各国・地域との相互理解の促進
(2021年8月)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

連絡先　190-0031　東京都立川市砂川町2-71-1 C621
Eメール　yuraumi@yahoo.co.jp
国際交流研究所URL　https://www.nihonwosiru.jp/

「世界の日本語学習者」と歩んだ「夫婦の35年」

二〇二三年十月三十日　第一刷発行

編著　大森和夫・大森弘子
発行者　国際交流研究所
一九〇―〇〇三二　東京都立川市砂川町二―七一―一―C六二一
制作　朝日新聞出版（メディアプロデュース部）
発売　朝日新聞出版
東京都中央区築地五―三―二　〒一〇四―八〇一一
電話　〇三（五五四〇）七六六九（編集）
電話　〇三（五五四〇）七七九三（販売）
デザイン　日向工房
印刷・製本　アイワード

本書掲載の文章・図版の無断複製・転載を禁じます。
乱丁・落丁の場合は朝日新聞出版業務部までご連絡ください。
「電話〇三（五五四〇）七八〇〇」
送料弊社負担にてお取り替えいたします。
ISBN978-4-02-100313-4 C0036
©2023, Published in Japan